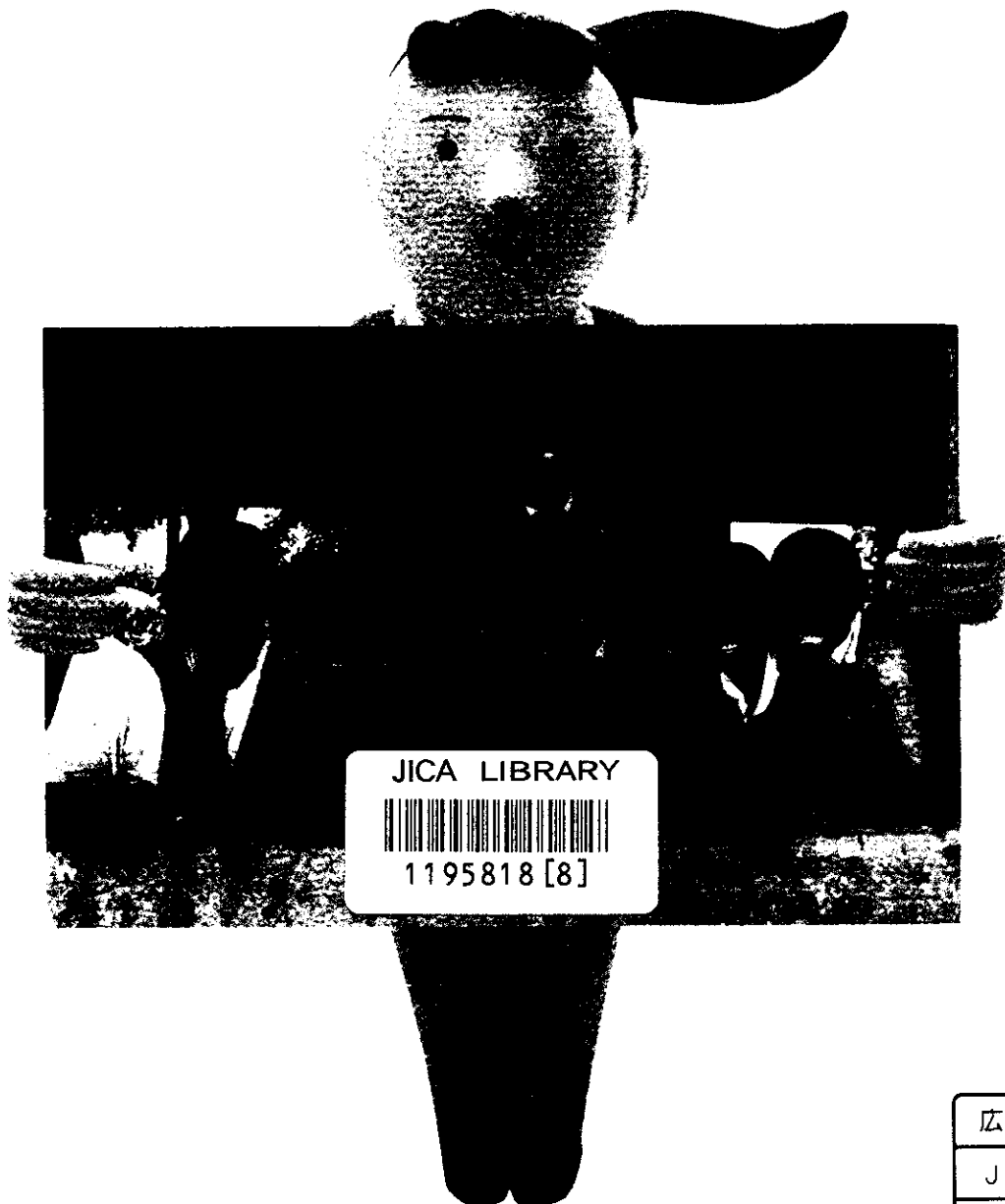
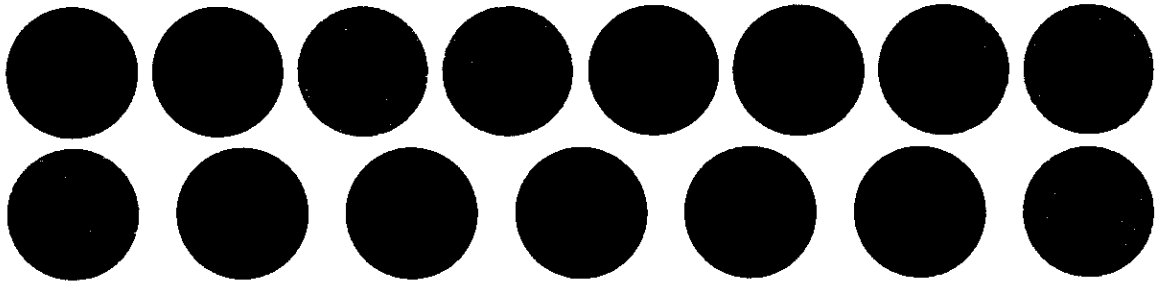


# 平成8年度 高校教師海外研修 ～授業に役立つ開発教育教材集～



国際協力事業団

広報
J R

RY

**平成 8 年度高校教師海外研修**

**～授業に役立つ開発教育教材集～**

**教室から地球への  
メッセージ**



1195818 [8]

## はじめに

国際協力事業団（JICA）では、広報活動の一環として、次の世代を担う高校生を対象とした開発教育の支援に取り組んでいます。

国際化の進む今日、世界各国の相互依存関係は益々強まりつつあります。日本の私たちの生活も食糧、資源など多くを開発途上国に依存しており、途上国の抱える様々な問題と私たちは無関係でいることは出来ません。また、環境、人口、食糧などの問題は地球上に住む全ての人々がいっしょに考えなければ解決できない地球規模の問題です。よりよい地球を創り出すためには、これらの問題を私たち自身の問題として考え、そして、その解決のためにひとりひとりが活動をする必要があります。次の時代を担う青少年を育成するための開発教育の推進が益々重要視されています。

JICAでは、毎年、開発教育支援の一環として、全国の高等学校において開発教育・国際理解教育の実践・研究をしている全国高等学校国際教育研究協議会（全国国際教）を中心とする先生方を対象に開発途上国の経済、社会、教育事情やJICAの実施する国際協力の現場の視察を目的とした研修旅行を実施しています。

今回の研修では、全国から132名もの応募があり、選考の結果、モンゴル10名、ホンデュラス・グアテマラ10名、タンザニア10名、合計30名の先生方に、7月から8月にかけて約2週間の研修に参加していただき開発途上国に対する見聞や理解を深めていただきました。

この度、研修に参加された先生方の有志を募り、研修で得た経験の授業での実践例、研修レポートなどを冊子としてとりまとめました。この冊子が開発教育・国際理解教育に取り組む全国の先生方の参考になればと願い、関係各位のご高覧に供したいと思います。

最後になりましたが、この冊子の作成のためにご多忙の中、執筆をいただきました先生方、そして、編集のためにご意見を賜りました先生方に厚くお礼申し上げます。

平成9年2月

国際協力事業団  
総務部長 小川郷太郎

## 目 次

序文	3
<b>第1章 研修成果を生かした授業実践例</b>	
特別活動、文化祭を利用した国際理解教育の実践	藤本 文昭 8
地球的課題と国際協力	松田 安弘 16
自立と共生	河村喜美江 24
「家庭一般」に開発教育を取り入れる試み	
野生動物保護から南北問題へ	三吉 章雄 30
「地球市民」への一歩	近藤 冴子 36
～タンザニア学習を通して～	
ケーススタディ	栗原希代子 44
～モンゴルを支援する10のプロジェクト～	
モンゴルって どんな国？	屋田 洋子 50
<b>第2章 研修参加の前提になったもの～実践展開例～</b>	
公民科の新設科目『時事問題』の構想	高野 剛彦 58
～開発教育の視点・方法を活かして～	
西条農業高校における国際理解教育の展開	中村 義一 64

### 第3章 研修レポート

ホンデュラスの赤い土とグアテマラの青い空 .....	萩原 茂	70
キリマンジャロのそびえる国タンザニア .....	斉藤 宏	76
～豊かな自然とGNP100ドルの生活とのアンバランス～		
モンゴル国ウランバートルを旅して .....	山崎 誠一	86
生徒たちへのメッセージ ～座談会～ .....		94

### 第4章 平成8年度高校教師海外研修資料

1. 募集概要 .....		102
2. 事前研修とその内容 .....		102
3. コース別日程／参加者氏名 .....		106
4. 開発教育参考資料 .....		112

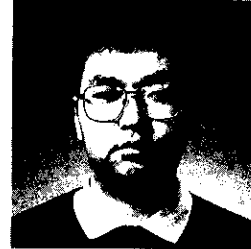


## 第1章

# 研修成果を生かした授業実践例



# 特別活動、文化祭を利用した国際理解教育の実践



愛媛県・今治明德高等学校矢田分校  
教諭（英語） 藤本文昭（ホンデュラス・グアテマラ班）

## 1. はじめに

本校の母体である今治明德高校（生徒数486人）は昨年創立90周年を迎えた。矢田分校（生徒数143人）は1993年に設立された主に進学を志望する生徒を対象にした小規模な学校である。国際協力事業団（JICA）主催のエッセイコンテストには分校設立以来参加しており、すでに年行事となっている。過去3回特選に選ばれ、その他支部長賞、学校賞などを受賞したことは当時の生徒たちにとって大きな自信と励みになり、また後輩たちにとって希望やあこがれになってきた。

これらの原動力になったのは生徒たちが自主的に取り組んできたアフリカへの援助ボランティア活動だった。この活動を通じて得た経験や感想を彼らの多くは原稿用紙に託したのである。生徒たちの能動的な活動が自らに感動を与え、説得力のある文章を書くことを可能にさせたのであろう。

本校の実態を見ると私には、国際理解教育の実践は英語の授業だけでは不十分ではないか、と思えてならなかった。なるほど

最近の中学・高校生用教科書にはさまざまな工夫がなされており、言語材料も国際理解を促すものが多い。ベルリンの壁崩壊を題材に取り上げ、第2次大戦後の東西両陣営の対立と現在の国際社会の現状を紹介したり、青年海外協力隊員の開発途上国での活躍を描いたレポートなどもある。十分に時間をかけ、これらの教材を利用すればよいのであろう。しかし実際には書かれた内容について深く考え、生徒間で討議するところまで掘り下げることは難しい。内容を和訳し、文法事項をおさらいしテストをすれば次の課へ進む。単発の、つまり一度限りの授業であれば可能かもしれないが、継続した取り組みとなると支障が出てくる。年間計画で決まっている教科書や副教材の進捗を考えると多くの時間をかけることができないからだ。

そこで、もっと生徒たちが能動的に活躍し、継続的な取り組みができる実践方法を考案してみた。学校行事（ここでは文化祭）、LHRを利用した国際理解教育、開発教育である。

## 2. 実践方法について

本校の生徒はおしなべておとなしく、やや活気に欠けるきらいがある。入学して5カ月あまりの高校1年生に「おい、11月の文化祭で何かやらないか?」と面と向かって誘いかけたとしても期待したような返事はかえってこないものだ。

そこで夏休み後半より生徒数名に声を掛ける、「LHRでいろいろ準備をして、文化祭で発表するってのはどうだい。この作業をすることで新しいものの考え方ができるかもしれない。これを『心の視野が広がる』っていうのかな」

不安げな返事がかえってくる。「でも何していいやら分からん……」

「大丈夫だよ。方法や分からないことは先生が教えるから。誰だって新しいことをやるときは不安になるもんだ」

生来にぎやかなことの好きな生徒は、未知へのチャレンジに不安を感じながらも好奇心に駆られて「それじゃあ、やってみようか」と動き始める。エンジンのかかった彼らに周辺の生徒への働きかけを依頼する。2学期が始まるとすぐ活動ができるように準備を彼らとともに進める。その時決めておいたことが以下の項目である。

(1)特別活動であるLHRを利用して今世界がどうなっているのか、日本の立場や役割が何なのかを知る。HR活動としての継続性を持たせるため「国際」という言葉にこだわらず、身近に起こるいじめ問題など差別にかかわる内容や地域の環境保全活動の

調査なども取り入れる。

(2)自分たちが調べたことをHR活動の成果として11月の文化祭で展示、発表する。

(3)クラス内で実行委員長を推薦し、文化祭展示実行委員会として準備にあたる。展示内容や展示物貸し出し依頼方法などは担任が指導するが、直接交渉は極力生徒が行う。

(4)この活動を通して感じたり、思ったりしたことを文章にまとめJICA主催のエッセイコンテストに応募できるようにする。

## 3. 活動開始

2学期最初のHRで次のように分担を振り分けた。

実行委員長、事務局長、会計、イラスト係、文章係、会場設営係。32人の生徒全員が何らかのかたちで作業に携わるように配慮した。

9月2週目のLHRでテーマを考える。展示テーマについては、JICA発行の「いま私たちにできること」というブックレットを参考にした。7月の支部事前研修でもらった小冊子だが、内容豊富で分かりやすく生徒にとっては適切な教材だと思う。9月当初には手元に1冊しかなかったので3章で構成されているこの冊子の各章冒頭部分を印刷して生徒に配った。それを読んで翌日までにテーマには何がよいかアイデアを3つ書いてくることを課題にした。

翌朝生徒たちが出したアイデアのほとんどは、「国際理解とは何か」「今私たち高校

---

生にできること」であった。与えた冊子のテーマと同じである。実行委員長に選ばれた生徒は、この理由を国際理解とか途上国、地球規模での環境問題について今まで考えたことがないからだ、と答えた。

さもありなん。極端な言い方をすれば、高校入試のために社会科や英語を勉強した以外に彼らと国際社会との間に接点を見いだすことは難しい。当地では東京や大阪などの大都市と違い市街地で出会う外国人の数も少ない、いてもAETや英会話学校の講師である。外国と直接取引のある仕事も少ない。自然と国際理解などという考えには疎くなる。彼らの見るテレビ番組や雑誌は流行の先端に行く外国事情は紹介しても途上国の実情には触れない。そこで起こる諸問題を身近なものとして扱うことに慣れていない。特に国際事情に興味を抱いた生徒でない限り、一般の高校1年生とはこの程度の意識であろう。

テーマは決まった。自分たちの知らないことに取り組むのだから、「いま私たちにできること」がよいと。安直に決定したようだが国際理解教育のスタートラインとしては申し分ない。生徒の中からもう少し具体的な案が出た。「展示するのなら政府主導（政府開発援助）のことだけでなく国連やNGOの活動も発表するべきだ」。この意見には皆賛成し、前掲小冊子P50にある資料公開、貸し出しを行っている各種関連機関に資料請求をすることになった。

生徒たちにとってこのような依頼書を書き、送るということは初めての経験である。ごこちない文章になったり、十分意を通じ

させることができなかつたりするが、しかしそれだけに学ぶべき点も多い。

他に提案され実行に移すことになったのが次の3点だった。

- (1)国際理解または日本の国際援助について校内意識調査の実施をすること。
- (2)JICA事務所訪問（国際援助の職場を訪ねること）。
- (3)ホンデュラス、グアテマラで撮影したビデオや写真を見て、文化祭での展示に利用できる材料を見つけること。

(1)については他の学年、併設中学にも協力してもらいアンケートをとった。質問内容は実行委員長、事務局長の2名が作成した。(資料1)

「識字率」という用語を多くの生徒が知らないことには、正直言って驚いた。この用語は同和教育などでも「識字学校(学級)」として出てくるはずだが、彼らの意識には十分残っていないようだ。

(2)JICA 四国支部訪問には2つの目的があった。ひとつは文化祭展示用のパネル、資料などを生徒自らが選ぶようにすること、ふたつめは、開発事業に直接携わっている人から直接生徒にODAや日本の海外援助について説明してもらうことだった。四国支部のご配慮と本校校長の開発教育に対する理解のおかげで3名の生徒代表を高松四国支部に連れていくことができた。後藤支部長自ら日本のODAの歴史とその現

状などを説明していただき、さらに生徒からの質問にも丁寧に答えていただいた。生徒代表はクラスで訪問報告をすることになる。彼らが知ったこと、感じたことを展示発表に生かすのである。(写真1)

(3)中米視察中に会ったシニアボランティア吉村雄策氏に電話とファックスで連絡を取り、氏が指導して現地ホンデュラス人が作った陶芸品を文化祭展示の一つに加えさせてほしいと依頼した。吉村氏の快諾により展示にホンデュラスの陶器が加わることになった。生徒たちが中米視察ビデオを見ながら思いついた企画である。(写真2)



写真1 後藤支部長より説明を聞く生徒



写真2 ホンデュラスの陶器の説明をする吉村氏

## 4. 展示準備

9月末、体育祭が終わるとすぐ文化祭準備にとりかかる。JICA 四国支部で聞いてきたこと、自分たちが集めた資料をもとに次の3分野に分かれて作業が始まる。日本のODA、国連機関の活動、NGOの活動。ODAについてはそのはじまりと現在までの実績、またマスコミに取り上げられる問題点などをイラスト入りで分かりやすく解説したものを模造紙いっぱい描いた。「これを見れば俺にでも(ODAのことが)分かるんだから、誰にでも分かるよ」と変な自慢をする生徒まで現れる。資料1のアンケート結果も拡大して表示できるようにした。作業時間はLHRと放課後の1時間。少しずつ形が整っていく。

この作業を通して彼らは、世界にどれだけ貧困な国があり、日本や他の先進国がいかに対応してきたか知るようになる。大きな世界地図を描いて年間国民1人当たりのGNPが500ドル未満の国を青色で塗りつぶしていく。「なるほど確かに貧乏な国は南に多いね」とか「オイルダラーのせい、中東は裕福だ」という彼らの声が聞こえてくる。なかにはODAについて日本の歴代内閣が目標値を掲げていたことに驚いていた生徒もいた。(写真3、4)

9月末あたりから各関係機関より資料提供または貸与の連絡がある。事務局を預かる生徒は返信作業に追われる日が続いた。

展示に協力または資料を提供してくれた団体は以下の通り。



写真3 大型世界地図作成



写真4 GNP500ドル以下の国を拾い出す

- 国際協力事業団
- 国際連合広報センター
- 日本ユニセフ協会
- 愛媛県国際交流協会
- 松山国際理解教育情報センター
- 国際交流基金アジアセンター
- 世界に結ぶ友の会
- アフリカ村おこし運動本部
- アフリカフレンドシップファンズ

地元愛媛県のNGOは県国際交流協会を通じて知り合うことができた。中国やモンゴルで緑化運動を進める「世界に結ぶ友の会」やアフリカマラウイでエイズ孤児に援助をしている「アフリカフレンドシップファンズ」などは特に展示用の資料やパネルを準備してくれた。生徒にとってこれがど

れだけ励みになったことか。

10月後半になってホンデュラスの吉村氏から20個のマグカップ、湯飲み、ぐい飲み、花器が送られてきた。「この箱が太平洋を渡ってきたんだ」。胸をときめかしながら包みを開く。見慣れぬスペイン語の新聞が詰まっている。一つ一つ丁寧に新聞紙で包まれており破損したものはなかった。自分たちが連絡をとって、ついに目の前にやって来たホンデュラス産陶器である。中米の小さな村に思いを巡らしつつクラス全員に披露する。吉村氏に製品の到着を知らせるお礼の手紙を送る。(写真5)

準備を始めて2カ月目の11月、展示品の作成も終盤を迎える(写真6)。パネルや文字だけの展示では寂しい、という意見か



写真5 中米からの小包を開く生徒



写真6 展示資料作成も終盤に

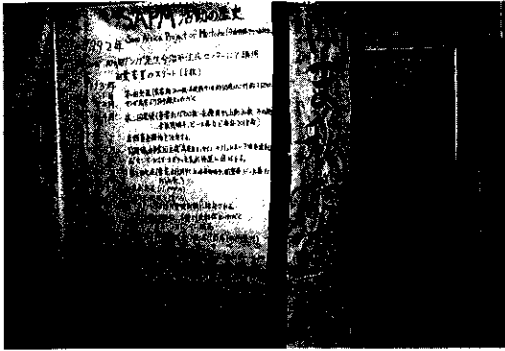


写真7 展示会場



写真8 ホンデュラス産陶器、グアテマラ民族衣装にはさまれたNGO資料



写真9 熱心に展示物を見る来校者

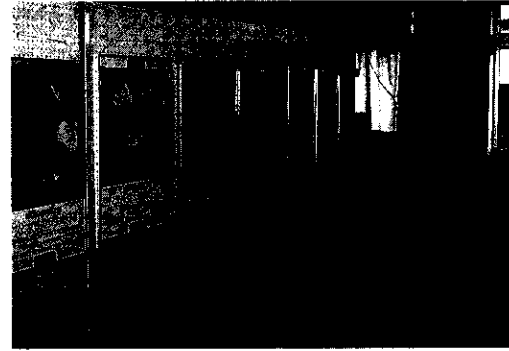


写真10 高校生にはユニセフのパネルが人気

らテレビを展示会場に持ち込みJICAやユニセフ作成のビデオを見せることにした。またグアテマラの熱帯病研究プロジェクトからいただいたチャガス病を媒介する「刺しカメムシ」の標本も展示した。この虫に注意を促すスペイン語の啓発ポスターを本校卒業生に翻訳してもらい、より分かりやすいものにした。できるだけ学校外の人たちに見てもらうため手製のチラシを作り、関係各所にも郵送した。(資料2)

## 5. 展示

11月13日、14日。展示会場には常時生徒が数名待機し、学園外から来た人からの質問に答えることができたようにした。平日開催だったので来校者の数こそ少ないが、訪れる人のほとんどが時間をかけ熱心に生徒の展示を見てくれた。ホンデュラス産の陶器に関心を寄せる人が多いのには驚いた。今治には焼き物に興味がある人がこんなにいるのかと思うほどである。現地の土の性質から製法に至るまで模造紙に書かれた説明を読み、「これは備前焼によく似てますね。制作指導をなされた人は備前焼



写真11 後片付けを終えてVサインを出す生徒

の心得があるのですか」、と生徒たちが当惑するような質問をする人もいた。(写真7～10)

## 6. おわりに

さてこの2カ月にわたるHR活動と文化祭準備を通じて生徒たちは何を学んだか。彼らは確かに能動的に活躍した、継続的な取り組みもできた。HRで「今私たちにできることは何か」を短い文章でまとめさせる。

### 生徒の声

- a. 今まで途上国のことは考えたこともなかった。
- b. 家の近くに南米から来た板金工がい

る。あの人に何か話しかけてみよう。

- c. 小さなことしか私たちにはできない。
- d. 今私たちにできることは幅広い分野のことを考えたり、悩んだりすることだ。
- e. 高校生が国際協力を叫んでもその影響力は小さい。
- f. プリント倶楽部に1回使うお金で家族が1週間生活できる国があるとは。もしそのお金を募金に回せたら、どれだけの人が助かるのか考えてみよう。

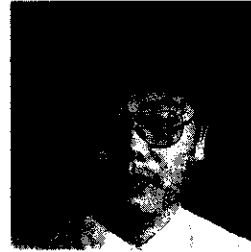
答えはさまざまであった。消極的、否定的な生徒もいれば、何かできることはと摸索し始めている生徒もいる。少なくとも彼らの多くが途上国の姿とその援助に取り組む人たちの存在をより身近に感じる事ができた。それはこの行事の準備活動から一人一人が得た財産である。(写真11)

この教育実践はまだ中盤を越えたところである。今後のHR活動を通じてさらに彼らの意識を高め、思考をより深めるようにしたい。春には自分たちの経験を生かし文章にまとめ、エッセイコンテストに応募する。その創作過程で生徒がどれほど呻吟するか。答えが定まっていなだけに難しい。





# 地球的課題と国際協力



大阪府立長尾高等学校

教諭（地理歴史・公民） 松田安弘（ホンデュラス・グアテマラ班）

## 1. はじめに

今までの授業（現代社会や地理）でも環境や人口・食糧・エネルギーを扱う中で、私たち（先進国）と開発途上国の繋がりや南北格差の存在やその要因など、いわゆる開発教育的な観点を取り入れてきたつもりである。しかしながら、常に「私自身どれくらい途上国を取り巻く社会情勢やそこに暮らす人々の生活や気持ちを理解できているのか」という不安や疑問を抱きながら授業をしてきた（15年ほど前マレーシアに行った時に私の理解していたプランテーションの形態と実際のそれが随分違っていることが分かり、百聞は一見にしかずというか実際の現場を見ることの大切さを痛感したことがある。といっても限界があり、また実際を見たとしてもそれはその時点でのもので、当然時間が経てば状況は変わってしまうので、上記の不安は永遠に解消されないと思うが……）。また、教科書や資料集にも「国際協力事業団（JICA）・青年海外協力隊（JOCV）」に関する記述も目立つようになってきたが、その内容は抽象的

であるし、さらにODA全般に対するジャーナリズムの評価（批判）も気になるところであるので、今回具体的に開発援助事業の現場を見ることにより、協力隊員の話聞き、また、それ以外の状況・情報をできる限り手に入れて多少なりとも開発援助事業の実態に迫り、さらにそれらを教材に生かすことができるよう資料収集をしてきたつもりである。

## 2. 開発途上国などに関する意識調査

次頁の表は本校生徒（1年生76名、3年生101名）に対して行ったアンケートの結果である。

国については、

- A：国名と場所はもちろん、それ以外のこともある程度知っている。
- B：国名と場所は知っている。
- C：国名は知っているが場所は知らない。
- D：国名さえ知らない。

の4段階で質問したものである。この4カ国は今回の研修派遣先であるが、予想通り、私の訪問したグアテマラ・ホンデュラスについては国名さえ知らなかった者が大

半で、同時に調べた位置確認（世界地図に着色させる作業）では、この2カ国を中米に着色した者はほんの数名で（正解者はグアテマラで1名のみ）、ほとんどの生徒はアフリカのどこかに着色している。

	A	B	C	D
モンゴル	44.1	38.4	17.5	0.0
タンザニア	0.5	5.1	89.3	5.1
グアテマラ	0.5	1.7	16.4	81.4
ホンデュラス	0.0	0.0	6.8	93.2

JICA以下の項目については、

- A：言葉も知っているし、ある程度内容も知っている。  
 B：言葉は知っているが、内容は知らない。  
 C：言葉さえ知らない。  
 の3段階で質問したものである。

	A	B	C
JICA	0.0	14.1	85.9
国際協力事業団	0.0	59.3	40.7
青年海外協力隊	29.5	50.0	20.5
開発途上国	20.1	52.9	27.0
発展途上国	75.6	23.9	0.5
先進国	77.1	22.3	0.6
ODA	1.7	24.4	73.9
NGO	7.3	47.5	45.2
政府開発援助	4.0	54.2	41.8
非政府組織	6.3	50.0	43.7
南北問題	39.4	57.7	2.9
南々問題	2.3	15.3	82.4
高校生エッセイコンテスト	10.9	24.0	65.1

これらの数値は1・3年の合算のものであるが、学年による差はあまり見られない。あえていえば、途上国と先進国の項目で3年生の8割以上の者がAと答え、南北問題

の項目では約5割の者がAと答え、何とか3年生の面目を保っている。とはいえ、これらを扱う単元（授業）に入っていなかったこと、また私がJICAの研修に参加したことを知らさない時点でアンケートを取ったことを差し引いても、高校生の認知の度合いとしては少し寂しい。しかしながら、次に提示した授業を受けた後には左側へシフトしているであろう。

### 3. 授業実践にあたって

#### (1)指導計画のポイント

環境、資源・エネルギー、人口、食糧問題などの地球的規模の課題に着目させ現代世界が地球的課題を多く抱えていることを再認識させる。そして、それらが出現した要因を考察させる中で、問題の根底には南北問題が横たわっていることに気づかせる。また、それらを解決するための取り組みなどについて考察させ、さらに国際協力において果たしている日本の役割などを理解させ、日本人としての生き方について考えさせる。

また、どの小単元でもできるだけ具体的事例を通して、生徒の主体性を発揮させるような学習活動を取り入れた。

#### (2)基本的な考え方

ア 世界の状況を把握させるためには、身近な事柄が、世界と深く関連していることを示すような資料を工夫することが有効である。

イ 一人一人が考え行動しなければならない問題であることを認識させるには、ディベートやロールプレイング、ランキン

グ、プランニングなど自らをその問題の中に置いて考えることができるような「参加型の学習」方法を用いた授業を工夫することが大切である。

ウ イメージを膨らませるために、実物を見せたり、VTRを利用したりすることも有効である。

## 4. 指導計画

(1)テーマ「地球的規模の課題と国際協力」  
学習指導要領「現代社会」の中の次の項目に対応する

- (2)環境と人間生活 ア 環境と生活
- (4)国際社会と人類の課題 イ 国際経済の動向と国際協力 (全15時間)

(2)各指導計画の主題と内容

A：人口問題 (3時間)

- \*世界の人口と先進国・発展途上国の人口問題
- \*人口爆発の要因と解決策
- \*出生率を下げるためのプロジェクト (本書P104参照) および中国一人っ子政策の功罪

地域で異なる人口問題を理解させるとともに、人口急増が食糧問題をはじめさまざまな問題の一因であることを理解させる。また、ゲームを実施し主体的に学ぶことにより人口問題の解決の難しさを理解する。

B：食糧問題 (1時間)

- \*飽食日本の実態

食糧自給率や貿易の統計資料から、日本の食生活が諸外国に支えられていることを確認し、その豊かさの陰で食糧難に

困窮する国・地域が多く存在することを理解させ、自分たちの生活を省みる。

C：資源・エネルギー問題 (3時間)

- \*鉱産資源の需給
- \*エネルギー資源の枯渇と代替エネルギー  
……別項目および資料1

化石エネルギーに頼る日常生活における問題点を整理した後、代替エネルギーについて討論させることによって地球的な課題を考えるために必要な見方・考え方を養うことを目指す。

D：環境問題 (3時間)

- \*熱帯雨林が消える (タイの場合)  
(VTR NHK特集より)
- \*熱帯林減少の要因と問題点
- \*多様な環境問題

さまざまな環境問題の中から熱帯林にスポットをあて、マングローブをはじめとする熱帯林減少の要因に我々の生活が深く関わっていることを認識させる。また、環境問題を放置すれば人類や地球の危機を招くこと、問題の解決は国単位の取り組みだけでは困難なことを理解させる。

E：南北問題 (1時間)

- \*南北格差と地球サミット。そして私は何ができる。

1992年地球サミットでの南北の主張の違いから、南北問題の整理を試みる。また東京研修時に福田紀子先生に紹介していただいた「エネルギー週間利用法」(本書P105参照)を用いて、南北格差の是正に向けて個人が行動することの大切さを考える。

F：国際協力 (4時間)

\*ODAとNGO

(VTR：(財)日本海事広報協会 国際社会と日本「日本の開発援助」NHK制作＝15分)

\*ホンデュラス・グアテマラについて

\*2カ国でのJICA活動の実例

……資料2

\*援助をめぐるさまざまな問題点を探るランキング……資料3

これは、「新しい開発教育の進め方」(古今書院)に紹介されているものである。授業では個人で考える時間5分、グループで考える時間25分という割合で活用した。実践法は同本を参照されたし。

開発途上国への経済協力の仕組みについて理解し、その理念を考える。また、2カ国について考察する中で途上国の実態に迫り、国際協力における日本の役割などを理解させ、日本人(個人個人)としての生き方について考えさせる。

(3)資源エネルギー問題(第2時)の指導案

A 指導目標

a 省エネルギーや、代替エネルギーの開発が求められる背景を多面的に考察し、それが、個々の日常生活に結びついていることを理解させる。

b 従来のエネルギーと代替エネルギーの評価(長所・短所)をロールプレイング形式で討議させ、それぞれの課題で問題を実感的に理解させる。

B 学習指導案(資料1)

C 成果と課題

a エネルギー資源の枯渇を放置すれば人類や地球の危機を招くこと、また国単位の努力では解決が困難であることなどが分かり、国際協力の必要性を認識させることができる。

できる。

b 石油や電力を具体的に取り上げることによって、主題をより身近なものとして考察させることができる。その結果、身近な場面で省エネルギーの実践ができることを認識させることができる。

c エネルギー問題は地球的課題で早急な対策が必要であるが、授業の展開の方法によっては、不必要な危機感を持たせたり、過度に楽観視させたりする場合があるので留意する必要がある。そのためには身近な問題として体感させるだけでなく、世界の資料に基づく分析的学習を付け加える必要がある。

d 代替エネルギーの種類と評価に関して、原子力発電については、その利用に対する賛否をディベート学習で実施することが可能である。

(4)資料2に関して

資料2について

この資料はシニア海外ボランティアの吉村雄策氏がまとめられたものから作成した。生徒にはこれ以外に2枚(B4)ホンデュラスの生活について吉村氏が綴られたものも配付した。

授業では吉村氏の指導の下で現地の人が生産した、ぐい呑み様のモノ(現地で吉村氏にもらう)とマグカップ(後日、今治明德高校の藤本先生が文化祭用に手に入れたモノを譲ってもらった)を見せたり、上記の3枚以外にホンデュラス・グアテマラでのJICAの活動概略および今回の研修で訪問した事業所・隊員の活動現場についてまとめたプリントを使用し、写真映像を織りまぜながら展開を進めた。

## 5. おわりに

社会科の授業、あるいは学校での授業は、知識一辺倒になりやすいといわれている。そうした中で今回「出生率を下げるためのランキング」「エネルギー問題を考えるロールプレイング」「援助ランキング」などを用いた参加型の授業を中心に組み立てた。これらを通じて、生徒は討論や話し合いをする能力、批判的に物事を考え吟味する能力、自ら積極的に行動する能力などを身につけることであろう。ただ気になるのは、評価の仕方である。学習のプロセスというのか、思考判断能力とか関心意欲に関することを、客観的に評価することに無理があるのではないかということである（何が主観的で何が客観的かという問題もあるが）。しかしながら、生徒に学習目標をき

ちんと示し評価の指標や基準を明確に示すことにより、より客観的な評価が可能になると思う。漠然とした部分を評価する限り指導目標に対して適切な評価をすることが必要である。また、自分自身の授業を見直すためにも、納得のいく評価をしていくためにも、授業作りの努力を続けていこうと思う。

ところで、この研修で手に入れたマヤの民族衣装ウィピルは世界の文化の単元で活用できたし、チャガス病を媒介するチンチエ（カメムシの一種）も大いに活用できた。また、今回提示した指導案に多少手を加え3年生の地理にも応用できた。これらの教材を作る機会に恵まれたこと、さらに全国から集まった先生方と情報交換できる環境を得たことなど、JICAのお陰と感謝している。



ルイス ボグラン工業高校にて

〈資料1〉学習指導案「エネルギー資源の枯渇と代替エネルギー」

指導内容	指導方法	留意点	資料など
(導入) 私たちの生活とライフライン	・新聞記事(阪神大震災)からライフラインの重要性を気づかせ、情報関係以外のライフラインは電気、ガスなどエネルギー源であることを理解させる。	・震災の同情に終わったり、事象に深入りしてしまうことのないよう留意する。	新聞記事
(展開) 発電  石油の埋蔵量・生産・流通  石油依存の問題点とその対応  代替エネルギーの種類と評価  代替エネルギーの地理的条件	<p>・発電に使用されるエネルギー源について問う。</p> <p>・資料から化石燃料の割合を掌握させる。</p> <p>・統計と地図帳により、石油の埋蔵量や、生産、消費が地域的に偏在していることを理解させ、石油依存の度合いが多いことに気づかせる。</p> <p>・「石油に依存することがどうして問題なのか」と発問し、石油の短所(弱点)を考察させる。</p> <p>・代替エネルギーの必要性に気づかせる。原子力発電が脱石油の一環として急速に伸びたことをまとめ、原子力の問題点を整理する。</p> <p>・ロールプレイング(電力会社の開発研究員と経営者との役割設定し、代替エネルギーの提案&lt;分布と立地条件を含む&gt;とその説明に対する質問・批判をする形態でロールプレイングを行い、代替エネルギーの必要条件を整理させる)。</p> <p>・さらに、社外の学識経験者や、生活環境を考える市民グループなどの立場の役割を増やしてロールプレイングを行い、実践的な体験を通して理解をさらに深めさせる。</p> <p>・地熱と太陽熱(光)について地図を用いて、その分布もまた地域的に偏在することに気づかせる。</p>	<p>・資料で歴史的な動きを見る中から、発電が化石燃料に依存する様子に着目させる。さらに、原子力の台頭がオイルショックとほぼ同時であることに触れる。</p> <p>・経済的なことがらに深入りしない。</p> <p>・枯渇だけでなく、石油依存が温暖化、酸性雨などの環境問題と関わっていることに触れる。</p> <p>・開発途上国の人口増加と経済発展によるエネルギー需要の増大にも触れる。</p> <p>・各開発研究グループから「代替エネルギーの提案とその説明」をさせる中で、互いに質問や批判の発言を求めたりしながら石油に替わるエネルギーの開発が進んでいることを特に化石燃料の弱点を克服するという観点から理解させる。</p> <p>・代替エネルギーの分布や立地条件について留意し、地図や表を用いて説明させる。</p> <p>・それぞれの代替エネルギーは、燃料としての代替機能はあるが原料資源としての代替はできないことに気づかせる。</p> <p>・自然環境に左右されることに着目させる。</p>	<p>統計資料</p> <p>統計資料 地図帳</p> <p>地図帳</p>
(まとめ) 代替エネルギーと省エネルギー  国際的な課題	<p>・代替エネルギーの開発課題と省エネルギーの必要性を理解させる。</p> <p>・開発途上国(地域)に対する協力、援助の必要性に気づかせる。</p>	<p>・エネルギー資源の枯渇に対しては、代替エネルギーの開発のような国家的見地からの対応だけでなく、省エネルギーのような個人的立場からの対応も必要であることを理解させる。</p> <p>・協力・援助は技術的な協力に限定されないことに留意する。</p>	

## 〈資料2〉 水のもれる焼き物

ホンデュラスの焼き物の特徴は一言でいえば「素焼きの上器」である。どこへ行っても素焼きした焼き物ばかりである。なかには絵を付けた品物もあるが塗料用のペンキを塗ったもので、いわゆる顔料を使ったものではないし上薬も施していない。高温で焼いていないから素地は焼き締まっておらず衝撃に弱い。水を入れて使えないのが最大の欠点である。

それでもこの焼き物が今でも全国各地で作られている。「技法も形状も昔からの伝統をかたくなに守って変えようとはしない」といえば当たり障りがないが、本当は技術や知識がここには入って来ていないので、原料の精製技術や上薬の手法とか、あるいは初歩的な機械化の技術も全く不足しているのである。

マヤ文明の遺蹟からでた焼き物を見たが、その頃のもの今の焼き物よりもっと温度が低いものの基本的には同じレベルの焼き物である。つまりその頃から技術は進歩していないのである。文明から隔離された生活をしているわけではないのに、どうしてこのようなレベルのまま今に至ったのか分からない。

私の所属する「零細企業援助計画」事務所の人たちは、外国製品が輸入されるようになったので、このままではこの国の焼き物が負けてしまい、売れなくなると危惧を抱いている。事実その通りだが、あまりにも外国の焼き物とはレベルの差がありすぎるので勝負にならないというのが私の感想である。もちろんこうした素材で伝統的な焼き物であってもよいと思うが、一方ではもう少し高度で実用品になる焼き物も作らないといけないと思うわけである。たとえば陶工たちの家庭で使っている食器は、コップも皿も丼もすべてプラスチックか、外国(中国)の磁器か、ガラス製品である。陶工たちは自分の作った陶器の食器を日常使っていないのである。

陶器の技術を教えている学校は、知る限りでは3校ある。その学校での技術教育の程度が低いことも問題である。20年前に日本の青年海外協力隊の援助があった美術学校へ行ってみたが、当時日本が供与した200万円ほどの機械類は遊んでいるし、日本へも研修員を送り込んでいるが、それでも上薬を使ったり、高温で焼く製品を作る実習はやっていなかった。そういう技術は取り入れていないらしい。結局、技術を知らないからだと思う。

ホンデュラスの焼き物の窯は、普通の建築用のレンガで作った簡単なもので高温(1000℃以上)で焼ける窯ではない。いわゆる耐火レンガで作った窯ではない。燃料は松薪を使って焼いている。温度は600~700℃くらいと推定している。高温で焼く窯がないのは耐火レンガがないことも一つの理由かもしれない。耐火レンガを必要とする産業、例



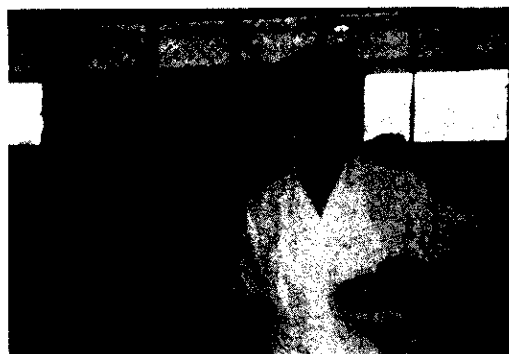
えば、鋳物産業とかガラス産業があればもっと事情は変わっていたと思われる。この国のセメント工場では外国から輸入した耐火レンガを使っている。

粘土は近くの山や野原の低地に堆積した粘土を掘ってきて使っている。練るのは木の棒で叩いて練るのが普通で、足で練ることはまれである。手で練るとき空気を抜く練り方は知らない。土の中の異物を取り除いたり小石を除いたり、ふるいにかけることをしないで使っているが、それでも温度が低いから、目立つような欠点は発生しない。粘土の条件としては粘り(可塑性)さえあれば使えるのである。あまり粘りのある土は作りにくいので砂を除粘材に混ぜて使っている。土の呈色は当然鉄分が多く含まれているので、黄土色である。白い原料はない。

成形技法は土の紐で作る「紐作り」や、足で蹴る「蹴ろくろ」を使って作っている。石膏を使った「流し込み」の成形は地方の産地では使っていない。これらの技法で作る製品はすべて肉厚があり重い。粘土は精製も、粉碎もしていないし、蹴りろくろの手許が不安定で固定していないことなどの理由のために薄手のものはできないのである。

ホンデュラスの焼き物の彩色は、顔料の絵の具を使ったものはない。いわゆる塗料用のペンキを使って絵を描いたもので、焼いたものではないことは先に述べた。だから色は鮮やかでペンキの色そのものである。顔料のように温度の影響は考えなくてもよい。この手の彩色は主に、鶏、人形、花瓶などに付けられている。絵筆は油絵に使うものを使っており、日本のように筆の先端がとがった筆(面相筆)がないからあまり繊細な絵は描けない。

こうした焼き物をもう少し実用として使えるものにするために、ボルベニールという陶器の産地で指導を行ってきた。最近では高温に焼いたものができるようになり、上薬(灰ぐすり)をかけた製品もできるようになった。今後はこうした製品を作る技術を、どの程度自分たちだけでやっていけるかが、この国の陶器作りの課題である。技術や知識はまだ低いし、原料や資材が少ない国だけに、自分たちでやっていくには、まだとても不安な状態である。



〈資料3〉

援助予算の配分

日本のODA予算はこの10年で急速に拡大し、アメリカを抜いて世界最大になりました。今年度の予算は約100億ドル（1兆2000億円）ですが、100億円ほど予算未消化で残ってしまいました。この100億円の予算配分をするにあたって、以下の援助内容に優先順位を付けなさい。（ランキング）

1：援助はしない

援助は、政府を通じて行われるもので、開発途上国の権力者や特権階級を豊かにするだけで、現地の住民に届かない。さらに援助は実は日本に利益が還元されるだけで、途上国の自立に役立っているわけではない。日本国内の社会福祉のために回した方がよい。

2：

援助はするが、日本の若者が発展途上国の学校で学んだり、農村や街の生活を体験したり、ボランティア活動をするための奨学金に使う。また、そのようなプログラムを持っているNGOへの資金援助に回してもよい。

3：アフリカ某国

国立大学を充実し、学生のヨーロッパ留学の奨学金に充てる。

低所得国。特権の支配層が政治、経済を支配している。大学進学率は5%。農産物や鉱産物を輸出しているが、日本との貿易は少ない。

4：アジア某国

乳幼児死亡率を減らすため、保健所や上下水道の建設に使う。

低所得国。民主主義がまだ未熟である。ワイロも少なくない。国内の資源は先進国の食糧（バナナ・エビ）や原料（銅・木材）として安い値段で輸出している。

5：東ヨーロッパ某国

経済の民主化、市場経済への移行のために使う。中高所得国。社会主義政権が崩壊した。日本とは今まで殆ど交流がなかった。計画経済が破綻して、モノ不足、インフレなど経済上の混乱が続いている。

6：アフリカ某国

小学校（義務教育）の建設と教科書や文房具の支給に使う。

最貧国。部族社会の伝統が残り、民主主義はかなり遠い。小学校就学率40%。粗放的な農業（とうもろこし）と遊牧に頼る経済である。気候の変動による飢饉が頻発している。

7：中南米某国

熱帯林の地下に埋蔵されている原油の採掘に使う。

低所得国。軍事政権。地主、財閥とも政府を支持している。親日的でもある。世界の石油資本がこの国の石油資源に注目している。豊かな日本が石油を買ってくれば、貧しい国民の暮らしも良くなる。

8：オセアニア群島の某国

先進国から観光客を誘致するリゾート建設に使う。

低所得国。王・貴族・平民の3身分からなる社会を形成。国民は王を深く信頼している。国民は漁業で生計を立てているが貧しい。きれいな海は十分な観光資源となる。

9：アジア某国

外国企業を誘致するための臨海工業団地の造成に使う。

中所得国。王政を敷いているが、政治は安定し、援助効果も期待できる。米作中心の農業国であったが、輸出主導型の経済に転換しようとしている。国民の貧富の差が大きい。



# 自立と共生

## 「家庭一般」に開発教育を取り入れる試み



埼玉県立和光国際高等学校

教諭（家庭） 河村喜美江（ホンデュラス・グアテマラ班）

### 1. はじめに

1994年度入学生より現行の教育課程が実施され家庭科は男女必修という新しい時代を迎えることになった。かつての家事裁縫的なイメージから家庭科は、「家庭生活をグローバルに見つめられる自立した生活者を育てること。意欲的、創造的に生活できる力を育てること」に重点がおかれている。また、本校は「国際化・情報化に対応し、21世紀をリードする人材を育成する」という趣旨のもとに普通科・外国語科・情報処理科の3学科併設の開校10年目の学校である。また、「国際化社会で活躍できる、個性豊かな人間を育成する」ことを目標に国際理解教育・国際交流を積極的に推進している。このような新しい時代を迎えようとしている時このような環境の中で今回の国際協力事業団（JICA）の「高校教師海外研修」に参加できたことは大変ありがたいことであった。

### 2. 家庭科の男女必修と開発教育

家庭科が男女必修教科となった所以は、いわゆる女子差別撤廃条約とのかかわりで男女同一の教育課程を制度として確立する必要があるが、家庭をとりまく環境の変化や情報化、国際化、女性の社会進出、都市化と過疎化などの現象が進展する中で、どのように家庭を築き経営していくかは、わが国の将来にとって大変重要な問題であるとの考えによるものである。

生徒の関心はとかく、先進国に向けられる傾向が強く経済的な豊かさがすべての豊かさにつながり、特にファッション、住居、食文化などはあこがれとしてみる傾向が強い。世界一金持ちといわれている日本の若者は空腹感を知っていても飢餓感を知っている者はいないであろう。しかしその反面、拒食症患者は年々増加傾向にあり、どこか大きくバランスを欠いているように思える。開発途上国の上に成り立っているわが国の食糧事情など第三世界と私たちの暮らしがどのように関連しているのか、そこにある問題、課題に気づかせて、意欲的・創

造的に生活できる力を育てることにポイントをおきたい。

### 3. 単元と内容

(1)単元：家族と家庭生活

時数：20時間

学年：2学年

科目：家庭一般

※授業は2時間続きで実施

(2)単元設定の理由

A. 充実した人生を送るためには、生活の自立や、男女の相互理解、次代の子供の保育、家庭人、社会人としての資質の育成などが必要である。

B. 人口の高齢化や経済社会の成熟化、人口問題、貧困、飢餓、国際社会の流れの中で、自己実現を図って充実した生活をするとともに、社会全体の活性化に貢献できる資質を育てる。

学習項目	学習の展開および課題・視点
1. 多様化する家族関係	○多様な女性と男性の関係を知りこれからの家族のあり方について考える
2. 家族と法律	○旧民法と新民法の比較 ○夫と妻に関する法律（財産・婚姻年齢など） ○親と子に関する法律（実子・養子・親権者など） ○扶養の義務・夫と妻の姓・その他
3. 職業労働と家庭	《ホンデュラスとグアテマラから学ぶ》 ○働くことの意義を把握し、職業労働は人間が生活していく上で重要な役割をはたしていることを知る

	○性別役割分業を考える ○男女は対等な関係であり、自立と共生のための思想と技術、生活文化の向上についてグローバルな視点でとらえるように留意する ○女子差別撤廃条約、男女雇用機会均等法が制定された経緯について知る ○世界はGNPという基準で先進国と途上国とに分かれているが日本は途上国とどのようにかかわっているか。日常生活から気づかせる ○何を目指して生きるのか？何を目的に働くのか？自己実現について考える
4. これからの家庭の課題	○社会の変化と家庭を考え生まれた家族（定位家族）から産む家族（生殖家族）を考えあなたはどんな家庭生活を営みたいか
5. ライフサイクル	○個人のライフサイクルを作成する
6. 高齢化社会と家庭生活	○人間の「老化現象」を理解する ○日本の高齢化の現状、将来の高齢社会の状況と問題点を理解する ○福祉社会のあるべき姿を整理する

### 4. 学習項目3「職業労働と家庭」における授業実践

「ホンデュラス」と「グアテマラ」から学ぶ  
今回の研修では多くの現地視察やJICAで働く方々、現地の人々など実にたくさん  
の出会いがあった。途上国に暮らしている日本人にとっては思いがけない苦勞も多い

ことだろう。しかしその中での自己実現や異文化を理解し、社会貢献（国際援助）を一つの職業として選択した方々の自立（精神的・経済的・生活的）した生き方を学んでいく。

(1)「職業労働と家事労働」1、2時限目

目標

- ・職業労働の目的を理解する
- ・途上国の文化や事情を理解し日本の経済協力と政府開発援助（ODA）と先進各国の政府関係のボランティア団体概況について理解する

- ・先進国、途上国の性別役割分業について分析、考察する

A. 職業労働とは何か、家事労働とは何か。無償の労働と有償の労働について歴史的な背景から考える

前近代的な社会では、裁縫、調理、洗濯、保育、介護などは生きるために必要な仕事として家事労働、職業労働の区別はなかった。社会の近代化にともなって、主に男性が従事する有償の労働と、女性が従事する無償の労働に分離する。女性の貢献に対する認識。（資料1参照）

B. 職業労働の目的は何か

働くことは生きていく上で大きな意味を持っている。

- ・生活を支える→経済的基盤
- ・人間的に成長させる→自己実現
- ・人とのつながりができる→社会参加

C. 途上国の諸問題と日本の経済協力とODAについて知る（VTR・写真省略・資料2参照）

途上国の問題点として経済、教育、学校、

識字率、保健、医療、港、鉄道、河川、道路、電気、水、食糧、貧困、生きる目的、などから貧困の原因、就学率の低い理由、特に女子の識字率の低い理由、経済状況のかわらない原因などについて考える。またODAの種類、人的・物的・経済的援助について説明する。

D. 先進国、途上国の男女の役割について分析、考察する（グループ別学習）—授業内容、提示資料の分析

《生徒の分析結果から》

項目	分 析	
	先進国（日本）	途上国 (ホンデュラス・グアテマラ)
教育	男女の差はない	男子の方が就学率が高い 女子の識字率が低い
保育	おもに女性であるが、その場合経済力は男性が負担していることが多い	男性が自己の都合で別の女性の所へ行ってしまう残された女性が育てることも多い
賃金	男女という違いで多少は差がある 機械化、社会化、合理化がかなり充実している	男性の方が教育を受けている分お金になる仕事につける
家事	多くは女性がするが最近では男性もするようになった	食事、洗濯、畑、家畜の世話など女の方が大変そう
職業	生きがい、生活のため自分の能力を生かす 遊ぶため、家族のため、欲しいものを手に入れるため、日本の発展、自分のためでもあり社会のためでもある	生活のため、自分のため男は力仕事

《生徒の考察結果から》

(ホンデュラスとグアテマラ)

- ・子どもが労働力のため教育が充実しない。だから識字率が上がらない

- ・教育者（特に母親）の教育レベルが低い  
ためいつまでも教育レベルが上がらない
- ・男性はしっかりした家庭を持つわけではないのに女性より多く学校教育を受ける機会が与えられたり収入を得られる機会が多いのは男性にとって都合が良すぎる。男性は身勝手
- ・男尊女卑が強く男女差別があたりまえになっている
- ・女性は生活のためだけに働いている  
(日本)
- ・女性は自分の都合で職業労働し家庭に入ろうとし、都合に合わせて男女平等の権利を主張する、すなわち甘いと男性側は指摘する
- ・男は家事や育児をしていることを知られることが恥ずかしいという意識がある
- ・時代背景と古い習慣から生まれた男のプライドで、男は家族を養わなくてはいけない、女は子どもを産み育てなければいけない、と生育歴の中で埋め込まれてしまうために性別役割分業の意識が強く残っている

## (2)「自立と共生」3、4時限目

### 目標

- ・女子差別撤廃条約、男女雇用機会均等法について知る
- ・国際協力はどうあるべきか考える
- ・労働のあり方を考える

### A. これからの家事労働と職業労働について考える

- ・1979年以来世界の女性に女子差別撤廃条約により男女平等を手にいれた。このことにより「機会の均等」から「結果も平等」になった。すなわち、性別以前にお互いの生き方を大切に固定観念にとらわれず自

分の人生をしっかりと歩むことが大切であることを知る

### B. 職業労働としての国際協力のあり方を考える

- ・陶器生産、シニア海外ボランティアで活躍する吉村氏は、定年後スペイン語を学び陶器生産改善技術を途上国に伝えている。その意欲と生涯現役でいる姿を学ぶ。
- ・農業開発センター（CEDA）に働く5名の長期専門家がプロジェクト方式技術協力により派遣されている。一般的に、多くの国では、日本での研修に参加しても、帰国後習得した技術、知識をまわりの人に伝えず、また、国家のことよりも個人の事情を重視する傾向が強い。また、プロジェクトでは灌漑排水技術を高めるだけではなくホンデュラスの将来や農民の社会的、生活的意識を高める教育までも心配しなければならない苦労話と生命維持農家や中小農家の貧困の現実を知る
- ・国立西部教員養成学校に青年海外協力隊員として理科と体育で2名が派遣されている（写真1）。インディヘナの人たちを対象とした学校で、卒業後は出身地の村に戻り地元の小学校の教員になり村の発展教育に努める目的で22年前にアメリカが建設



写真1 国立西部教員養成学校の生徒と青年海外協力隊員を囲んで

---

した全寮制の教員養成学校だが、現実には十分な雇用がないなどの理由で20～30%の生徒しか地元に戻らない。建設の目的と人的、物的援助のあり方について現実を知る

・農務省普及局に勤務する大田隊員（野菜）はコーヒー豆の木に木陰を作るクラビレアの苗を作り現金収入を得ることを教える。植林する意識がないところに植林が成功例として人々に伝わる喜びや“農業という人間の原点の仕事をしたかった”という彼の人生観と職業感を学ぶ

・熱帯病研究プロジェクトに九州大学医学部、長崎大学熱帯医学研究所などから専門家として派遣されている。グアテマラは、法定伝染病の治療でさえ、医療機関の不足で自然治癒に頼っている。呪術師や薬草（マヤ）も現存している。その中でチャガス病の研究と血清診断法を研究している。この病気は土壁に住む貧困者がかかるマイナーな病気のため研究も遅れ、しかもビジネスにもならない。しかし感染を知らない人々の売血により全世界に広がる可能性もあり、億単位の感染可能者を救済する可能性を秘めている。専門職の生かし方と社会的位置づけを知る

・現在協力隊員は世界55カ国（1996.3.31現在）に派遣されており、その活動は約160職種に及ぶ。年々女性の派遣者が増加傾向にあり現地の人々とともに暮らしている。ホンデュラスでは現在(1996.7.1)男性37名、女性44名が派遣されている。途上国に多くの女性が派遣されている事実を知り、人間らしいのびやかな働き方が豊かな人生を作っていくことに気づき、自らの進路を考える

C. あなたは何を目指して生きるのか、何を目的に働くのか、個人の考えをまとめる

・将来どんな社会貢献を、国際協力ができるのか

・社会生活の中でどんな男女の関係を作っていきたいのか

〈以下は生徒のまとめより〉

・この授業で青年海外協力隊のことをはじめて知った。

・人のためになりたいとか困っている人（国）を助けたいと思う気持ちはすごく大切だと思った。

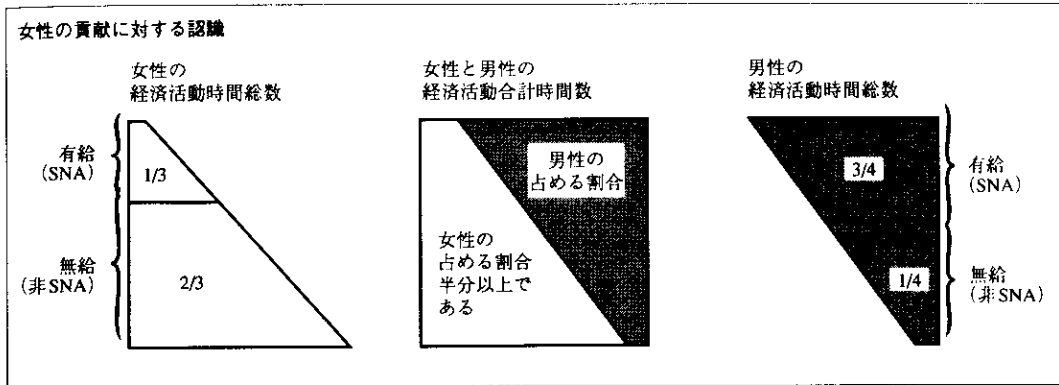
・自己実現が自分のためだけではなく人のため世のためにつながることを改めて考え直した。

## 5. おわりに

家庭科は生きること、暮らすことの意味や目標を考えさせる極めて思想的であり価値観形成の教科である。職業労働の経験の無い生徒に意義や目的を考えさせることは非常に困難なことであった。しかし私たちの暮らしが世界と結びついている今、学ぶこと、生きることは地球的規模の視野や思想が必要であろうと考える。

多くのことを伝えたい、考えさせたい一心で盛りだくさんの授業になってしまったことは反省すべき点である。しかしその中のいくつかが同じ地球上に生きる者として今の自分たちの生活とのギャップに気づいてくれれば良いと思う。今高校生として考えたことを将来の課題として持ち続けてくれれば今回の研修や授業の成果は得られたと思いたい。

〈資料1〉



UNDP「人間開発報告書95」より

〈資料2〉

ボルベニール村の風景

シグアテベケの町から西南へ7～8kmの山間に人口600人余りのボルベニール村がある。ここが僕の職場のあるところである。150人ほどの陶工たちが集落しており、陶器を生産している。ここを仕事場にしたのは、陶器の産地となっていて陶工たちが比較的狭い地域にまとまっているので仕事の指導に適していたことや、仕事場になる適当な公共の建物があったことが主な理由である。もう一つの理由は、シグアテベケという町は、野菜のいいものが生産されていて他の地方より生活がしやすいだろうと考えたからである。

住宅はシグアテベケの中心から西方の山手に大きな家を借りて、そこから仕事場へ6kmほどの道程を車で通っている。ボルベニールに通じる道は、舗装された幹線道路が南西に貫いていて、ラ・エスペランサを経てコパンに通じる。この道を通る車は日本のように多くない。車のほかに荷馬車も通る。牛2頭を頸木でつないでいる牛車である。牛はよく訓練されていて主人の号令によく従う。御者は細い棒で牛の尻を軽くたたいて狭い道を曲がったり、正面に立って棒で後ずさりさせたりできる。この牛車で木材を運んだり、石や砂など建築用の材料を運ぶが、もちろん陶器も運ぶことがある。この仕事は男の仕事である。

朝は雑貨や食料品の配達車が仕事場の近くにやってくる。雑貨屋（プリベリア）に商品を卸していく。プリベリアは住宅の一部を売り場にしており、その奥が居間である。この小さな村に同じ規模のプリベリアがまとまって5～6軒あり、同じような品を並べているが過当競争があるようにはみられない。

男は山仕事や、建築の仕事に携わっている者が多い。男たちは、〈蛮刀〉ともいうか〈マチュETTE〉という刃渡り50cmくらいの山刀を腰にさげて仕事に行く。日本の〈なた〉に相当するものだがこれで草刈りもするので、なたの使い方とは異なる。山仕事に使う鋸や、草刈りに使う鎌のようなものはまだ見たことがない。

村には馬もいて日本で見ると一回り小さい。乗りものに使ったり、薪を背負わせて運ぶのに使われるが、いわゆる馬車としては見かけない。馬や牛は、ふ

だん放し飼いであるから一日中、野や道路脇の草を食んでいる。この家畜が家の脇や道路や草むらのいたるところに糞をしているのには閉口する。人間が通るとき糞を避けて歩くのがむずかしいくらい多く落ちている。車を止めて降りようとするとそこに糞があつたりする。乾季はまだよいが、雨季（5月～9月）には、道路に排水溝がないので、雨が降ると雨水は牛や馬の糞を洗いながら道の真ん中を流れる。

村の子供たちは、朝7時半頃小学校へ行く。小学校も幼稚園も仕事場から見える距離にある。小学校は120名で、6年まであり、12時半には勉強は終わり帰っていく。勉強時間はとても短いし登校日も日本より少ないように思う。小学校を終えて中等科へ進む者は非常に少ない。ここの男の子はなぜかみんな長ズボンをはいており、半ズボンははいていない。なかには裸足の子も結構見かける。

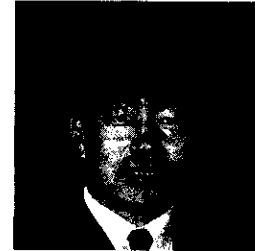
ボルベニールの女性には陶工として働くものが多い。人口の4分の1が陶工で、その8割が女性である。原料は近くの野や山から粘土を掘ってきて、それを木の棒でたたいて練っている。ふるいにかけてたり、粉碎したりしないから不純物や木片などが混入している。もちろん粘土を調整する設備もない。不純物が含まれているが焼く温度が低いので大した欠点にはならない。成形は足で蹴ってロクロを回す〈蹴ロクロ〉を使ったり、ひも造りがほとんどである。焼くのは自宅にある簡単な窯で薪を使って焼いているが素焼きしたものが完成品である。なかには素焼品にペンキで絵をつけた製品もある。彼女たちの1カ月の稼ぎは平均600レンピーラ（日本円で6000円）くらいになるらしい。

女性たちは15歳くらいで子供を生むものが多い。この国の女性は、正式に結婚した夫婦関係にあるものは少なく、日本でいえば内縁関係で生活しているものが多いと聞いた。男性は自分の都合でいつでも内縁関係を解消して別の女性のところへ行ってしまうという。子供は大抵女性が育てているようだ。男性にとってはまことに都合のいい社会である。このとても不思議な社会については別に調べてみたいと思っている。

（ホンデュラス・シニア海外ボランティア：吉村雄策氏）

# 野生動物保護から南北問題へ

大阪府立農芸高等学校  
教諭（農業） 三吉章雄（タンザニア班）



## 1. はじめに

私の所属している資源動物科では、生徒の多様なニーズに応えられるように実習体制を再編成し、さらに、来年度に向けて新しい科目として食糧問題の解決と野生動物保護の接点を探る「資源動物」（資料1参照）を開講すべく教育委員会に申請中である。したがって、今回の海外研修の最大の目的は、タンザニアでの動物保護の現状と食糧問題を抱えた人々とのかかわりを体験取材することにより、新科目のテキストに「開発教育」を盛り込むための基礎材料を蓄積することにあった。その情報を視聴覚機器やコンピューターを最大限に駆使して、新しい切り口で授業を展開していきたい。そして、その報告が開発教育の発展の一助になれば幸いである。

## 2. 授業のねらいとその構成

### 授業のねらい

資源動物科のほとんどの生徒たちが、将来何らかの形で動物にかかわる仕事に就き

たいと考えている。その夢と情熱をうまく導きながら、開発途上国に興味を持ってもらい、一見回り道ではあるが、農業教育を通して途上国の農業に貢献するなど、さまざまな自分の生かし方や可能性を試した人材を、再び日本の農業発展の新たな活力源として取り込み、できれば都市部の農業高校の将来を展望する上で、半ば死語になりつつある「農業後継者育成」を復活させたい。その取っ掛かりとして、資源動物科1年生2クラスを対象に、畜産特別授業（2単位連続合同授業／10回）を企画した。

また、この授業を通して、欧米一辺倒の生徒たちに、あまり馴染みのなかったアフリカ大陸にも目を向けてほしいと思う。さらに学んでほしいことは、「豊かさ」の定義が多様であり、普遍的ではないという事実である。得るものが多ければ、当然失うものも多く、失って初めて分かるものの中に、二度と取り戻せないものも多いはずである。もちろん自戒を込めてではあるが、他人に強者の生き方を押し付けるようなことは、たとえ善意であっても許されたいことを知ってほしい。

授業構成

(1)アフリカ全体の概論説明

国名・首都名を地図上で確認した後、各グループに分かれて各国の研究・発表

(2)タンザニアの地理・歴史・政治・経済・民族に関する基礎知識

国際協力事業団（JICA）資料とビデオで学習

(3)簡単なスワヒリ語（国語）を英語で解説

11月3日、JICA「青年招へい事業」で来日中のタンザニア人教師ザイナ・ハジ・ラジャブさんが農芸祭に来校、生徒たちとの交流の中で、スワヒリ語講義も気軽に引き受けてくださった（写真1参照）

(4)ナショナルパークの分類と保護地区での野生動物紹介

ンゴロンゴロ保護区の紹介パンフレット・紹介ソフトを使い、LAN教室で学習した（写真2参照）

(5)タンザニアにおける日本の技術協力の現状紹介

現地撮ってきたスライドを使っでの学習

(6)タンザニアでの主要農畜産物の紹介と、その栽培（飼育）環境についての学習

JICA資料・プリントを使っでの学習



写真1 農芸祭のバザール会場にて（ザイナさんとAETのダニエルさんを囲む生徒たち）

(7)生態系から見た野生動物保護と食糧生産の接点研究

コンピューターソフトを利用しての学習

(8)国際協力・援助についての基礎学習、それに対するグループ討論と意見発表

JICA資料・新聞記事を使っでの学習・グループ討論会・意見発表

(9)現地セカンダリースクールとの交流方法

文通、農業プロジェクト成果の交換、文具・切手・書籍などの送付、などについての検討（写真3参照）

(10)動物園での野生動物に関する実地研修

天王寺動物園にて飼育課職員の講演、飼育舎などの見学

以上が授業構成だが、誌面の関係もあるので、ここでは野生動物保護と開発教育に関する授業だけを紹介する。（上記(4)(7)(10)に相当）

### 3. 野生動物保護から南北問題へ

(1)ナショナルパークの分類と保護地区での野生動物紹介

N. A.（National Park：国立公園）

C. A.（Conservation Area：保護区）→野生



写真2 保護区へ行く途中（マサイの放牧牛が道を横切った）





写真3 ガラノスセカンダリースクールでの畜産授業風景  
(非常に礼儀正しい、勤勉な生徒たちであった)



写真4 動物園の調理場にて(人工飼育は技術的にも経済的にも難しいことが分かった)

動物保護と遊牧民マサイ族の生活保護  
G. R. (Game Reserve : 狩猟区) → 狩猟を許可している地域

以上の3種類の分類の内容を理解させた。そして、ンゴロンゴロ保護区に生息する野生動物をLAN教室にてCD-ROM「ワイルドアフリカ：富士通パレックス(株)」で紹介した。

#### (2)生態系から見た野生動物保護と食糧生産の接点研究

基本的な生態系の学習をした後、野生動物のサバイバルゲーム「草原の日々：セコムライオンズ(株)」で楽しみながら、野生動物の生息環境の維持と食糧生産の適切なバランスを取ることが、いかに困難かということを理解させた。

#### (3)天王寺動物園での野生動物飼育に関する実地研修

実際にアフリカの野生動物が観察できる所は、大阪では動物園に限られる。幸い天王寺動物園飼育課には大勢の卒業生が勤務しているので、無理をお願いして、飼育舎

の中まで見学させていただいた。(写真4参照)

生徒たちは感激しつつ、飼育舎での野生動物の管理・繁殖がいかに難しいか理解したようだ。

#### A 研修内容

- a 天王寺動物園飼育課の説明
- b 家畜と野生動物の違い
- c 調教と訓知の違い：動物との信頼関係／叱るタイミング
- d 野生動物飼育のポイント：観察力／テリトリー／動物との信頼関係／ストレス除去
- e 動物園の存在意義：レクリエーション／動物保護／社会教育／調査・研究
- f 飼育舎見学／動物別説明(トラ／コアラ／サイ／ペンギン／ネコ科／カバ／カモシカ／鳥類／爬虫類)
- g 将来動物にかかわりたい高校生が今やるべきこと

## 4. 学校からの発信と交流

さらに、教育のみならず、農業高校を発信基地にしてインターネットを利用して、

開発教育を広く世間一般に伝える試みもしてみたい。残念ながら本校ではまだインターネットに接続ができていないが、近い将来に備えてホームページを作らせることにした。幸いクラスに数名ではあるが、個人レベルでインターネットに接続している家庭の子弟がいる。彼らを中心に、このプロジェクトを放課後に進めている。その途中経過を報告することで、新しい形の教育実践が生まれてくれれば幸いである。

## 5. おわりに

私は、昨年転動してきたこの資源動物科で、総合環境部の生徒たちと「家畜糞尿の堆肥化土壌への還元」というプロジェクトを続けている。あまりかっこいい、きれいな作業ではないが、彼らは意外と楽しそうに頑張っている。それは、家畜の糞尿処理が、生態系とのバランスを図りながら自然を改変して食糧を得ることを目的とする、いわゆる「持続可能な農業」の重要なファ

クターであると確信しているからなのだろうか。たまたま今回は、3学期に予定していた指導計画の内容を繰り上げて授業を進めてきたが、これで開発教育を終えたくないという気持ちが強い。もちろん、野生動物は自然の中が一番よく似合うだろう（写真5参照）。しかし、その自然を守るためには、まずその地域の人々の暮らしや文化を保障しなければならない（写真6参照）。独自の暮らしや文化を守るための教育も子どもたちに必要になってくるであろう（写真7参照）。同時に日本の生徒たちにも、国際理解を深めてもらえるように教育活動を続けていきたいと考えている。当然、年間指導計画（資料1参照）にもかなり変更が出てくるであろう。

最後に、夏休みの忙しい中、海外研修に行かせてくださった校長をはじめ、資源動物科の先生方（特にインターネットでお世話になった山田啓一教諭）には本当に感謝している。誌面をお借りしてお礼申し上げます。



写真5 レイク・マニャラ国立公園にて（動物園とは迫力が違った）



写真7 サメの小学校にて（電気も水道も教科書もないが、子どもたちの表情は底抜けに明るかった）



写真6 サメ郊外のマサイ村にて（団員の長いストレートの髪の毛を珍しがる子どもたち）

〈資料1〉資源動物科 科目 資源動物 年間指導計画

1学年 4単位

指導目標	・生物生産を幅広く取り扱い、特に、動物による生物生産にかかわる分野について基礎的知識を習得させ、他の産業や物質循環・地球環境とのかかわりの中で、それを実際に活用する能力と態度を育てる。 ・視聴覚教材を活用するとともに、自己評価・自己表現を重視した評価を行い、生徒が自ら学ぶ能力を育成し、最終学年で行う卒業論文の発表・提出につなげる。
学習計画	・1学期は資源動物科での3年間の学習内容を総論的に紹介するとともに家畜の概要について学習する。 ・2学期は家畜による生物生産について幅広い見地から生物生産の意味や役割について学習する。 ・3学期は環境問題や人口問題などさまざまな産業が取り組まなくてはならない諸問題の中で、農業が果たすべき役割について学習し、科目の内容を実生活で実践する態度を育成する。

月	週・時	単 元	学習内容	教具(メディア)	行動目標・評価の観点
4月	3週 12時間	資源動物とは (資源動物の導入) (合計4時間) 家畜について (合計24時間)	本校の資源動物科での学習内容について(4時間)	OHP・スライド	資源動物科で学ぶ科目とその内容を理解する。
	家畜の起源について(8時間) 家畜化の動機(2) 各家畜の起源(6)		ビデオなど	家畜化の動機、家畜の起源について理解する。	
5月	4週 16時間		わが国の家畜の歴史(8時間) 明治以前と明治以降(2) 戦前と戦後(2) 現在の畜産業(4)	OHP・スライド 資料プリント	わが国における家畜の歴史を知り、現在の畜産業の実態を理解する。
	家畜育種技術の発展(8時間) バイオテクノロジーとは(2) 人工授精(2) ヘテロシス(2) 飼料管理(2)		ビデオ・スライド	最近のバイオテクノロジー技術を知り、生物生産での利用を理解する。	
6月	4週 16時間	家畜による生産 (合計16時間)	人の生活と家畜の利用(8時間) 遊牧と放牧(2) 複合型(2) 加工型(2) 世界の家畜(2)	OHP	家畜による生産の形態を知り、生活や自然環境との関わりを理解する。
	生産物の利用(8時間) 乳加工(2) 肉加工(2) 卵・毛・皮の利用(2) 使役動物・コンパニオン動物・実験動物としての利用(2)		OHP・生産物 ビデオ・スライド	畜産加工品の種類と歴史を知り、家畜が人々の生活をどのように支えているかを理解するとともに、生産動物の利用形態についても知識を深める。	
7月	2週 8時間	1学期のまとめ (合計8時間)	資源動物についての意見交換 (グループ討論会 4時間) (グループ発表会 4時間)		数人のグループを作り、授業の内容から資源動物についての意見交換を行い理解を深める。
9月	4週 16時間	夏休みのまとめ (合計4時間) 家畜の特性と利用 (合計44時間)	夏休みの体験についての作文と意見交換(4時間)		夏休みでの体験を通し自分が学んだことを発表し、他の生徒と意見を交換する。
	栄養と飼料(8時間) 栄養とは(4) 飼料の種類と特性(4) 乳牛について(4時間) 乳の生産(2) 乳牛の一生(2)		OHP OHP・スライド ビデオ	栄養とは何かを知り、資料の種類と特性について理解する。 乳の生産の実際と乳牛の一生について知る。	

月	週・時	単元	学習内容	教具(メディア)	行動目標・評価の観点
10月	4週 16時間		乳牛の生理(8時間) 牛の消化生理(4) 乳汁合成とホルモン(4)	OHP・スライド	乳生産のしくみを知り、牛の消化生理やホルモンの働きについて理解する。
			豚について(4時間) 肉の生産(2) 肉用家畜の一生(2)	OHP ビデオ	豚肉の生産の実際と肉豚の一生について知る。
11月	4週 16時間		豚の生理(8時間) 豚の消化生理(4) 肉生産の生理(4)	OHP・スライド	畜肉の生理について知り、豚の消化生理について理解する。
			豚肉の生産と経営(4時間) 発育の概念と調整(2) 生産の経営効率(2)	OHP コンピューター 表計算ソフト	発育の概念について知り、発育の調整と経営効率について理解する。
			鶏などの特性(8時間) 卵の形成と構造(6) 鶏舎の環境制御(2)	OHP・スライド	卵の生産と構造について知り、卵形成の調節作用について理解し、自動給餌装置や鶏舎の環境制御を知る。
12月	2週 8時間	2学期のまとめ (合計8時間)	家畜についての意見交換 (グループ討論会 4時間) (グループ発表会 4時間)		数人のグループをつくり、授業の内容から家畜についての意見発表を行い理解を深める。
1月	3週 12時間	環境や動物に優しい生物生産 (合計12時間)	家畜の福祉と生物生産(6時間) 家畜の管理法の変遷(2) 家畜の異常行動(2) 家畜への福祉(2)	OHP・スライド プリント資料	生産性向上のための家畜管理法の変化と家畜の異常行動の関連を知り、家畜の福祉の必要性を理解する。
			環境を守る家畜生産(6時間) 土壌とは何か(2) 物質環境と土壌(2) 大地の環境保全(2)	OHP・スライド ビデオ	地球規模の物質環境において土壌が果たしている役割について知り、家畜との関わりについて理解する。
2月	3週 12時間	食糧問題と家畜生産 (合計12時間)	世界の食糧問題(6時間) 食糧問題とは(2) 農産物の貿易(2) 世界的な農業経営とは(2)	新聞記事資料 OHP・スライド コンピューター シミュレーションソフト	食糧問題と農産物の世界的な流通を知り、世界規模での食糧生産に必要な農業経営について理解する。
			食糧問題と環境保全(6時間) 経済問題と環境保全(2) 食糧問題の解決に向けて 開発途上国での問題(2) 先進国での問題(2)	OHP・スライド 新聞記事資料 JICA資料	国際社会が内包するさまざまな矛盾点を理解し、現在行われている方策を知る。
3月	3週 8時間	1年間のまとめ (合計8時間)	資源についての意見交換 (グループ討論会 4時間) (グループ発表会 4時間)		数人のグループをつくり、授業の内容から資源についての意見発表を行い理解を深める。

# 「地球市民」への一歩

～タンザニア学習を通して～



徳島県立阿波高等学校  
教諭（英語） 近藤冴子（タンザニア班）

## 1. はじめに

本校は徳島県の西部に位置し、田園に囲まれ、文武のバランスがとれていてどこか昔懐かしいような雰囲気のある学校である。本校には外国人英語指導助手が週3日常勤している。海外旅行を経験している生徒も少なくない。また近隣の町には外国人もけっこう増えて最近国際交流協会が次々に発足している。もちろん新聞やテレビを通して間接的にどんどん国際化の波は届いている。

しかし、ほんとうに生徒たちの住む世界は広がっているのだろうか。例えばある時生徒の中に九州や東北の都市が徳島よりもずっと田舎のほうだと思っていることがわかった。この狭い日本の中でさえもこんなに視野が狭く自分中心にしか見えていないのである。これに関連して徳島県人の薬剤師でザンビアで青年海外協力隊員活動をした荒木京子さんの話を思い出した。インド洋に浮かぶセイシェル島では日本人というと石を投げつけたり、夜中にドンドン戸をたたいて「サカナ」といってからかったり、

おまえは一体何物だというように全身じろじろ見る。なぜなのか。セイシェル人はアフリカの中では特に教養が高くそれを誇りに思っている。東洋人はレベルが低いとバカにするらしい。まさにこれは知らないことからくる偏見だ。しかし私たちはかれらを笑えるだろうか。

今回、思いがけずタンザニアへの研修旅行に参加できたことはまさに世界を広げる絶好の機会であった。なにしろ生徒たちはもちろん、私の周囲の誰ひとりとして行ったことのない国である。アフリカへ行くというと生徒たちはおおいに関心を示した。今世界は環境破壊、貧困、飢餓、戦争などもはや地球規模で取り組まなければ解決できないさまざまな問題に直面している。この地球の責任ある市民であることを強く意識して公正で平和な地球社会を目指す「地球市民意識」が私たちの一人一人に求められている。すこしオーバーかもしれないが「徳島にいても地球市民」への一歩となるようなタンザニア学習を試みてもいいことにした。

## 2. 授業の目標

学習指導要領にあるように外国語教育の目標は「外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」とともに「言語や外国に対する関心を深め、国際理解の基礎を養う」ことである。今回の旅で実にさまざまな人のさまざまな英語に出会い、英語はまさに世界の言葉として生きていることが実感できた。本校でも「オーラル・コミュニケーションA」の授業で「習い」「使い」「自分の世界を広げる」ための英語、発信型の英語を目指しているのでタンザニアの英語事情は生徒にとっておおいに刺激になると思われる。「国際理解」の点では、生徒はタンザニアの人々の日常生活に最も関心を寄せた。旅行中のビデオや写真を見て生徒はどのように受け留めるだろうか。'Seeing is believing.' というが今の裕福な日本からは程遠い現状を見てどんな理解をするのか。最近の英語の教科書では確かに英語圏だけでなく広く世界の異文化理解を促すものや、世界の人口問題・自然破壊などの地球的規模の問題を扱ったものが多い。しかし正直に言って私の授業では「開発途上国に対する理解を深め、また地球構成国の相互依存関係を認識する」という視点は弱かった。さらに「知識理解だけでなく将来の積極的な社会参加に備えて生徒の主体的な学習活動を組み込んだ授業」からは程遠い。これらの点を考慮して授業の目標を次のようにする。

(1)世界のさまざまな国の人々や文化・生活様式を知ることは楽しい。違っているから興味がわき、それらには優劣はつけられない。

(2)途上国には確かに物質的・経済的に遅れた現状があるが、これは先進国との経済格差をはじめさまざまな不公平状態が歴史的、構造的に生み出されたからであり、不公平を正していかなければならない。

(3)世界の国々は相互に深く依存し、密接に関係していて、もはや単独では成り立っていない。

(4)世界は今かつてない時代を迎えている。貧困・飢餓・環境破壊などの地球的規模の問題に直面している。以上のことを理解させる。

(5)コミュニケーションに最も重要な英語をしっかりと身につけて世界の人たちと話し合い、理解し、ともに解決へと努力する意欲と態度を養う。

## 3. 授業計画と実践

教科：英語 I, Oral Communication A

クラス：1年17Class (40名)

(1)1時限目 英語 I WHAT IS THE COUNTRY OF TANZANIA LIKE?

ねらい 現地で撮影したVTRを見せてはるかな国タンザニアの風景、人々、生活について映像を通してリアルにより正確に知り理解させる。また日本からの青年海外協力隊員の活動やODAの実際を知らせる。

展開

◇VTRを英語または日本語で説明しながら見せる。

---

◇タンザニアについての資料を配付し、映像を補い理解を深める。

◇見たこと、感じたことについて英問英答する。

留意点 見知らぬ国を知る喜びを味わわせる。漠然と持っていたイメージがどう変わったか。映像を読み取るにはその背後にある知識も大切である。

(2) 2 時限目 英語 I DID YOU FIND THE COFFEE SOLD IN TANZANIA EXCELLENT?

ねらい 有名なキリマンジャロコーヒーをきっかけに不平等貿易、南北問題を考える。また先進国の中でも特に日本は途上国と相互依存関係にあることを知り、私たちの生活が世界といかに多くのつながりを持っているかを考える。

展開

◇タンザニアのインスタントコーヒーをコーヒー通の先生方に飲んでもらってその感想を聞いておく。担当のグループがインタビュー場面を再現する。

◇タンザニアの人々の決して豊かとはいえない生活の現状、コーヒーなどの貿易事情、世界の不平等貿易、南北問題について学習する。

◇私たちと途上国とのつながりについて考え、日常生活やものの考え方を見直してみる。

留意点 ものの現象だけではなくその奥にある問題点を見いだす目を養うこと。

(3) 3 時限目 英語 I A PASSAGE FROM WILD TANZANIA

ねらい タンザニアの自然環境保護、野生

動物保護にかける意気込みとその重要性を知る。また、ともに地球市民としてかけがえのない地球を守っていこうとする意欲を持たせる。

展開

◇タンザニアの自然・動物保護をうたった本「WILD TANZANIA」に寄せられた Mwinyi 前大統領の小文を読む。

◇私たち一人一人が責任を果たせるように何ができるかを考える。

留意点 文中の語句に VTR の映像を重ねて人類共有といってもいい自然や野生動物のすばらしさを感知させる。ちいさな日常の意識と実践が大きな運動につながることを強調する。(写真1)

The opening passage of "WILD TANZANIA"

For many years in Tanzania we have been aware of the importance of our environment, and its fragility in today's modern world. This concern has guided our policy towards environmental protection, which will benefit not only nature but all mankind. We have continually devoted our efforts to the conservation of our country's natural heritage, in order to preserve the delicate balance between man and his environment which has always existed in Tanzania.

As a result of these efforts, our beautiful parks, reserves and sites can today be admired by a growing number of visitors, who can enjoy the magical atmosphere of our land. Wherever possible, we have preserved its authentic character, which is the source of unique and unforgettable emotions. We welcome all enthusiastic and respectful nature lovers to Tanzania, where they will be able to appreciate the results of our endeavours to preserve our wonderful natural resources.

They will be enchanted by the warm and friendly welcome offered by our people.

They will be delighted by the spectacular scenery at Ngorongoro and the striking landscapes of the Rift Vally. They will be filled with wonder at the sight of huge concentrations of wildlife on the immense plains of the Serengeti, and at the diversity of our National Parks. Lastly, they will be fascinated by the



写真1 ンゴロンゴロ動物保護区で

prehistoric site of Olduvai, rich in fossils which one day may provide the key to the history of mankind.

The evolution of our environment is closely linked to the future of all mankind, and all over the world as in Tanzania, people are becoming increasingly preoccupied with this issue. "Wild Tanzania" highlights our concern for the environment: the beautifully illustrated pages of this superb book are an enthusiastic invitation to experience first hand the unique adventure of a

visit to Tanzania. But within these pages is also a message of hope for the future; each picture is a precious witness to a protected universe for which we are all responsible. A world which we must pass on intact to those generations to come, a unique inheritance, whose future is in our hands.

Ali Hassan Mwinyi  
PRESIDENT OF THE UNITED  
REPUBLIC OF TANZANIA

TEACHING PROCEDURE (4時限目)

(写真2、3、図1)

	Activities		Points of instruction	
	JTE	AET		Students
Greeting Warm-up	☆ a short dialogue between JTE and AET about the JTE's trip to Tanzania.		☆ listen carefully.	☆ get the students interested in Tanzania.
Activities	☆ show some supplementary ways of wearing kangas. ☆ show some supplementary usages of kangas with explanation. ☆ show 2 paintings of 'tinga tinga'. ☆ JTE answers the questions.  ☆ AET may also ask some questions.	☆ A group tries on kangas. ☆ B group discusses ways of using kangas by guessing.  ☆ D group asks some questions about 'tinga tinga'. ☆ C group or anyone else asks questions that they'd like to know. For example, questions regarding the ways of lives of Tanzanian people, etc. ☆ consider the 'standard of living' from both the economical and cultural aspects comparing both nations.	☆ have the students look for good sides of life in Tanzania though economically worse-off.	
Consolidation	☆ AET makes sure that the students have learned today by asking questions. ☆ JTE makes some comments on today's activities.	☆ answer in English or in Japanese.		





写真2 Let's try Kangas on!



写真3 カンガを美しく着こなすタンザニア女性

(4) 4 時限目 Oral Communication A  
LET'S TRY KANGAS ON  
TEACHING PLAN

- 1 Date: Tuesday, October 8, 1996
- 2 Class: 17 Classes (18 boys and 22 girls)
- 3 Objectives:

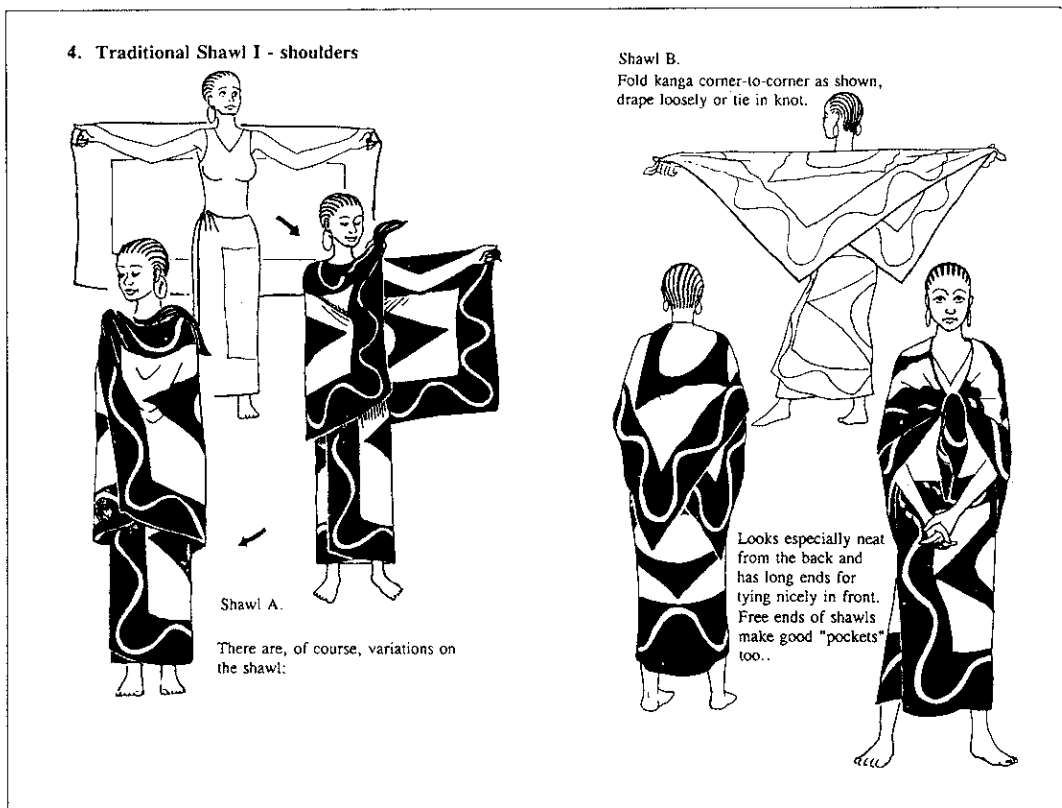
(1) To stimulate the students' interest in the culture and the way of life of Tanzania by having the students try on 'kangas', the traditional costume for Tanzanian women and enjoy

viewing some paintings called 'tinga-tinga'.

(2) To make them realize that every nation in the world has its own peculiar culture and each should be valued equally. And to widen the students' horizons and develop their cross-cultural understanding.

(3) To have groups of students engage in various activities in order to foster positive attitudes toward presenting and communicating in English.

<図1> カンガの着こなし方



(5)5 時限目 Oral Communication A HOW USEFUL COMMUNICATING IN ENGLISH IS!

ねらい 世界のいろいろな人々が話す英語に触れて英語が世界中で役立っていること、また英語を通して世界の人々とコミュニケーションできる喜びを実感させる。

展開

◇タンザニアの中等学校の英語の授業および英語による教育事情を学ぶ。

◇英語を伝達手段として用いている、旅行中に出会ったいろいろな人々の英語を聞かせる。

◇いままで学習したことのまとめを英問英答する。

留意点 現地の元気な授業風景をいきいきと伝える。教育を受けて生きる力をつける意味を再認識させる。母国語やその文化も大切にすることを忘れない。

(6)授業を終えて

平常の授業では学年間の進度のやり繰りをして実施することができた。目標が達成できたかどうかはさだかではないが、生徒が一連の授業に積極的に取り組んでくれたことだけは確かである。アンケートから見よう。

①「あなたのタンザニアに対するイメージが前と何か変わったでしょうか。変わったとすればどんなところですか」という問いに対して

◇もとのイメージがなかった。位置も国名すらも知らなかったが、わかったという気がする。でも表面上のことを少し知っただけかもしれない。今日本に住んでいる自分

がタンザニアで住もうとするととても大変だと思いました。特に衛生状況はどうにかしなければいけない。

◇今までなんか怖そうなイメージを持っていたけどビデオを見るととても明るい。タンザニアや他の国々に一度行ってみたい。アフリカに興味がわいてきた。

◇もう少し原始的なイメージを持っていたので、学校などがあることを知って驚いた。

◇もっと裕福な国と思っていたけど本当はとても貧しい。5%しか中等学校へ行けないとなると私のクラスの2人。他の人は牛や馬の世話をしていることになる。

◇なにも無い所にも学校と教会だけはある。マサイ村のあの貧しい教会と土壁に貼ってあるキリスト絵はなにか象徴的である。精神生活は豊かなのかな。毎日のくらしが貧しくてもタンザニアの人の笑顔はとても純粋だ。

◇学校では制服を着て、日本と同じような授業形式だったのが意外でした。ルーズソックスをはいているところまで同じでびっくりしました。でも生活物資をほとんど輸入に頼らなければいけなかったり学校へ来れるのはほんの恵まれた一部の生徒だったり、一見同じに見える中にいろんな意味を含んでいるのがわかった。

◇私は世界のいろいろな地域が好きでよくテレビで見るのでイメージはそんなに変わらないけれど、身近な人からタンザニアの話が聞けてとても視野が広がった気がする。狭い日本だけでなくもっと広い世界に常に目を向けるべきだと思った。

②「南北問題について、また日本と途上国との共存関係についてどう思いますか」に

対して

◇もっと先進国が援助しないと南北の格差が大きすぎると思う。日本はつまらないことにお金を使いすぎて肝心なことがいつも欠けている。

◇途上国とこんなに関係が深いとは知らなかった。どの国も自分の国だけではやっていけないのだから国と国との友好関係は大切だと思う。

◇日本の国は他の国に物資を依存し過ぎていると思う。日本国内で生産できるものは国内でまかなうべきだと思う。今のままではなんか危ない。

◇キリマンジャロコーヒーは有名だし私の父もコーヒーが大好きですが収入を上げるためにいいコーヒーは全部輸出してしまうのはちょっと悲しい。日本はそんなにぜいたくしているのでしょうか。タンザニアの除虫菊がすべて輸出されて一箱の蚊取り線香も買えない時代があったという話はさらにショッキングです。マラリアで死んでしまったら何にもならないのに。今日はいつもと違って疲れました。知らなかった世界をのぞいたみたいでちょっと大人になったみたいな気がします。

最後に③タンザニア学習全体についての感想を求めると

◇楽しかった。そして勉強になった。タンザニアへ絶対に行きたい。観光じゃなくて勉強で。

◇いつも、聞く授業は眠くなってしまうけど、楽しかった。少し英語の授業でないようなところもあったけどとても良かった。それに英語ができれば実際にすごく為になることがわかった。いままで英語は意志伝

達的手段とよく聞いていたけどあまりピンとこなかった。タンガの授業ではパンシー先生が英語で言っていたはずだけど英語を意識してなかった。こんなことを言うのだろうか。おもしろい経験だった。

◇「地球市民」なんて何だろうと最初思ったけど、終わってみるとひとつのイメージとして残ったような気がします。タンザニアの授業で自分の世界が広がったような感じがします。それにもの見方も国や人によってもいろいろあって幅広く見たり考えたりすることが大切なのだと思います。

## 4. おわりに

9月の第2週に学校祭があり、ESS部の「世界を知ろう～展」シリーズとして今年はタンザニア展を出した(写真4)。生徒、職員から少なからぬ反響があり、また授業への下地になったと思われる。授業は十分なものとはいえないが生徒は大いに興味を示したので実施した甲斐があったと思う。国際理解教育は広く求められている。生徒が参加できる機会も随分増えてきているが学校教育全体の中での位置づけや校内での取り組みもいまひとつの面があるので、ロ



写真4 文化祭「世界を知ろうータンザニア展」

ングホームルームなどを利用してもっと開発教育的な視点を取り入れて行いたい。そして視野を広げると同時に足元から築いていくことが大切である。外国だから仲良くする、相手が貧しいから援助してあげるのではない。毎日の地域社会の中での「不平等」や「不公正」に対して敏感になり正していく姿勢や互いによき関係を築いていくことがその基盤になっていなければならない

と思う。今各教室にはJRC部が用意した箱が置いてある。それには「みんなの家の使わなくなったソプラノ、アルト笛をぜひぜひこの中へ入れて下さい。ベトナムの小学生のもとへ飛びます。さあ、あなたの笛を復活させよう。よろしく!」とある。ちいさなことからでも世界とのつながりを身をもって知る行動の輪が広がりつつあるようだ。明るい21世紀を期待したい。



母子保健プロジェクト。タンガ村での住民代表との話し合いの後で

# ケーススタディ

## ～モンゴルを支援する10のプロジェクト～



熊本県・九州女学院高等学校  
教諭（公民） 栗原希代子（モンゴル班）

### 1. はじめに

#### (1) 本学院の教育目標

本学院は、1996年、創立70周年を迎えた。校訓は「感恩奉仕」（神の愛と恵みに感謝し、それに応えて奉仕する）であり、創立以来ボランティアスピリッツを大切にしてきたキリスト教主義学校である。今、本学院における一環教育の主眼は、「グローバルな視点で、未来人を育てる」という言葉で表現される。生徒たちが世界とコミュニケーションする喜びを実感し、ボランティアを通して人と触れ合う感動を体験することができるように、教育プログラムの改革とより一層の充実が図られている。

#### (2) 必要となる開発教育の視点～地球市民の育成

生徒たちにとって、アメリカ・オーストラリアへの研修旅行など、英語圏の国々での異文化体験の機会は開かれている。しかし、例えば、距離的にはより近いアジア諸国との交流となると、学校として提供するプログラムは今のところない。

本学院の教育が文字どおりグローバルで

あるためには、いわゆる「北」の国々にもみ目を向けるのではなく、「南」の国々にも関心と理解を持たせるような教育実践をしていく必要がある。その実践は、開発途上国の開発と支援という内容にとどまらず「人権・環境などに関する諸問題をも取り上げて地球市民を育てようとする、広義の開発教育」<sup>#1</sup>を目指すものであるべきだと考える。

### 2. 授業の流れ～ケーススタディの前に

#### (1) 私たちの税と財政についての学習

財政の仕組み、税制の諸問題、財政再建の課題などについて学習を進める中で、深刻な財政赤字の現実を前に、ODAの在り方が問われているということに触れた。生徒がODAをはじめとした経済協力について学習するうえで、財政の諸問題についての知識と理解を持つておく方がよいと考えた。

#### (2) 国際社会と南北問題についての学習

##### A. 南北の格差を読み解く

1992年の国連開発計画による「シャングハラス」と呼ばれるデータ、「アジア

が支える飽食ニッポン！」(NNNドキュメント'95)のビデオ、『アジアを食べる日本のネコ』(梨の木舎)、紙芝居「缶詰工場で働く女の子〜チュリンの一日」(前掲書)、「アジアの子ども買春」の新聞記事など一連の教材を用いて、世界の富の偏在と南北問題の構図を見た。

B. 世界の国々とその概況

先進国・途上国・旧社会主義国と社会主義国という順序でその概況を解説した。その際、後にケーススタディで取り上げるモンゴルは、旧社会主義国であり途上国であるということに触れた。

国連開発計画 (UNDP) の1996年版レポート『経済成長と人間開発』から、「経済実績の格差が拡大するにしがたい、世界は二つに分かれ、二極化はさらに進む」という報告を読み、モンゴルも「成長に失敗した国」に含まれていることを見た。<sup>(注2)</sup> (資料1参照)

(3)日本による経済協力についての基礎学習

A. 日本の経済協力

日本の政府ベースと民間ベースの経済協

力の内容を解説し、特にODA総額については、財政についての学習からつなげて国民1人当たり1万円強の支出となっていることを確認した。

B. 青年海外協力隊について

国際協力事業団が担当する技術協力の事業の一つとして、協力隊員が派遣されていることを解説し、1992年、モンゴルへの協力隊員派遣が開始されたことを紹介した。<sup>(注3)</sup>

C. 経済協力についての世論調査から

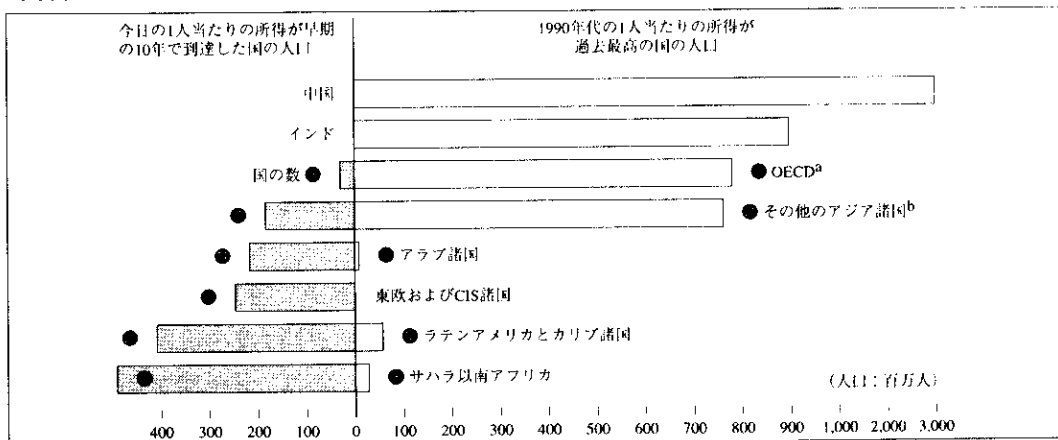
『月間 世論調査』1996年5月号に掲載された質問項目と結果を取り上げ、経済協力を行う理由などについて生徒に質問を投げかけた。

### 3. ケーススタディのテーマと内容

- (1)対象学年 高校3年
- (2)授業教科 政治経済
- (3)授業時間 3時間
- (4)授業のねらい

A. 旧社会主義国であり途上国であるモ

〈資料1〉



ンゴルを支援するにあたって、多様な方法や考え方があり、国民は主権者であり納税者として、経済協力について自由に発言する権利があるということを理解する。

B. 援助方法と内容の順序づけをするという作業を通して、各自の見解を持ち、グループとしての順序づけをするためのコンセンサスを作り上げる過程を体験する。

C. 意見表明を行う参加型学習を通しての、生徒へのエンパワメント。

(5) ケーススタディ～モンゴルを支援する10のプロジェクト～

A. 1限目 モンゴル情報

a 「私のモンゴルイメージ」を書く、あるいは描く

多くの生徒が、小学校の国語の教科書に載っている「スーホーの白い馬」について書き、描いた。草原と遊牧民、ゲルと呼ばれる移動式住居、羊の糞、モンゴル相撲、チンギス・ハーンなどを連想している。日

本人と顔が似ている、ゆったりしている、寒そう、などのイメージも強い。全体として今日的モンゴル情報は乏しい。

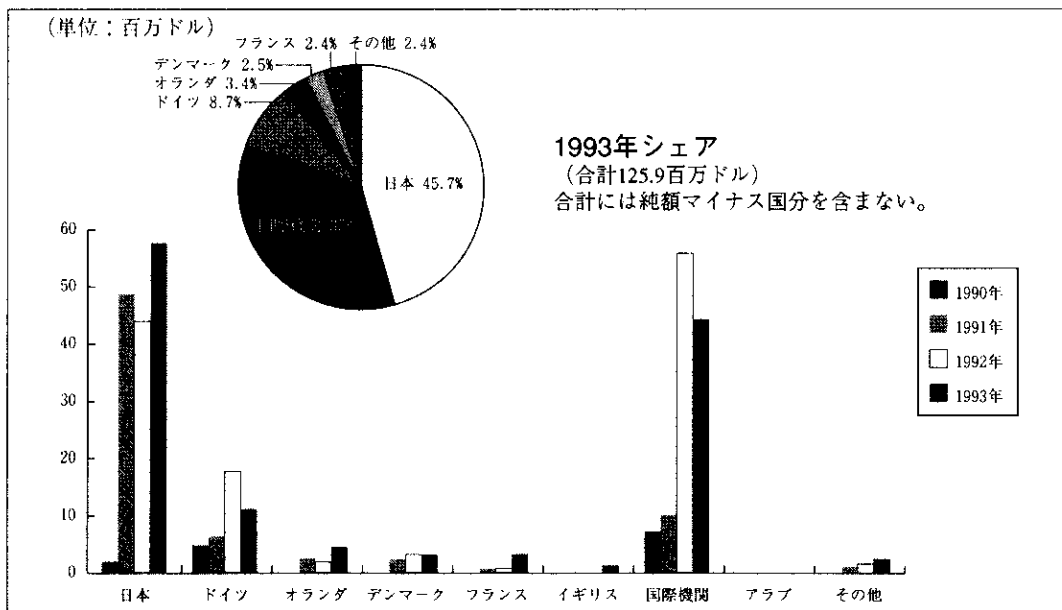
b ビデオ視聴（名付けて「モンゴルダイジェスト96」）<sup>(注4)</sup>

モンゴルを取り上げたいいくつかのテレビ番組を編集し、18分ほどのビデオを用意した。草原やゴビなどの大自然と遊牧民の生活を撮った場面だけでなく、首都ウランバートルの都市生活者の様子が分かるような場面を含めた。モンゴル人初の幕内力士、旭鷲山の一番も入れておいた。視聴後、人口・地理・気候についての解説を行った。

c モンゴルの政治・経済・社会概況<sup>(注5)</sup>

1990年以降の複数政党制と大統領制の導入、市場経済化と経済のマイナス成長、アジア重視、西側諸国との関係拡大、急激な物価上昇、エネルギー・電気・通信など経済基盤の未整備、失業率の上昇、教育予算の不足、低水準の保健・医療サービス、

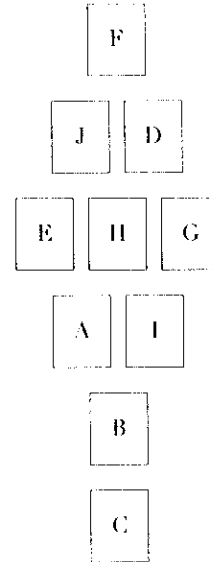
〈資料2〉モンゴルへの援助金額の推移



〈資料3—①〉モンゴルを支援する10のプロジェクト

<p><b>A</b> モンゴルの工業基盤を整備するため、道路や発電所を建設する計画に日本のODAを供与する。</p>	<p><b>F</b> モンゴルの発展のために貢献している民間協力団体（NGO）を支援する。</p>
<p><b>B</b> モンゴル政府への日本のODAを削減する。</p>	<p><b>G</b> モンゴルの地質鉱物資源（銅・金など）の開発のため、日本から専門家を派遣し、機材を供与する。また、研修生を受け入れる。</p>
<p><b>C</b> モンゴルのカシミヤ製品を日本に輸入し、日本人がモンゴルに観光旅行をする。</p>	<p><b>H</b> コンピューター科学の分野や日本語教育の分野に技術協力をを行い、教育設備の充実についても支援する。</p>
<p><b>D</b> 首都ウランバートルの大気汚染対策のため、日本から環境問題関係の専門家を派遣する。</p>	<p><b>I</b> モンゴルの国内外の通信網整備のため日本から技術協力と機材供与を行う。</p>
<p><b>E</b> 市場経済に移行したモンゴルに、法律づくりや法律家養成の援助をするため、日本に研修生や留学生を受け入れる。</p>	<p><b>J</b> 後退しているモンゴルの福祉サービス（保健・医療・児童福祉など）の向上のため、総合福祉センターの建設を支援する。</p>

〈資料3—②〉



も触れ、次回の授業では、日本によるモンゴル支援について皆で考えたいという予告をして1限目を結んだ。(資料2参照)

B. 2限目 順序づけ～モンゴルを支援する10のプロジェクト(注6) (7) (8)

a 各自、「モンゴルを支援する10のプロジェクト」(ランキング・シート)(資料3—①参照)を読み、1から10までの順位をつける。自分が考えたランキングの基準について記録しておく。

授業者は、ワークショップのファシリテーターのように、進行役を務める。生徒からの質問は随時受ける。

b グループ(各グループ5、6人)に分かれて、各自の考えを出し合い、グループとしての順位をつける。(資料3—②参照)

C. 3限目 各グループからの発表とまとめ

a 各グループの代表が、全体の前で発

首都ウランバートルの大気汚染、ストリートチルドレンの増加などの実情を解説した。

1991年に海部首相(当時)がモンゴルを訪問し、同年、第1回モンゴル支援国際会議が東京で開かれ、以来、日本は最大のモンゴル支援国となっているということに



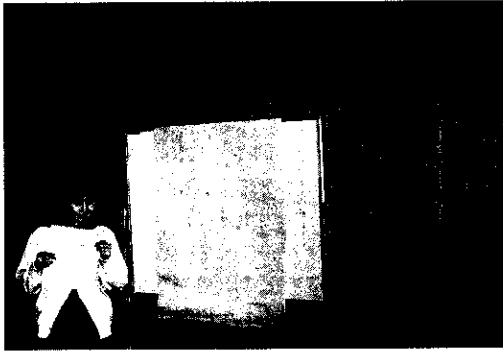


写真1 グループ代表による発表



写真2 バス公社にて。協力隊員、カウンターパートの方々とともに

表する。ランキングの基準やグループ内で意見が分かれたところについて報告する。

(写真1参照)

b ランキングの作業や発表を通しての感想を書く。

c 授業者から、批評と発表の仕方についての助言などを行う。

d スライド視聴

授業者がモンゴル研修旅行中に撮ったスライドを、解説を交えながら見せる。日本から専門家や青年海外協力隊員が派遣されている現場を撮ったものを中心に構成した。モンゴルテレコミュニケーションカンパニー、インテルサット地上局、モンゴル技術大学、地質鉱物資源研究所、ノミン印刷公社、バス公社、第23中学校日本語教室などである。(写真2参照)

視察したODA関連の現場だけでなく、東京・板橋区と区民が一体となりモンゴルに辞書と教科書を贈っている取り組み<sup>(注9)</sup>やモンゴル植林運動(MFM協力日本委員会の活動)などのNGOの活動<sup>(注10)</sup>を紹介して、ケーススタディを終了した。

## 4. おわりに

A. 生徒の感想から

a 私たちの班では、各自で行った順序づけの順位を集計することで、班としての順序づけをした。受け身ではなく、このような楽しい学習の仕方では積極性を高めることはよいと思う。クラスの人といつもと違った形でコミュニケーションが取れた。

b 私たちの班は全体的にあまり意見が出ずに、一人の意見が通ってしまうことが多かったようだ。ワークショップをやる上で、一人一人が意見を持ってそれを発言しないと、あまり面白くなくて意味がなくなるということが分かった。

c 他の班の発表を聴いて、自分の持っていた考えと全く違う考えを知ることができた。例えば、自分ではODAの削減を10位にしてあまり重視しなかったのだが、1位にした班の意見では、日本は財政赤字でODAの大幅な拡大は難しいので、モンゴルへの支援を削減してもっと貧しい国に振り分けた方がよいということだった。こういう授業のやり方は、他の人の意見も聴け

るのでとてもいいと思う。

d 私たちの班は、一番重点を置くのは経済基盤か教育か福祉か、それとも環境かという問題を考えた。結局、経済基盤の整備を優先させることになったが、どの分野も密接につながっているのだと感じた。モンゴルについての勉強をして、モンゴルに行ってみたいと思った。

B. ケーススタディを終えて

2学期が始まってただちにモンゴルへの開発援助を考えるという授業に入るのは唐突すぎるので、まずは財政の諸問題についての学習をし、経済協力の基礎知識を得た上でケーススタディを行うという計画を立てた。生徒の理解を深めるためにも、この順序を踏んで良かったと思っている。なお、ケーススタディの後、「日本のODAをどうするか」を考える授業に移った。

私は、政治経済の学習を通して、良識ある民主的主権者を育成することに意義を感じている。そのようなねらいで、これまで政治経済分野について新聞投稿をする実践やディベートの実践に取り組んできたが、私自身の学習をもう少し進めてからという意識があり、開発教育の手法を用いた授業を行うことは控えていた。この度、国際協力事業団（JICA）による高校教師海外研修とその事前研修に参加させていただき、国際理解教育センター（ERIC）の福田紀子さんのご指導もあったので、やってみようという気になった次第である。

モンゴルを支援する10のプロジェクトの内容には、現実に支援が行われている分野ではないものが含まれている。しかし、それは全くの思いつきではなく、現地で研

修させていただいたおかげでリアリティを感じつつ準備をしたランキング・シートである。不備は多々あるが、私にとって新たな授業の試みであった。

C. 再び本学院の教育目標に戻って

創立以来ボランティアスピリッツを大切にし、21世紀に向けて「グローバルな視点で、未来人を育てる」という点に一貫教育の主眼を置いている本学院としては、海外ボランティアを含めた広範囲のボランティア活動を奨励し、生徒が自己実現の道を開くための基礎づくりをしていくべきではないだろうか。私の授業も、そのような教育活動の一環として位置づけたいと思う。

(注)

- 1) 『新しい開発教育のすすめ方』開発教育推進セミナー編、古今書院、p.11
- 2) UNDP (国連開発計画) 人間開発報告書 1996  
『経済成長と人間開発』国際協力出版会発行、古今書院、p.4
- 3) 『青年海外協力隊 事業概要』青年海外協力隊事務局発行
- 4) TBS「ブロードキャスター」、日本テレビ「知ってるつもり〜チンギス・ハーン」、NHK「君は感動の大地をみたか〜ラリーレイドモンゴル」より編集
- 5) 『世界』1996年8月号「21世紀世界と遊牧国家モンゴルの道」  
バーバル・田中克彦両氏対談 岩波書店、pp.282-293
- 6) 前掲書参照(1) pp.49-50
- 7) 『日本経済新聞』1996年9月16日「アジア諸国の法制度整備〜国際貢献の視点で支援を」参照
- 8) 『モンゴル経済入門』安田靖著、日本評論社、1996年
- 9) 『日本経済新聞』1996年10月9日「春秋」の欄に、板橋区民によるモンゴル支援の話題が取り上げられている。
- 10) 『日本のNGO』NGO・団体名鑑 日本外交協会発行、p.492

# モンゴルって どんな国？



大阪府・プール学院中学校・高等学校  
教諭（保健体育） 屋田 洋子（モンゴル班）

## 1. はじめに

本校は、1879（明治12）年、英国聖公会宣教協会により創立された女子校であり、キリスト教精神に根ざして、ひとりひとり違った賜物（生命や才能・資質）を尊重し、それを伸ばし、人間（ひと）を育てる教育を行っている。現在生徒数は、中学校495名（学年4クラス）、全日制・普通科高等学校1019名（学年・クラス）全校生徒1514名の中・高一貫校である。

また、本校では、「隣人を愛せよ」をモットーに広い視野の中でさまざまな人々の生き方を理解しようと国際教育や国際交流にも力を入れている。短期留学生（ベトナム・韓国・シンガポール・オーストラリアなど）を受け入れたり、現地の文化・習慣を実際に体験するために、カナダ・イギリスにホームステイ研修を実施している。

このような伝統と環境が作用してか、素直、明朗・温かな生徒が育っている。比較的自主性を持った生徒が多く、好奇心旺盛で、物事に対して豊かな感受性を持って取り組める素地を備えている。また、国際教

育や国際交流に関心を持ってNGOの活動などに積極的に参加している生徒も多く、阪神大震災のボランティア活動や福祉ボランティアなどに積極的に参加している。クリスマス献金や卒業献金などを毎年アジアの国々やパレスチナ・アフリカなど教会関係を通じて援助が行われている。ただ、国際化・国際交流＝欧米という考えがまだ根強くあり、欧米に対する関心は、全体的に高いようである。そういう中で、「21世紀は、アジアの時代だ」「隣人をもっと知ろう」などアジアの国々への関心も高まりつつあり、交流の機会も増えてきている。今回の私自身のモンゴル研修を機に、アジアの国の一つであり、「スーホーの白い馬」の国であるモンゴルについての授業を通じて関心を持たせる。さらに日本との関係を理解させる。さらにこの国の現状と素晴らしさを知り、国際協力・開発協力と環境問題を課題として授業を試みた。環境問題を日本国内だけでなく、地球全体で考えていかなければならない問題であることをいかに身近なものとして意識させ、いかに興味を持たせるかが課題である。

## 2. 実施科目設定

私は現在、高等学校1年生の「体育分野・ダンス」と中学校3年生「体育分野・ダンス」と「保健分野」を担当している。

今回の研修で学んだことを実践するにあたり、科目の性質も考慮して、「保健分野」と考え、中学校3年生のクラスを選んだ。中学校保健体育「保健分野」では、「私たちの環境を考える」という単元があり、環境問題も含まれている。保健分野では、エイズとともに環境問題は、重要な位置を占めている。

## 3. 授業実践にあたって

この授業実践は、中学3年生の中学校保健体育「保健分野」(1単位)1クラスで行ったものである。

### (1)授業計画

1時限目 今回の研修についての説明

○国際協力事業団(JICA)について(冊子「地球の明日をみつめて」を一部使用する)

○「モンゴル」について

アンケートー「モンゴル」と聞いて連想するものをあげなさい。

あまり知られていないモンゴルについてスライドを使用し、理解を深める。

2時限目 モンゴルにおいて、日本の開発・援助・国際協力がどのような分野で行われているかを知り、理解を深める。

青年海外協力隊(JOCV)の活動について

スライドを使用する。

3時限目・4時限目 大気汚染について

モンゴルの中学生が使っている教科書の内容と自分たちが使っている教科書の内容の比較。

ウランバートル郊外の火力発電所を例にし、大気汚染から酸性雨についての説明。

スライドを使用する。

5時限目 開発・援助・国際協力と環境問題について

JICAより発行されている「いま私たちにできること」「環境とJICA」の冊子の一部を使用し、今回の授業をまとめ、感想を書かせる。



写真1 ウランバートル郊外の草原

例年、地球環境問題については、いろいろな資料を用いながら、開発途上国の問題や地球規模で起こっている環境破壊などを取り扱ってきた。また、実際に授業で酸性雨の測定をしたり、二酸化窒素の測定をしたりし、現在の自分たちの環境について考え、自分たちができることはなにかを考える機会にしてきた。

今回の研修で、モンゴルの中学1年生が使用している「自然学」の教科書を現地でも使用することができ、その中の「大気の汚れ」の部分を使用し、実践することになった。

#### (2)使用した教材・機材

- ①スライド (35mm) 115枚
- ②モンゴルの中学1年生が使用している「自然学」の教科書の一部 (資料1)
- ③新しい保健体育 (教科書) 東京書籍
- ④JICAより発行されている資料 (3冊「環境とJICA」「What is JICA」「いま私たちにできること」)
- ⑤モンゴルに関する資料と大気汚染に関する資料 (プリント3枚)

## 4. 実践

(1)表1は今回の3時限目の学習指導案である。

(2)表2は1時限目に行ったアンケートの結果である。

(3)今回の授業の感想 (生徒が書いたものを抜粋)

A. モンゴルと日本とはあまりつながりがないような気がしていたけれど、バスを送ったり、毛布を送られたり、モンゴルで日本語が学ばれていたり、協力隊員が派遣されたり、結構日本とのつながりがあるのだとわかった。

B. 日本は、モンゴルにたくさんの援助をしていることがわかった。協力隊員が現地の人と協力していろいろなことを教えていることがわかってよかった。国と国がお互いに助けあって国際社会が成り立つんだなと思った。

C. ほとんどの人が遊牧の生活をしていると思っていたけど、実際はビルなどが建っていて意外だった。町中に火力発電所があるのにはびっくりした。たくさんの自然



写真2 ウランバートル市内

〈表1〉学習指導案（中学3年a組 42名）

	学習内容	学習活動	指導上の留意点	時間
導 入	大気汚染について	大気汚染とはなにかの説明。	テレビや新聞で報道されたこと、本で読んだことを含め、身近な事例を取り上げて関心を抱かせるようにする。	5分
展 開	大気汚染の現状  汚染の原因となる物質、およびその発生源を学習する  大気汚染による健康被害 モンゴルの中学生在が使用している教科書との比較	大気汚染の実態を学習する。 大気汚染そのもの以外に、地球の温暖化、酸性雨、オゾン層の破壊なども大気汚染によるものであることを学習する。 汚染物質としては、硫黄酸化物、窒素酸化物、一酸化炭素、浮遊粒子状物質、光化学オキシダント、炭化水素、アスベストなどの物質の説明と発生源を理解させる。 エネルギー源として化石燃料を使用していることを理解させる。 人体への影響について説明する。 モンゴルでは、大気汚染についてどのように学習しているのかを知る。 〈資料1〉	大気汚染の原因が、主に工場の排煙、自動車の排ガスであることを認識させる。  硫黄酸化物は工場の排煙（石油の燃焼による）、窒素酸化物は主に自動車の排ガス（窒素と酸素の化合による）に含まれていることを指導する。  モンゴルの自然と火力発電所のスライドを使い、モンゴルの現状を指導する。 火力発電所がなぜ都市部にあるのか理解させる。	40分
ま と め	大気汚染による被害	大気汚染は、人体だけでなく、植物もいろいろな建造物にも被害が及んでいることをとらえさせ、次週の授業に関心をもたせる。次週は、酸性雨について考えていくことを連絡する。	モンゴルでも大気汚染のため酸性雨が降っている可能性について触れる。	5分

〈表2〉モンゴルと聞いて連想するものを挙げなさい。（複数可）

小学校の時に習った「スーホーの白い馬」、元寇、チンギス・ハーン、馬頭琴、ゴビ砂漠、遊牧民、ゲル（パオ）、草原の国、今年の4月頃森が火事になった、相撲の旭鷲山、大自然がいっぱい、フビライ・ハーン、日本人と似ている、私たちと同じ黄色人種、騎馬民族、馬、社会主義国家であった、星がきれい、子供たちが馬に乗って長い距離を走り競走する、など

<資料1>

Зохиогч **Е.БАТЧУЛУУН**  
**Г.БАТЭМБА** (дэд доктор)  
**Г.ЖАВЗАНХОРЛОО**  
**А.БЯМБАА**



ШУБЭ-ийн Сийдэн 20-и жилийн  
2000 оор 12.012

# БАЙГАЛИЙН БШИНЖЛЭЛ 1

Улаанбаатар  
1996 он

### АГААРЫН БОХИРДОЛТ

1. Агаар хэрхэн ямар замаар бохирдож болох вэ?
2. Ангийн агаарын цэвэр байгалийн тулд юу юу хийгээл зохих вэ?
3. Олон хүн цугласан газар бүтчим байдлын үнэр юу вэ?
4. Агаард хэдвэр нүгнийн агаар цэвэр, хотод бохо байдаг вэ?
5. Анги танхим, гэр орон, гудамж талбайг ургамалжуулахын өч холбогдол юу вэ?
6. Өвөл зуны улиралд агаар их бохирдог вэ? Яагаад?
7. Хүнд үйлдвэрт ажилладаг хүмүүс тусгай хушууц, эмни хаалт хэрэглэдгийн үнэр юу вэ?
8. Ямар зүйлээс үндэслэн агаар бохирлоо гэж үзээд байна вэ?
9. Агаарын бохирдолтыг багасгах ямар арга байж болох вэ?

大気の汚れについて

1. 大気は、どうやって いくらかる原因によって汚れるのか。
2. 人間にとって、どのような状態の空気が適切であるか。
3. 多くの人間が一緒に住む地球が温かくなる原因は何か。
4. どうして草原の空気は本音にきれいなのに、都市の空気は汚れた状態なのか。
5. いろいろな牧草、草、樹、浜路、広場に植物を育てる意義は、何か。
6. 冬・夏の季節の空気が非常に汚れるのか。どうして?
7. 人間による生産や工業の発達によって人々が特別な服装になっている。原因は何か。
8. どのような空気の汚れがあるか。
9. 大気の汚れの減少するいくらかる方法はあるのでしょうか。

があるのだから環境問題に発展する前に、煙をきれいにする装置を日本から援助すればいいと思った。

D. モンゴルは美しい国だけれど、他の国からの援助がとても必要なことが分かりました。今は援助がないと国は成り立たないのかもしれないけれど、その援助によってモンゴルの人々が技術を身につけ、少しずつ国が発展してきているように思った。国同士が助け合うことは、大切だと思った。

E. モンゴルは日本と大違いだと思った。なぜかというとても時間がゆっくり進んでいるなと思った。電話にしてもバスにしろ、日本の昔を見ているようだった。しかし、これからモンゴルの人々の力で国を発展させてほしい。そして、日本の援助が少

しでも役立てればいいなと思った。

F. 日本の協力隊員がたくさんモンゴルにいたことが、ちょっと意外だった。東南アジアやアフリカにいてるのがほとんどだと思っていた。

G. 私は、今までモンゴルのことをあまり知らなくて、日本がどんな援助をしているのかを全然知りませんでした。でも、スライドを見て、モンゴルがどんな国か少し分かったような気がする。協力隊員の人々ががんばって活動していることも知りました。

## 5. おわりに

生徒たちの感想文からもわかるように、

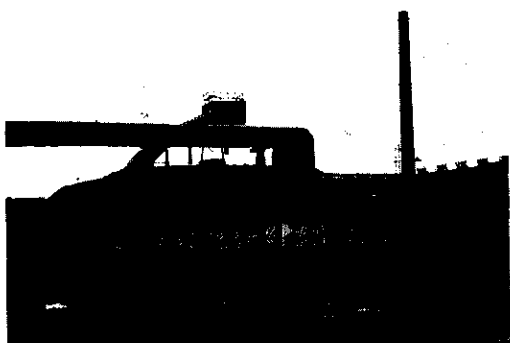


写真3 火力発電所



写真4 第一バス公社（エンジンの調整を行う修理工）

モンゴルへの関心と日本の協力についての理解が深まったようだ。どちらかというとなら、欧米に関心を持っていた多くの生徒たちが、アジアに目を向け始めたことは、大変望ましいことである。また、日本の開発援助について、ほとんど知らない状態であったが、協力隊員の活動を通して、「国際援助・国際協力」について考える機会になったようである。

今回の実践で、中学生に「JICAってなに？」から始まって「開発援助とは」・「ODAについて」などを理解させることの難しさを実感した。また、私自身の教材づくりにも、多くの工夫すべき点があり、今後の指導に役立てていきたいと思う。

今回の研修で多くの人と出会うことができ大変喜んでいる。一緒に参加した先生方、モンゴルで活動している協力隊員・専門家の人々、そしてモンゴルの人々、このよう

な人と人との出会いや結びつきが大切であり、国際理解につながっていくのではないかと思う。異文化を知り、多様な生き方や価値観を認め、人としての優しさや思いやりを大切にする国際教育が必要ではないかと確信する。

最後にこのような研修の機会を下さいましたJICAの方々には心から感謝申し上げます。また、教材化にあたっては、多くの先生方からのご協力をいただきありがとうございました。

#### \*参考文献と資料

- 「モンゴル入門」 三省堂選書175 日本・モンゴル友好協会編
- 「モンゴルは面白い」 金岡秀郎著 トラベルジャーナル
- 「モンゴルという国」 小沢重男・鯉淵信一著 読売新聞社
- 「現代高校保健体育」 大修館書店





## 第2章

# 研修参加の前提になったもの ～実践展開例～

# 公民科の新設科目『時事問題』の構想

～開発教育の視点・方法を活かして～



神戸市立赤塚山高等学校  
教諭（公民） 高野剛彦（タンザニア班）

## 1. はじめに

急激な国際化の進展の中で、本校でも卒業後に海外留学を志したり、在学中に短期留学を希望する生徒が増加している。その一方で、現実世界のさまざまな課題や地球規模の課題に対する社会的・政治的参加意識の低下や政治的無関心（アノミー）が繰り返し指摘されている。両者のギャップは、諸課題を生徒一人一人が人間としての在り方・生き方と結び付けて考えることができないからにはほかならない。そこで本校では、来年度より公民科に新設科目「時事問題」を設置することとなった。この科目は、開発教育でこれまで培われてきた「問題解決型」「参加型」学習形態を広く現代社会の諸課題の学習に応用し、これらの課題へのアプローチの方法や望ましい変化をもたらすために必要な社会的・政治的スキルを身につけさせ、現実世界においても積極的に社会参加しようとする態度・姿勢を養おうとするものである。もちろんそこで扱うテーマはこれまでの開発教育のように開発問題・南北問題の領域ばかりではないが、国

際高校や国際コースではない普通科の高校で、開発教育を「開発問題単元学習」以上に発展させる一つの試みとして紹介したい。

## 2. 新設科目「時事問題」設置の背景

### (1) 開発教育の視点

開発教育が初めて日本に紹介されてから約20年になる。当初、直接開発途上国で援助活動・開発協力活動を行っているNGOが広報活動として盛んに導入を提唱したいきさつもあり、1980年代前半までの開発教育は、途上国の貧困や低開発・飢餓といった過酷な実情を紹介し、その背景にある先進国と途上国との不公正な貿易構造や豊かな先進国に暮らすわれわれの日常生活とのかかわりを考えさせるという、いわば「開発単元」学習であった。しかしその後、社会科や英語・家庭科などの強化や文化祭などの学校行事、生徒会活動などで先駆的な多くの優れた実践が積み重ねられ、一方でこれまでの国際理解教育・人権教育・平和教育に加え、ワールドスタディーズや異文化理解教育、環境教育、多文化

教育（他文化教育）など新しい視点も次々に取り込んで、開発教育はその内容領域を飛躍的に拡大させてきた。今や「国際教育」と総称されるこれらの教育のコア・カリキュラムとさえいえる存在となっている。

急速な「国際化」の進展に伴って「国際教育」のニーズが高まったという時代的背景はあるにせよ、開発教育がわずかな間にこれほどまでに学校現場で普及したのはなぜだろうか。その理由として、開発教育が従来の国際理解教育（あるいは従来の学校教育ともいえる）に比べ、特に次の2点を重視していることが考えられる。

- ①途上国で起きている問題をひと事ではなく自分の問題としてとらえさせるために、これまでの「講義型・知識伝達型」学習形態に代えて、シミュレーションやロールプレイングなどの「参加型」学習形態を取り入れたこと。
- ②地球規模での問題を自分たちの身近な生活と結び付け、その問題の構造的背景だけでなく克服方法や解決方法まで考えさせる「問題解決型」学習であること。

こうした手法を取ることにより、途上国の貧困や低開発といった一見日常生活から程遠く思える課題を自分の課題（自分たち共通の課題）としてとらえさせ、「問題解決」を図ろうとする主体的なかかわり方を養うことができる、さらに、学習の成果・結果を求める生徒に対しむしろ課程を重視する開発教育の新しい視点は、これまでの授業では見られなかった生徒の新しい可能性や能力を引き出すことも可能となろう。これは学習指導要領が謳う新学力観にも符合するものである。

(2)「開発問題単元学習」からの脱却を目指して

開発教育が途上国の貧困や低開発といった「開発問題単元」を学習する上で極めて有用であることは間違いないが、そこでの手法や視点は他の単元においても有用であるはずである。そもそも公民科の目標が「民主的、平和的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民としての資質を養う」というものであり、単なる知識・理解にとどまらず問題解決能力や政策決定課程への参加など実践的な資質を求めている以上、「参加型」「問題解決型」学習形態はむしろすべての単元で試みられるべきである。

このことはまた、開発教育にとっても視野を広げ学校現場に定着する上で避けては通れない課題でもある。地球規模での課題についても、飢餓問題が連日取り上げられたかと思えば地球環境問題に移るといったように、世界の関心が集まるトピックは不易流行を免れない。一方、貧困が出稼ぎ労働者を生み出し国内の労働問題を引き起こすなど、現在の「国際化」が進んだ社会では、ある一つの問題は独立して存在しているわけではなく、相互にグローバルに絡み合っている。そうした中で「開発問題単元」のみを取り上げていくことは、先の公民的資質から考えても妥当とはいえない。開発教育はわれわれが日常生活の中で直面するさまざまな政治的・経済的・社会的問題も積極的に取り上げていくべきであろう。

### 3. 新設科目「時事問題」の指導計画

- (1)科目名 「時事問題」（選択科目）2単位
- (2)開講学年 第3学年 普通科

(3)科目の目標

急激な国際化・情報化の進展に伴う現在の政治・経済・社会・文化などの諸問題や環境問題など国際社会と人類の課題について、民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の育成を図るとともに、社会参加や問題解決の方法を疑似体験することにより、国際社会に貢献できる主体性のある地球市民としての能力と態度を養う。

(4)科目の内容

①現在の政治・経済・社会・文化などの諸問題や環境問題など国際社会と人類の課題について、構造的に理解するとともに、それらの諸問題が相互に関連し合っていることを理解する。②一つの課題について同じ視点からだけでなく、異なる視点が必ず存在することを知り、広い視野に立って、問題解決を図れるようにする。③ディベ-

トやロールプレイングなど主体的な参加型学習方法を取り入れ、問題解決や現実世界に望ましい変化をもたらすために必要な社会的・政治的スキルを発達させ、国際社会で主体的に生きる地球市民として必要な批判的で合理的な思考力・判断力を養う。

(5)使用教材 「高等学校 新現代社会」(清水書院)、「複眼で見る現代社会」(令文社) など

(6)年間授業計画例 (下表参照)

## 4. 指導展開例

(1)単元名 男らしさ・女らしさ～ジェンダーの視点から

(2)単元構成

①Sex と Gender (生物的性と社会的性) ……1時間②ジェンダーバイアス (性別固定

【第1学期】 授業時数 24

	指 導 内 容	配当時間
単元名	「現代の政治的問題」	24時間
内 容	①平和主義と日本の防衛・安全保障問題 日本国憲法の基本原則である平和主義が、戦争防止にどのような現実性・対応力を持っているかを考えさせる。 憲法の平和主義と、自衛隊の発足・増強の過程とを、国際情勢の変化と合わせて考察し、憲法判断だけでなく、どのようにすれば軍事力増強を避けうるのかについて考えさせる。	6時間
	②民主政治と基本的人権 日本国憲法が保障する自由権、受益権、平等権、社会権などを日常生活の側面から取り上げ、人権保障の必要性を理解させるとともに、人権侵害に対する救済と請求の方法や、人権と公共の福祉とのジレンマなどを考えさせる。 また現代の新しい人権問題として、外国人の権利、環境権、プライバシーの権利、知る権利などについても取り上げていく。	10時間
	③現代社会の政治構造と政治参加 政治が日常生活とどのように直接、あるいは間接に結び付き、またその意思決定過程に自分がどのようにかかわることができるのか、具体的事例を示しながら体験的に理解させる。	4時間
	④国際社会と日本 現在の国家が、国内政治だけで成立しているのではなく、国際的な関係の中で相互に認め合い、協力し合いながら共存していることを、日常生活における国際化の側面を導入として理解させる。 国際間の紛争を解決するために、どのような国際機関やルールがあるのかを理解させ、実際の国際紛争の解決策について考えさせる。	4時間

【第2学期】 授業時数 26

	指 導 内 容	配 当 時 間
単元名	「現在の経済的問題」	26時間
内 容	①産業構造のひずみ 現代の資本主義経済では、主要な産業部門で大企業による大量生産が行われていること、また大量販売・大量消費の実態に着目させ、輸入食料品問題など日常生活との関連から、企業の社会的責任について考えさせる。 日常経済において、中小零細企業の活動が、経済活動の重要な部分を担っていることを理解させるとともに、産業の空洞化と中小企業の海外進出などその社会的役割について考えさせる。	5時間
	②雇用・労働問題 福祉の実現という観点からさまざまな労働問題をとらえるとともに、日本の雇用問題の現状についても、広い視野から考えさせる。 経済の国際化が急速に進む中で、外国人労働者の問題や労働条件の改善にかかわる国際協力の現状と在り方について考えさせる。	6時間
	③社会保障・高齢化問題 日本の社会保障制度の現状を検討するとともに、高齢化社会を迎えるにあたって、社会補償制度の在り方について考えさせる。また、ボランティア活動などさまざまな社会福祉活動があることを理解させ、自ら積極的に活動に参加しようとする態度と技能を身に付けさせる。	5時間
	④消費者問題 日常生活における消費者としての在り方を、地球規模での相互依存関係の中で考えさせる。また製造物責任法など消費者を守る法規や制度を知り、トラブルに巻き込まれたときの対処法について考えさせる。	4時間
	⑤国際経済と南北問題 日本経済の発展に伴って、世界経済との結び付きをますます強めてきている現状をとらえ、わが国の貿易・海外投資・経済協力の在り方が、世界経済、特に途上国経済の動向と大きなかわりを持っていることを考えさせる。 さまざまな援助や協力の方法を知り、地球環境の保全と持続的開発を両立させるためには、どのような援助・協力が望ましいかを考えさせる。	6時間

【第3学期】 授業時数 14

	指 導 内 容	配 当 時 間
単元名	「現代の社会・文化的問題」	14時間
内 容	①環境問題 ゴミ・下水処理・自動車の排ガスなど、身近な生活の中の環境破壊の事実を知り、その責任ある解決のために技術論や悲観論ではなく、自らの生活をどう改善していけばよいのかを考えさせる。 現代の環境問題が、既に地球の自浄作用を変えている現実を知り、しかもそれらが地球規模で拡大・進行している状況に対して、問題解決のために世界の人々とどのように協力していけるのかを考えさせる。	5時間
	②人口問題と資源・エネルギー問題 生物の一種である人間が、有限な自然の中に適応し、生存を保持していくために、人口問題に対していかなる英知を働かせることができるのかを、先進国の側からでなく途上国の立場からも考えさせる。 自らの日常生活を振り返り、資源浪費の現状を反省するとともに、有限な資源・エネルギーをいかに有効に用いればよいか、具体的に考えさせる。	3時間
	③男らしさと女らしさ～ジェンダーの視点から	6時間

観念) を検討してみる……3時間 [本時]  
③男女共生社会を実現するには～理想と現実～……2時間

(3)単元のねらい  
私たちの性には、女性・男性という生物学的性 (Sex) と、人間として生きている

---

中で後天的に形成されていく社会的性 (Gender) がある。生物学的性とは、文字どおり生物としてのオス (男性)・メス (女性) としての性であり、社会的性 (ジェンダー) とは、その人の住む社会や文化圏、宗教、経済状況、時代背景など、さまざまな後天的要因によって形成されていく、相対的な男女像である。ジェンダーは、その社会の男女像や男性・女性に期待されている役割によって変化するし、同じ国であっても、時代や経済状況の変化によって社会的役割は変化していくものである。

これまでの学校教育における性教育では、生物学的性 (Sex) のみが強調されてきたきらいがある。確かに生物としての男女の違いを正しく理解し、その理解に基づいた異性への思いやりや優しさを涵養することは、人間形成の上でも、また性犯罪や性的被害を防止する上でも重要ではあるが、それを強調するあまり、本来相対的なものであるはずの性別役割を固定してしまう恐れを感じてきた。そこで本授業では、生物学的性 (Sex) と社会的性 (ジェンダー) の違いを理解した上で、ジェンダーバイアス (性別固定観念) を分析することで自分の中にあるバイアスについても再発見し、これからの社会 (理想の社会) をシミュレーションする中で、何をどう変えていかねばならないかを考えさせてみたいと思う。

#### (4) 授業の一例

① 本時のテーマ：「自分の中のジェンダーバイアスの発見」

② 本時の目標

(A) 「家族の役割分担表」作成を通して、家族が年齢・性別などによりどのように役割

分担をしているのかを理解する。(B) 「家族の役割分担表」を生徒相互が比較し、必ずしもすべてが一致しないことから、そのような役割が固定化されたものではないことを知る。(C) インターネットでのアンケート結果を取り出し、国・地域によって、性別役割分担が大きく異なることを知るとともに、その相違の原因が社会的・文化的相違にあることを理解する。

#### (5) 指導方法の工夫

開発教育は、これまでの内容重視の学習に対して、方法重視の学習活動であるといえる。従って本科目においても、知識・理解を基礎としながらも、能力・技能の育成にむしろ重点を置き、学習した諸課題を生徒一人一人が自らの生き方・在り方にまで発展させて考えるようにさせなければならない。このため、特にロールプレイングやシミュレーションなど参加型学習形態においては、教師は結論・結果よりも討議や学習の過程を重視する司会進行役、すなわちファシリテーター (学習活動援助者) に徹することが望ましいであろう。もっとも、意見や視点が偏ったり個人攻撃的なものになったりしないように常に配慮すべきである。

また、せっかくの参加型学習形態も客観的事実や資料に基づかなければ皮相なものに終わってしまう。社会制度や関係法令など基礎的・基本的な事項の理解を十分にさせ、資料を批判的に分析したり、客観的事実を論理的・階層的に再構築していく訓練が必要である。ディベートやロールプレイングなどの前に、グループに分かれての作戦会議など事前準備の時間を十分に取るようにし、議論が上滑りにならないようにし

時間	学習内容と主な学習活動	指導上の留意点
導入 (5分)	○復習：ジェンダーとセックスの違いを再認識する	○ジェンダーは固定化されたものではなく、所属する社会・時代背景などで変化するものであったことを押さえる
展開 (40分)	○家の仕事にはどんなものがあるか考える ○「家族の仕事役割分担表」を完成させる ○インターネットで世界の役割分担を知る ○「役割分担の違い」の原因がどこにあるのかを考える	○数名の生徒に質問する。その際、その役割を誰が担っているかも答えさせる ○3段階で点数をつけさせ、誰が点数が高いかを確認させる ○インターネットを使うのは初めてなので、仕組みと使い方についても簡単に触れる ○グループに分かれて話し合わせ、代表が発表する。今まで自分たちが当然と思っていたことが他の国では異なっていることに気づかせる
まとめ	○次時の予告：ジェンダーバイアス(性別固定観念)がいつ頃どのようにして形成されたのか考えてみよう	○宿題として、「人生の川」プリントを渡し、自分史の部分を書いてくるように指示する

たい。

(6)評価方法の工夫

新しい視点や方法を取り入れた授業を展開する以上、評価についてもこれまでとは違った視点や方法を取り入れることが「指導と評価の一体化」を図る上で重要であることは言うまでもない。そこで本科目では、1単元の学習内容を「知識・認知領域」「構造的・理解領域」「技能・態度・意欲領域」の3領域に分割して評価を考えることにした。このうち「知識・認知領域」「構造的・理解領域」については、従来のペーパーテストやレポートの提出などで評価するが(その場合も作問方法を工夫し「覚えているだけでは解けない問題」を目指したい)、「技能・態度・意欲領域」については、学習の結果よりもプロセスを重視する。具体的には評価シートを作成し、参加型学習活動を通して生徒に自己評価やグループ内評価、グループ間評価を行わせる。なお本科目で評価する技能とは、情報収集技能、情報分析・活用技能、概念把握、コミュニケ

ーション技能、批判的思考力、意思決定技能などを言う。これらの技能は平常点として評価するが、通常の科目よりも大きな比重を与える。

5. おわりに

今回の提案は来年度より実施される科目の構想であり、実際に1年間このカリキュラムで実施していく中で、さらに内容の精選・重点化を行う必要がある。また、今回は現在使われている「現代社会」の教科書の内容構成を参考としたため、「政治的分野」「経済的分野」「社会的分野」の順に学習するように構想されているが、実際には各テーマの関連を考えて組み替えていくことも考えていかねばならない。特に第3学期におけるテーマとしては、1年間「参加型」「問題解決型」学習形態を通じて何が身に着いたのかを測れるようなテーマの設定を試みたかったが、十分には果たせなかった。今後の課題としたい。



# 西条農業高校における国際理解教育の展開



広島県立西条農業高等学校  
教諭（農業） 中村義一（モンゴル班）

## 1. はじめに

本校は、90年近くの校史を持ち、現在7学科を設置している農業科の専門高校である。豊かな自然と緑に囲まれ、「創造・実践・育命」を校訓として、各分野で活躍できる人材育成を目標に教育を推進している。

国際社会の急速な進展の中で、国際感覚豊かな青年を育成することは、今日の教育課題である。

このような背景と状況認識の下に1988年に、本校においても「国際理解教育」を重点実施項目の一つに挙げ、公務運営組織の一つである教育研究部に国際係を置いて、どのような視点で、そしてどのような内容・方法によって推進すべきか、調査研究を進め、以来本校独自の国際理解教育を展開してきた。

## 2. 本校における国際理解教育の視点

本校における国際理解教育の視点は、次のようである。

(1)できるだけ多くの国の人との交流学習を中心に行う。

(2)できるだけ豊富なメニューによって全校的態勢で取り組む。

その実践例としては、「留学生との交流」「東南アジアにおける異文化体験」などが特徴的なものといえるであろう。

## 3. 留学生との交流学習

幸い本校に隣接する広島大学には、世界各国から多くの留学生が学んでいる。その「留学生との交流」の概要は、次のようである。

1学年では、新入生合宿研修において国際理解インフォメーションを行っている。毎年、10名程度の留学生を招いて、7クラスそれぞれの生徒に、2カ国の異文化体験ができるように日程を組んで行っている。内容は、国の紹介、日本と異なる話題から、歌、ゲームでの交流といったものである。

2、3年生では、校内公開の形で国際交流授業を行っている。各学年、年1回、「社会科」の授業として行っている。7クラス同時展開で、各クラスに1名の留学生

を講師に招いて授業をするものである。

また、「お国自慢海外の料理」として、「家庭一般」の調理実習に組み込んで交流学習を行っている。講師は留学生やその留学生夫人である。保健体育科では、サッカーなどの実技で交流学習を行ってきた。

こういった交流学習は、留学生やその家族たちにとっても、大変良い思い出になるようで、お互いに、またの交流学習を楽しみにしている。

#### 4. 国際交流・農業実習

本校では、校内活動の延長線上で発展させたものとして、国際交流・農業学習を位置づけ「タイ王国農業体験実習」を行っている。これは、生徒に海外での生活体験や農業体験を得させるものである。そして、生徒自身の体験、話などを通して全校生徒に世界を一層身近なものにし、国際化における社会性の涵養を目的として考えたものである。

平成元年の夏季休業中に、「国際交流・農業実習」として、タイ国へ派遣してから、以後毎年実施し、今年度で8回目を数える。第1回は、女子生徒3名を含む20名の生徒を派遣した。2回目以降は、生徒数を30名として毎年派遣している。引率教員は4名で、そのうち1名は前回引率したものが加わるようにしてきた。

全国でも初めての東南アジアへの派遣であるという珍しさもあって、派遣国については、「なぜ東南アジアへ?」「農業技術がそんなに進んでいるのか?」など、さまざまな質問があった。「先進国に〇〇の勉強



国際交流公開授業「生(なま)の社会科授業なのだゾ!」  
その国がより身近に感じられる

に行く」という従来の欧米先進国を中心とした海外留学のイメージからすれば、根本的に発想を異にするものであった。

第1回の研修報告の機関誌「サワディ」を見ると、学校長の「はじめに」の中に、次のように記されている。

各学校において、国際教育は広がりを見せ始めている。しかし、言葉の問題もあったりして、アメリカなど英語圏域に限られている感なしとしない。

私たちは、次のような独自の視点と発想から国際問題にアプローチしようとしている。

- (1)地球上には50数億の人間が共存している。日本は確かに豊かで飽食な生活をしているが、15億の人々は食糧問題を抱え飢餓に苦しんでいること。
- (2)地球的な規模でさまざまな環境問題が論じられる中で、地球の砂漠化現象は急速な勢いで進行しており、これは人類生存の基盤にかかわる問題であること。

これらの問題は、国際的視点からのまさに農業問題なのである。



タイ国農業実習。タイは仏教国。托鉢から一日が始まる

従って、私たちは、農業教育が地域農業の次元に埋没してはならないのであって、グローバルな視点から食糧問題や環境問題をとらえることのできる、スケールの大きな人づくりをしたいと思う。また、開発途上国においてこれらの問題に取り組む若い農業指導者が強く求められている状況を考えるとき、実践的な国際農業青年を育成することも、これからの日本の農業高校が担うべき役割の一つではないかと思うのである。

タイ国農業実習参加者は、希望者の中から、4月下旬に面接と作文による選考によって決定している。

7月下旬の出発までの参加者の取り組みとしては、パスポートの手続きだけでなく、タイ語とタイ文化の事前学習、英会話、それに日本文化の紹介としてのスタンプの打ち合わせと練習など盛りだくさんである。タイ語とタイ文化の事前学習については、広島大学留学生に講師として依頼して行っている。

出発前に、保護者同席での結団式を行い、

研修の目的を確認させている。

実施の時期は7月中～下旬、期間は11日間である。

費用については、移動経費とホテル代については本人負担である。

このタイ実習の企画、実施については、国際協力事業団（JICA）本部、タイ事務所に大変ご協力を願っている。また受け入れについては、タイ政府内務省をはじめ警察・病院関係者に感激的なまでの万全の態勢を整えていただいている。

## 5. 体験実習

体験実習がどんなものであったか、その概要について、再び第1回の引率団長であった学校長の文より引用する。

タイの首都バンコクから東北へ約320km。コラート高原の中央部、ナコンラチャシマ県コーン郡ジョン村で大変お世話になった。見渡す限りの平原で、水稻・養蚕・水牛・肉牛などを中心に営む人口320人の（日本流に表現すれば貧しい）農村である。13戸の農家に2名ずつ分宿させていただき、農作業を手伝い農村生活をしながら、現地の子どもたちとの交流を重ねた。高床式の1階部分は水牛などを飼育している人畜同居の家屋構造。放し飼いをしているニワトリの激しい鳴き声で一日が始まり、毎日降るスコールを貴重な飲料水とし、一粒の米を大切にする食生活をし、老いも子どももみんなが働いて家計を支えていく……このよ

うなタイ東北部の農村生活を体験することができた。自然の中に人間が調和し、つつましく生きているというのが偽らざる現実である。

しかし、人々は底抜けに明るく親切である。農村はお互いに助け合いながらむらを守っている「村落共同体」なのである。「進歩」とか「発展」という言葉の陰で、日本ではとっくに忘れ去られたものが厳然と生きている社会なのである。

私たちが滞在期間中、村民挙げての歓待をいただいた。忙しい農作業を一日休んで、村長さんをはじめ村人が私たちを農用トラックに満載して、バザールの見学やピーマイの遺跡に案内してくれた。村の主婦総出で朝からタイ料理に腕を振るい、お寺を会場にほとんど全村民参加の下に、食べたり歌ったり踊ったりの大変な交歓・交流の夕べを開催していただいた。村を発つ朝は自家製のタイ・シルクの枕（タイでは頭を最も大切にす）をお土産にいただき、涙を流して別れを惜しみ見送ってくださった。

生徒にとっても引率した教員にとっても感激の日々であり、終生忘れ得ぬ感激を味わわせていただいた。

この異文化と触れ合うことによって、「生き方」とか「豊かさ」といった、いわば本質的な問題に思いをいたすことができた。生徒一人一人の胸に

「アジアの中の日本」を実感でき、「日本の役割」へと思考が発展していくことを私たちは願っているのである。

ホームステイ先はその後、タイ政府内務省のご助言もあって、ナコンラチャシマ県ナングブンナー郡サラピー村、そしてクンパヤー村へと変わったが、生徒の感想文を読む限り、いずれにしても、そこでの生活体験は、カルチャーショックが大きいようである。

タイ国との交流が進む中で、1992年にはJICAのタイ国「高校生エッセイコンテスト」での受賞者5名が日本に招へいされた際、ホームステイ先として受け入れ、本校生徒との交流を行うことができた。また1994年には、本校と国立ナコンラチャシマ農業専門学校との間に国際交流校としての友好提携が結ばれた。また、同じ年の8月にはタイ国青年たちと引率の先生9名が来校するなど、タイ国との国際交流の進展が見られる。

## 6. おわりに

当初の、途上国への人的な協力や支援に応えうる「世界にはばたく西農生の育成」は、私たちの壮大な夢であったが、こういった視点は今も変わっていない。現在、本校卒業生2名が、青年海外協力隊として派遣され、活躍している。

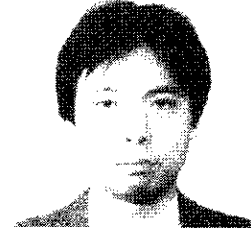


## 第3章

# 研修レポート

# ホンデュラスの赤い土と グアテマラの青い空

東京都・吉祥女子高等学校  
教諭（国語） 萩原 茂（ホンデュラス・グアテマラ班）



## 1. はじめに

私自身の不勉強もあると思うが、中米という地域の情報をふだん耳にすることは少ない。今回の研修に際しても周りの人たちに中米のホンデュラス・グアテマラに行くということを知らせても、返ってくる言葉は「それはどこにあるの?」というものが多かった。かく言う私も研修に応募するまでは、グアテマラについては辛うじて「コーヒーの生産地」ということの知識はあったものの、ホンデュラスについては何も知らなかった。それは、今回研修旅行に参加した先生方もほとんど同じ認識で、中米班を希望したのは日頃接することのない地域



写真1 ホンデュラス国際空港入国審査所

をこの目で見てみたいというのが、応募の動機であった。

中米は遠い。途中シアトルで乗り換え、マイアミで1泊し、飛行機に乗ること16時間、私たちはホンデュラスに着いた。ホンデュラスの国際空港は滑走路も短く、入国の手続きを取るカウンターも木で作られた箱の中に係員がいるような質素なもので、空調設備もないようなところだった（写真1）。開発途上国への訪問が初めてということもあり、空港に着いた瞬間から、私はそれらすべてに圧倒されていた。入国審査を終え、ロビーに出ると扉一枚隔て、すぐそこは町の通りに面するスペースで車が何台か停まっていて、たくさんの人々で溢れていた。が、私は感慨にひたる暇もないまま、迎えの国際協力事業団（JICA）指導員の方に言われるままに、マイクロバスに乗り、あっという間に空港を後にし、ホテルに向かっていった。

## 2. シニア海外ボランティア 吉村さんのこと（ホンデュラス）

【よりよい陶器作りのために】

ホンデュラスの首都テクシガルバからバ

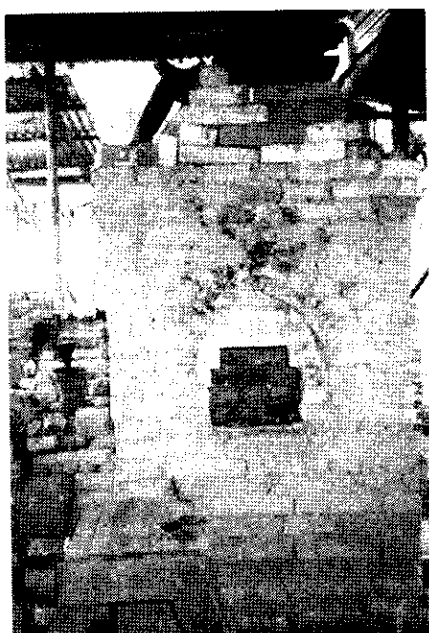


写真2 吉村さんが作った新しい窯

スで2時間。シグアテペケという村で吉村さんは陶芸を教えている。その村は一步奥に入ると電気もないような所だが、吉村さんは何とか村の人々が自立できないものかと奮闘している。外国製品が輸入される中、何とかそれに対抗できる物を作りたいと吉村さんは考えていて、上薬の工夫をしたり、高温で焼けるようにと新しい窯も作ったのである（写真2）。そして、吉村さんは陶芸ばかりでなく、社会や生活・文化 教育などにも強い関心を寄せていて、エッセイをしたためたり（「水のもれる焼き物」というエッセイが松田先生の報告書〈本書P22〉の資料に記載されている）、村のことを調べている。

たとえば子供のいる女性の結婚状況について調べたところ、この国の女性には内縁関係で生活している者が多いということが分かったという。「ポルベニール村の風景」というエッセイにはその辺りのことを次の

ように書いている。

女性たちは15歳くらいで子供を生むものが多い。この国の女性は、正式に結婚した夫婦関係にあるものは少なく、日本でいえば内縁関係で生活しているものが多いと聞いた。男性は自分の都合でいつでも内縁関係を解消して別の女性のところへ行ってしまうという。子供は大抵女性が育てているようだ。男性にとってはまことに都合のいい社会である。このとても不思議な社会については別に調べてみたいと思っている。

さらに、学校に行っていない10歳の少年に対してはその家を訪ね、何とか学校に行けるよう頼んでいるという。技術伝達のみならず、現地の問題に真剣に取り組み、一体になろうとしている姿を吉村さんから感じる事ができた。しかも、それは表面的な共感や同情に依拠しているのではなく、健全な批判精神を持ち合わせながら、惜しみなく情熱を注いでいるのである。私はそこにボランティアとしての原点そして理想を見た気がした。

#### 【ボランティアの動機】

村の視察を終え、ホテルに戻ると吉村さんからファックスが届いていた。それは私たちが尋ねた「ホンデュラスに来た動機について」の回答を寄せたものだった。吉村さんは東南アジアとの比較をしながら、その動機について次のように書いている。



---

ラテンアメリカの国々は150～170年前に独立を果たしながら、経済開発は工業化などの遅れなどから、いまや戦後独立をした東南アジア諸国に経済開発において全く遅れをとっているのです（特に中米諸国）。

東南アジアも植民地であった国々です。それなのに一方（東南アジア）は経済開発が進み、GDPも上昇し、国民生活も豊かになりつつあります。ところが、ここラテンアメリカはそれとは対照的に未だに外国の援助を受け続けていますし（東南アジアも受けていますが）、このままいくと永久に援助を受け続けるのではないかという心配すらあると思われるのです。「この違いは何か!」という素朴な疑問があるわけです。そこのところを探る手立ては何か見つからないかと思って、ここへ来ることになったのが本音です。

それで社会生活や人間関係（夫婦関係）、教育制度など少し異なった視点に立って考えてみるつもりです。今のところ、国民の「気概」とか、教育制度、人の結びつきなどが経済開発や社会水準に関係がありそうだと思いますが、定量的にとか統計的にとか、何かの因果関係で結論づけるところまではいっておりませんので、心もとないのですが、上記の説明でここへ来た動機をご理解いただければ幸いです。

還暦からスペイン語を学ぶというのは二次的なものです。ではよいご旅行を、Buen Viaje!

青年海外協力隊にはさまざまな動機で応募する人がいると思うが、吉村さんの無私  
の精神と真摯な態度には頭が下がる思いである。この研修旅行で吉村さんに会うことができ、私は本当に良かったと実感している。

### 3. 国立教育研究所 (INICE) について (ホンデュラス)

国立教育研究所は日本で言えば、文部省にあたるところで、ここでは直接的に日本人が働いている現場というより、施設見学とホンデュラスの教育事情について伺った。

教育研究所は日本の支援によって建てられたもので、完成した時には現地の新聞にもそのことが大きく報じられ、日本にはたいへん感謝しているということだった。教員が研修や授業研究をするのが目的の研究所で、会議室や実験室・体育館などが整備されていた。理科や家庭科施設などもそれなりに揃ってはいるのであるが、それほど頻繁に使われている形跡はなかった。教員の地元の学校にはこれほど施設が整っていないので、教育研究所に来て、せめて教員が実験をし、それを生徒に口頭で説明するという狙いがあるということだったが、教員そのものもなかなか施設や設備を利用できないようだ。それは教育予算不足に原因があるためだが、ホンデュラスの経済全体が逼迫している中、施設は作られても、その利用そして維持・管理はとてむずかしいということを感じさせた。

よくODAに関して「使われずに放置されたままの機械がある」など批判されるこ

とがある。この場合には一方的に物を送り、使用方法をきちんと説明しなかったり、使いこなせる人間を派遣しなかった日本側の対応のまずさを指摘してのことであるが、教育研究所の施設利用に関して言えば、運用面やシステムを工夫すれば、もう少し利用できるようになるのではないだろうか。しかし、会議室では教科方法などをめぐっての議論を熱心にしていただき、地方も含め、教員同士のサークル的な研究会の動きが活発化してきているということであったので、今後、国立教育研究所がその中心的な役割を果たしていくことは間違いない。

#### 4. 国立西部教員養成学校のこと (グアテマラ)

##### [全寮制の中高一貫学校]

グアテマラ市からバスで約3時間のソクラ県に国立西部教員養成学校はある。教員養成学校と聞いていたので、大学生がいるかと思いきや、日本でいう中高一貫教育の学校であり、国民の半分以上を占める先住民（マヤ文明を築いた末裔たちで、マヤ族やキチェ族などがある）の子供たちが生徒で、彼らは高校を卒業すると教員になることができ、村に帰り教鞭をとることができ

る。しかし、村に帰らずに都市に出る方が高収入を得られるということもあり、教員にならない層も増えているという。そして、養成学校では公用語であるスペイン語と伝統を守るために民族ごとの言葉を同じように教えているのだが、都市に出るためにスペイン語をもっと教えてほしいという要望が強くなっているということだった。経済の問題と民族の伝統を守るということは両立しないのであろうか。

##### [学校は男女共学の全寮制]

学校は全寮制で男女共学。生徒は奨学金を全員貰っているのだが、基本的には村でも裕福な家庭の子供たちが通っているという。寮はブロックで囲まれたような質素なもので、シャワーも水しか出ないので、いくら常春の国とはいえ、冬はさすがに冷たいという（写真3）。私たちが訪ねた日は文化祭当日で女子生徒によるダンスの発表などがあり、大いに盛り上がっていたのだが、男子生徒はちらほらしか見ることができなかった。聞くと、付近一帯が何日も停電のため、電柱を立て直すなどの修理のために男子は駆り出されているということだった。スペイン語熟が高まり都市化の波が押し寄せている一方、牧歌的な雰囲気ま



写真3 寮はブロックで組み立てられた質素なものだった



写真4 ウィピールを踊った女子生徒たち（寮の前で）

だまだ残っている養成学校であった。

#### [ウィピールを着た少女たち]

女子生徒たちは伝統的な織物を素材としたウィピールを着ていたのだが、それは見るも鮮やかなものだった。それぞれが違う柄で、非常に手間がかかっているというのは一目見ただけでも分かった。それに比べ男子生徒は日本で見られるようなTシャツ・ジーパン姿であった(写真4、5)。初めは「女子は家庭でも大切にされ、男子は間に合わせの物を着せられているのかな」などとみんなで話していたのだが、実際はそういうことでもないらしい。村に行けば、ウィピールを着た男子もいるという。また、金額的にもウィピールは手作りであり、Tシャツやジーパンも「ロパアメ」と呼ばれる店でアメリカの中古品が安く買うことができるから、衣類だけでは男女の扱いの違いを判断することができない。しかし、男子にはお金をかけるが、女子には「学校よりも家事を含め、労働させる」という考え方が一般的で、結婚・教育・仕事・生活などのさまざまな面で、グアテマラは本当に性差別の強い国だということがいえる。

私はそういう現状を見るにつけ、さまざまところで活動している協力隊員やプロ



写真5 男子生徒たちは、Tシャツやジーパン姿であった(グラウンド横のスロープで)

ジェクト技術協力の力で局所的には一見向上したように思えても、社会全体が構造的には変化することはないかという疑念さえ持ち始めていた。それは吉村さんが「永久に援助を受け続けるのではないかという心配」と通じるものだと思う。

しかし、女子初等教育プロジェクトチームの専門家の方が「すぐには無理かもしれませんが、行政に働きかけることによって、構造そのものからの変化も期待できるのでは」と穏やかに語ってくれた(この専門家の方の同級生は本校出身ということで、私も教えたことのある生徒だった。日本という枠を超え、世界で力を発揮している女性を目の当りに見て、とてもうれしく感じた)。時間がどんなにかかっても情熱を持ち続ける大切さを専門家の方は教えてくれた。

## 5. おわりに

このレポートに記載した以外にも心に残ったことがたくさんある。プロジェクト方式技術協力の農業開発研修センター(CEDA)(写真6)や熱帯病研究プロジェクトのこと、協力隊員の大田さんのこと(写真7)、ホンデュラスやグアテマラの町並みのこと等々。途上国を単なる観光ではなく、「人々の間」に入ることができたということは得がたい体験となった。私自身、途上国への訪問が初めてというせいもあったと思うが、「日本」や「日本における生活のあり方」というものについて、改めて考えさせられた。たとえば、ホンデュラスと比較すると、日本はあまりに物が多いの



写真6 農業開発研修センター（CEDA）入り口。ここでは、灌漑排水技術開発の研究などが行われている（ホンデュラス）

を実感する。「物が多い」ことが必ずしも悪いとはいえないが、二国間の開きには愕然とさせられた。

物もなく、職もなく、政権が不安定だという状況よりは、日本の方が安全で暮らしやすいということは間違いないが、利便さを求めて、あまりにスピーディーに社会が動いているということは否定できない。「24時間営業のコンビニ」は必要なのか、電力消費量はそのまま増え続けていいのか、新車は購入しなくてはいけないのか等々。急激な変化は産業構造上、無理かもしれないが「消費を美德」とする考え方やライフスタイルは地球規模の視点に立った時には、もはや成り立たない。

今回の研修を通して私は今まで漠然としか認識していなかった「開発教育」というものについて、理解を深めることができた。また、ODAばかりでなくNGOの活動につ



写真7 肥料の改良について指導している大田さん（左）。中央はカウンターパート、右はこの地域のリーダー。協力態勢は万全で、生産力が高まっているという（グアテマラ）

いてもいろいろ知ることとなった。これからも学ばなければならないことはたくさんあるが、単に学ぶだけでなく具体的な働きかけをしなければならないと考えている。現場や相手の顔が見えない時には、「援助」といってもなかなか実体をとらえにくいものだったが、研修を経て、私にはいま相手の顔が見える。一人の力には限界があるので、どこまでできるか分からないが、足元のことから進めていく所存である。

これから、ホンデュラスとグアテマラはどのような方向に進んでいくのであろうか。ホンデュラスの赤い土の上にはアスファルトが敷かれ、舗装道路が増えていくのであろうか。そして、グアテマラの青い空はどこまでもいつまでも広がり、平和が維持されていくのであろうか。これからも注目していきたい。最後になったが、今回の研修に際してはJICAにたいへんお世話になった。ここに感謝の意を表する次第である。

# キリマンジャロのそびえる国タンザニア

～豊かな自然と GNP100 ドルの生活とのアンバランス～

東京都立八潮高等学校定時制  
教諭（理科） 斉藤 宏（タンザニア班）



## 1. はじめに

タンザニアというと、なにを想像するであろうか、マラソンのイカンガー選手とかアフリカー高いキリマンジャロ山のそびえる国とか、野生動物の天国、セレンゲッティ国立公園とかのイメージが出てくるのではないだろうか。（写真1）



写真1 キリマンジャロ山

いずれにしても、日本からは遠いアフリカの国として、なじみの薄い国であることは間違いないだろう。

南半球といっても南緯0から10度の中に入るの、ほとんど赤道直下といってもよい位置だが、国土の大部分は高度1000mから1500mの高原地帯であるため意外と

すごしやすいのである。人口は2800万人にたいして国土は日本の2.5倍という広さで、都市部をのぞいてはほとんどまばらにしか人は住んでいない。

しかし、驚くことに、この国の1人当たりGNPは約100ドル前後で、世界の中でも、低所得開発国、いわゆる最貧国に入る国なのである。

今回の滞在は飛行機での移動を除き実質8日間で、私たちが訪れることができたのは、広いタンザニア国土のなかの北東部から首都ダルエスサーラムまでのほんの一部であるが、それでもその移動距離は1000kmをゆうに超えるのである。

## 2. すばらしい国立公園を裏で支える地道な援助

今回のルートは、お隣のケニア、ナイロビ空港が出发点でそこから、陸路国境を越え南下して、首都ダルエスサーラムをめざすのである。最初の訪問地がングロンゴロコンサルベーションエリアで、機械整備の技術指導をしている、稲見専門家を訪ねた。彼は、観光・天然資源・環境省野生生物局に属している（写真2）。国土の20%近く



写真2 ングロンゴロ国立公園

が野生動物保護区域に指定されており、その広大な地域を維持していくため多くの車両、重機械が使用されており、これらの維持管理のメンテナンス技術は欠かせない。そのための技術指導といった重要な任務を持っている。稲見さんは専門家といってもマラウイを含め、アフリカに20年という、ベテランで、現地語のスワヒリ語を自在に使いこなす姿は草の根の協力隊員といったイメージで、肩ひじ張った指導というよりも、現地にとけ込んだ活動で、共感を覚えた。

彼の仕事場は、すべてのナショナルパークの機械整備であるが、ここ、ングロンゴロでは、仕事場といっても、がらんとした整備場には工具と溶接機以外ほとんどめぼしいものはなく、稲見さんの指導で、溶接機で作ったばかりのエル型部材で組み立てた鉄製の部品棚も、棚板になる板がまだ予算が通らないため骨組みだけで、あの部品棚に部品が置かれるようになるのは何年後か、というよりも置かれる日がくるのか考えさせられたのである（写真3）。棚板ぐらいと日本人なら考えるだろうが、これを、日本の援助で買って入れることは簡単だが、それでは自助努力を引き出すことには

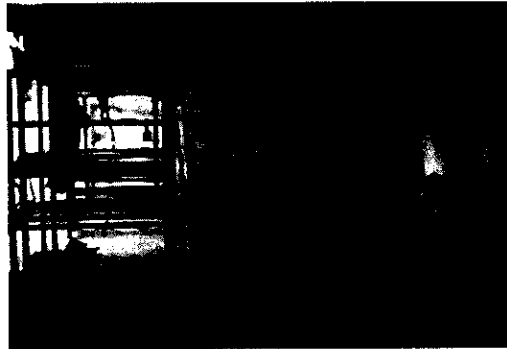


写真3 板のない鉄製の部品棚

ならないのである。稲見さんは、現地の予算でそれが買われるようになるまで何年でも待つつもりだと言っていたのが印象的であった。1年、2年と期限が決まっている専門家は、自分のことを考えればその間に成果をあげなければならないと考え、おそらくその程度のものは待つよりも買ってしまった方が早いと考えるのがふつうではないだろうか。

稲見さんの職場のトップである、環境省の長官のチャウシさんに稲見さんの評を言わせると、今までの英国流のトップダウン方式のシステムは住民との交流の面で欠けるが、上と下とのコミュニケーションがある日本流のやり方には感心しているということであった。稲見さんは、ここには資材はなにも送っていないが、長官をはじめとして、カウンターパートにも評価されているということは、まさに技術援助が文字通り行われ、いつかは壊れてなくなってしまう物ではなく、永久に残る技術が本当に移転されていると考えてよいのではないだろうか。

---

### 3. 学校を取り巻く現状

今回訪問した学校は、モシのテクニカルスクールとタンガのガラノスセカンダリースクールの2校である。

学校教育制度は、

- (1) 保育園・幼稚園
- (2) 初等教育 小学校（義務教育）5～8歳で入学（7学年）
- (3) 前期中等教育 中等学校O（オーディナリーレベル）（4年）

ナショナルイグザミネーション（合格者が進級できる）

- (4) 後期中等教育 中等学校A（アドバンスドレベル）（2年）

兵役（0.5年）

ナショナルイグザミネーション（合格者が進級できる）

- (5) 大学（3年）大学はダルエスサラーム大学1校だけしかない。

教員養成については、初等教育修了者は4年、Oレベル修了者は2年間、ティーチャーズ・トレーニング・カレッジにて訓練を受けるとそれぞれグレードB、グレードAの教員資格を得るという制度になっている。（1992年の教員数は10万1306人）

前期中等教育（日本の中学）と後期中等教育（日本の高校）は日本流でいえば中高一貫教育のように一つの学校の中にあるのだが、その就学率は極めて低いのである。標準就学年齢人口（1992年資料によると66万8868人）に対する就学者の比率は、義務教育の小学校でさえ68%、Oレベル

に入学するのは約5%というのだから驚くほどである。さらにAレベルに進学するのは1%、大学に入るものは1988年で1162人と数えるほどで、統計では表せないほど圧倒的少数である。

なぜこのような現状なのか、その原因は国民の貧困と教育の予算不足が大きな原因であるようだ。前述のテクニカルスクールで教えている青年海外協力隊の小宮路さんによると、ここは寄宿舎制であるが、学費は年1万5000シルでその他設備費などで2万シル計3万5000シル（日本円で約7000円）かかり、そのお金を持ってきたものを校門で教師がチェックし、受け取った者に宿舎のマットレスを渡すという徹底ぶりだ。その理由はお金が集まらなければ学校運営が続けられない現状だからなのである。それは、校舎の中を案内してもらって分かったのだが、教室の天井は落ちて穴だらけ、机、椅子は板が取れて骨組みだけ、生徒は、授業が始まる前にどこかから板を見つけてきて、その骨組みの上にのせてノートをとるということで、黒板もコンクリートに黒いペンキを塗ったもので、小宮路さんの教室などは、角で光が入らないのだが、電気もつかないままで、暗がりのなかで製図を教えているというから驚きである（写真4）。学費を払うと給食が食べられるのだが、朝はウジといってトウモロコシを湯でといたスープだけで、昼もウガリという豆を煮ただけのものが毎日である。これで育ち盛りの子供たちが生活していけるのかと考えてしまった。

訪問したときは、すでに新学期が始まっているのだが、生徒たちがお金を用意でき



写真4 天井の落ちた教室

ないようで、まだ集まりが悪く授業はまだまだ始まらないようで、既に来ている少数の生徒たちは、自習をしている状態であった。物理であったが教科書は背表紙も外れかけ、紙は黄色く変色していて相当使い込んだ様子だが、ノートは読みやすい英語でしっかりと記入してあり、よく勉強していることが分かった。テクニカルスクールといっても、実験器具や実習機材などほとんどといってよいほど何もなく、結局、教科書とノートだけで知識を詰め込む現状なのだろう。

これに対して、田代隊員が勤めるガラノスセカンダリースクールの方は校舎や教室はしっかりしていた（写真5）。これには理由があるのである。一つは、寄宿舎制をやめて通学制に移行中であることで寮費節



写真5 ガラノスセカンダリースクール

減になっていることと、こちらは農業系の学校で、学校の敷地が驚くほど広いのである。そして校舎の周りには農園や牛舎、豚舎、鶏舎、羊舎とあり、たくさん家畜が飼われているのである。ここでは、給食用のトウモロコシを自給しているし、刈り取りも生徒にやらせるので費用はかからない。その倉庫に一教室使っているほどである。また学校をはじめ先生方は、自分の畑や家畜で収益を上げている。これは、ばかにできない額で、教員の給与が月に3万シルとすると、その3~4倍くらいの収益をアルバイトで上げているようである（写真6）。これには、それなりの論理があるので、政府の予算不足のため、職員の給与未払いも多く、生活ができなくては良い教育などはできないのだから、アルバイトをするのは当然という考えのようである。



写真6 トウモロコシを空き教室で保管

ここで、授業参観の後、教職員との懇談会が持てた。その中で、日本人で知っている人は誰ですかとのこちらからの問いに、しばらく考えた後に、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の緒方貞子さんという答えだった。これは、意外だったと同時に、国際機関への日本の影響力が重要なことを考えさせられた。また、日本の情報不足の



原因として、なぜ、日本の教科書などの英訳はないのか向こうから質問を受けた。これは、言われてみると、見たことがないし、そうした方がいいという考えも思いつかなかった。例えば、英語の教科書でも、その話は欧米の生活が中心で、日本の生活を書いてある部分は少ない。これを海外の子どもたちに見せても日本理解にはならない。日本の理解を促進するためにも英語の各教科の教科書というのは必要なのではないだろうか。

生活指導の問題については、イギリス流の体罰が許された国らしく厳格である。例えば、いじめが発覚した場合は退学、また女性徒が妊娠した場合法律で決まっているので退学、当然妊娠させた相手が生徒だった場合退学である。授業の態度を見ている、私たちが見ているということもあるが、真剣そのもので、ノートも実にしっかり書いているのである。いつもこうなのかとの問いに、説明を聞く時間と自由に話す時間があるということだったが、久しぶりにいい授業を見たという感想である。

しかし、田代隊員によると、この国も学歴偏重の社会で、ナショナルイグザミネーションに受からないと進級できないことから、日常的なカンニングが存在するということである。

#### 4. 日本の稲作技術で村の生活が向上した

工業関係のプロジェクトがほとんど効果を上げていない中、キリマンジャロ州モシでの稲作プロジェクトは住民の生活が着実に向上する、目に見える成果を上げている。

キリマンジャロ農業技術者訓練センター、略称KATCを訪れた。

この訓練センターのプロジェクトは、1970年代からのキリマンジャロ州に対する、開発調査、技術協力の中で、1986年～1993年に有償資金協力によるローアモシかん灌漑計画（水田1100ha、畑地1200ha：1987年竣工）の成果によって、タンザニア側から要請されたプロジェクトである。

もともと、この地域はキリマンジャロからの地下水が、泉となって湧いている場所がいくつもあり、灌漑設備さえつくれば稲作に向いている場所であった。灌漑施設のほか、トラクター計304台の供与、無償資金協力による籾収穫後処理施設建設という、集中的な資金、機材の投入により成功したのである。そして、この気候に最もあった品種がIR54ということをつきとめ、この品種による、日本式稲作技術を指導したのである（写真7）。2000軒の農家にたんぼ1枚3000シルで貸したところ、その年に1ha当たり8tから9tの収量があり、これは、今までの方式に対して平均で3倍の収量で、1回目の収益で家が建ったそうである（写真8）。今年までに4回ほどの収穫をし

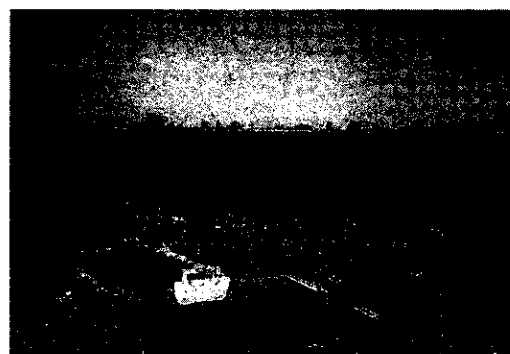


写真7 まるで日本の田園風景、日本式たんぼ



写真8 たった1年の米の収穫で建った家の前で

ちていないのである。しかも、もともとトウモロコシとバナナが主食の国民であるが、米の人気は高まる一方で、需要が増えるため値段も下がらない。さらにこの地区はケニアに隣接し、ケニアでの米の値段がタンザニアの倍ということも手伝って、米を作る農家が増える一方だということだ。

しかし、新たな問題も起こってきている。それは、プロジェクト地域の上流で、米作りが儲かると分かると、見よう見まねでたんぼを作り、水を勝手に盗水して米を作り始める農家が周りにどんどん増えて、評価されていることは良いのだが、下流に来る水が減りはじめ、肝心のプロジェクト地域で休耕のたんぼを順番で作らざるを得なくなってしまったのである。この問題は、一方で稲作技術の技術移転としては願ってもない効果だが、無秩序な広がりには水の欠如とともに住民の争いに発展する可能性もあり、危険性もはらんでいるのである。

とはいってもこの大きな成果をもとに、稲作をタンザニア全土に普及するため、農業技術者を訓練するためのプロジェクト方式の技術協力を始めたのである。

これは、各地の農業指導の教官を1回20名ずつのコースで、5年で1000名に、タン

ザニアで確立した稲作技術を指導するのである。

この方向は、イニシャルコストはかかっても、ランニングコストはかけないことを基本に、有機無農薬栽培を教えていくそうである。もともと肥沃な土地で、気温が高く最低でも22～23度あるため堆肥の分解も早く、有機農法に適しているのも、高い化学肥料を使わなくてもよいようにすることが、タンザニアの現状に根づく方法であろう。例えば、アゾラという浮き草を使い、窒素の固定を促進させたり、アヒルを泳がせ、雑草をたべさせて除草させたり、今後は水牛を飼って機械力ではない方法で耕したりと、現地に合った援助を目指しているのである。

このプロジェクトの専門家たちはリーダーの鯉淵さんをはじめ年輩の方が多く、経験が豊富で、皆さんが自信に満ちていた。鯉淵さんの文章の中に、「お金や施設や組織がなくなったとしても残るものを生み出していくことがわれわれの責務だ」と書かれているが、まさにこれこそが、自助努力を引き出す援助の方向性だと思うのである。

## 5. 失敗を認め方向転換した サメ村落林業プロジェクト

ダルエスサラームから北に430km離れたキリマンジャロ州サメ郡で展開している林業プロジェクトは、過度な薪炭材採取および過放牧により森林が急速に減少している現状に対して、薪炭林造成、アグロフォレストリーシステムの育成、飼料木材造成などを目的に半乾燥地における森林造成を

目的として、1991年の準備フェーズから始まった。

ところが、プロジェクトサイトの基本的な選定に問題があった。それはベースになるサメの雨量が500 mm/年で何とか林業として成り立つ条件なのだが、そこからわずか10kmしか離れていない500haの広大なMKONGA（ムコンガ）プロジェクトサイトはそれよりも半分以下の200 mm/年の雨量しかなかったのである。さらにそれ以上の問題として、東側（インド洋側）に1500 m以上の山岳地帯が連なり、その地形からフェーンにも似た乾燥した強い風が吹くという悪条件で、育とうとする苗が強風のため気孔を閉じてしまうのか成長が遅く、ここでの林業はもともと困難なのである。

なぜこの場所を選んだのかは疑問に残るが、今、根本からこのプロジェクトの見直しと方向転換を進めている。それは、トップダウンの画一的な指導ではなく、住民が何のために木を植えるかという原点に立った視点に戻りやり直すことである。そのためにこちらが村を巡回し、信頼関係をつくりながらその村のニーズをつかみ、その村に合ったメニューを作り継続的にサポートする方法に切り替えたのである。

その転換した新しい方法で林業プロジェクトが指導をしているマサイ族の伝統的な村を訪問した。サバンナの中の道なき道を、まるでバリ・ダカールラリーのように1時間以上走った場所で、町との交流はほとんどないと思われる場所である。マサイは本来遊牧生活で定住しないのだが、ここでは援助でできた井戸のそばに定住している。

そこに苗を配布してケアを続けているサイトの一つである。村長が親しみやすい立派な方で、突然訪れた私たちを歓迎してくれて伝統的な土の家の中も喜んで見せてくれた。私たちにしてみれば貧しい家だが、村長は誇りを持って自慢げに見せてくれた（写真9）。さらにここで生活している女の子たちの屈託のない明るさに、ここにはこの文化があり、生活がある。そしてそれを私たちの価値観で判断してはならないのであると思った。

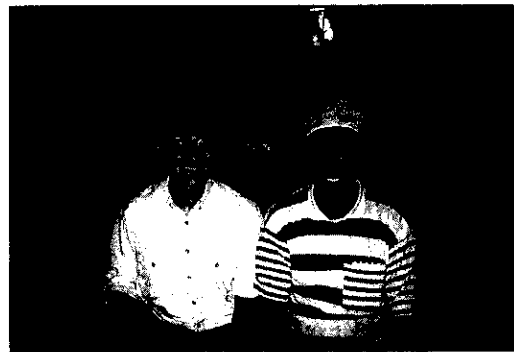


写真9 マサイの土の家の中で村長と

どこの援助かは分からないが、手押しポンプ井戸はこの村にとっては素晴らしい贈り物だったことが分かる。水くみは女の仕事と決まっている伝統的社会構造のなかで、女性を重労働から解放すると同時に衛生面での改善とこの場所が井戸端としてコミュニケーションスペースになっているのだ。帰るまでの間、いつも誰かが井戸を使っていて、人が集まっている。井戸一つの援助がこれほど大きな効果をもたらしていることに、まさにその村に合ったきめの細かいニーズを知ることが、援助の基本であることがよく分かった（写真10）。



写真10 コミュニケーションスペースになった手押しポンプ井戸

## 6. 母子家庭を救った小さな協力

インド洋に面したパンガニ漁業指導センターに漁具漁法青年海外協力隊員を訪問した。この漁業トレーニングセンターでは漁民を対象とした環境を守る漁法の指導、トレーニングを行っている。現地では、手軽に手に入るダイナマイトを使ってのダイナマイト漁法や毒物を使った漁法など、珊瑚礁の破壊や根こそぎ取ってしまう環境破壊の漁法が行われているため、それらに頼らない正しい漁法を指導しているのである。18歳から35歳までの漁師をここに受け入れて宿泊させながらトレーニングを行うのであるが、宿舎は汚く衛生面では最低の環境で、ここで指導していた最初の隊員は任期の間に6回マラリアにかかったそうで、現在の森島隊員も既に2回かかっているほどだ。またトレーニングのエンジンや冷凍設備など満足に動くものはほとんどなく、指導船ですら船首のFRPが欠けていて、波で海水が入って当然という状況であった。この理由はやはり政府からの予算がほとんどこないことで、結局自分たちで漁獲を販売するなどして利益を上げないと続け

ていくことも難しい現状なのだろう。

ただ、この悲観的な状況の中で森島青年海外協力隊員が現地の母子家庭の20歳の女性の生活を助けようと、休みを利用して日本円で1000円程度の出費で土で3m四方ほどの小さな喫茶店をつくり、彼女がそこで働いて月に公務員の給与と同じだけの利益を上げて彼女を自立させていた姿にさわやかさを感じた（写真11）。援助とはお金や技術だけではなく、このような住民との密接な交流の中で生まれた小さな協力も大きく評価されてよいのではないだろうか。



写真11 小さな援助で建てた、小さな喫茶店

## 7. 母子の命を守る母子保健プロジェクト

母親と5歳以下の子供たちをどうしたら死なないようにできるかがこのプロジェクトの目的である。妊産婦の30%以上がHIVウイルスの陽性者であるという驚くべき状況だが、それ以上にマラリア、呼吸器病、下痢といった日本では考えられないような普通の病気での死者が死亡原因のワースト3という現状ではエイズよりもっと基本的な医療、衛生の問題が山積みということである。それだけに、母子保健のサービス拡充、技術の向上が望まれる。しかし

---

国は農業、工業開発に力を入れているため保健衛生は最後に回される。そのため予算がほとんど回ってこないのがこの問題である。プロジェクトの代表的なサイトであるタンガの村で住民代表との話し合いを持つことができた。ここでの住民の訴えの主なものは、水道と井戸の改善、道路交通手段の改善、教育、教育設備の改善、健康、保健サービスの抜本的な改善と基本的で切実なものばかりであった。いわゆる社会インフラの整備が全くできていないのだ。

首都ダルエスサラームにある国立ムヒンビリ病院は母子保健プロジェクトの中心的なサイトである。ここでは専門の医師を中心に小児科、一般病棟の診療と新たに臨床検査棟を建てて、検査に裏付けられた治療の普及を指導している。現地の医師の知識は日本の医師よりも高いのだが、国内に大学が一校しかなく医師の絶対数が全く足りない現状で、地方では医師の免許をもった者が診療するのはまれなのである。

とはいえ、栄養不良が根底にあるため、この国では下痢ですぐに体重が下がり、命にかかわる症状になるほどで、生活改善などベーシックな問題を一つずつクリアしていく努力が必要である。しかし、今まで、無料だった診療費を去年から200シル（40円）の受付料を取るようになったそうだが、このわずかのお金すら払えない。貧困が大きな原因である。日本の医師が診療を援助しているだけでは焼け石に水という感じで、やはり優秀な現地の医師やアシスタントメディカルオフィサーの数を増やして全国に配置するような方向とインフラ整備を同時に進めることが必要なのではないだろうか。

うか。

## 8. おわりに

最後に、全体を通して感じたことは、すばらしい自然環境と広大な自然保護区を持ちながら国民の生活は、GNPの1人当たりの額が日本円にして1万円ぐらいを推移しているいわゆる最貧国と呼ばれるタンザニアに援助国である日本はいったい何をするのが重要なのか考えさせられた訪問であった。巨額の日本の援助もこのタンザニアでは砂漠に水をまくようにあつと言う間に吸い込まれ消えていってしまう。いわゆる手の付けようがない状態といたらいいのだろうか、治安が悪くなってきているのも、貧富の差が拡大してきていることに起因するのではないだろうか。貧富の差を広げずに全体のレベルを上げていくことが必要なのだが、それはまさに難題である。

ダルエスサラームで民芸品のマコンデ彫刻を売っているマコンデ村に行ったとき、土産物屋の店主やぶらぶらしている人たちと話していると、日本人と見ると日本の建設会社の名前が出てくる。これは、日本の企業が市内で道路建設を請け負ったからなのである。その時土木労働者として雇われたことがよほど良かったらしく、今でも忘れられないのである。そして彼らは、私たちにも仕事をくれ、あるいは仕事を紹介しろと言ってくるのである。産業が発達しないので仕事がない、当然援助に頼る生活が続き自助努力は活性化されない、政府はまた新しいドナー国を探すとといった悪循環が続いているのであろう。

このような悪環境の中で、モシの稲作プロジェクトのように着実に生活向上に役立った成果を上げたり、観光資源に力を入れなくてはならない状況の中で地道に公園局を支えている稲見専門家や、どんなに国の予算がないとしても母子の命を守るためギリギリの活動を続けている母子保健プロジェクト、そして母子家庭の生活をアイデアと努力で支えた森島協力隊員など現地で援助にかかわる人たちが持ち得る能力を惜しみなくつぎ込んでいる姿には感動した。

もう一つ今回の訪問で忘れてはならないのは、ボランティアを取り巻く危険性である。レークマニユアラ国立公園からつぎの目的地モシに向かう途中、美しいキリマンジャロ山を望む道路脇に日本語で刻まれた石碑が立っている(写真12)。ここで1985年11月に、タンザニアでは忘れてはならない事故が起こったのである。青年海外協力隊員5人の乗った車が、ダルエスサラームに向かう途中見通しの悪い長い上りのカーブを登っていく途中、上から下りてきた巨大なタンクローリーに接触しそのまま引

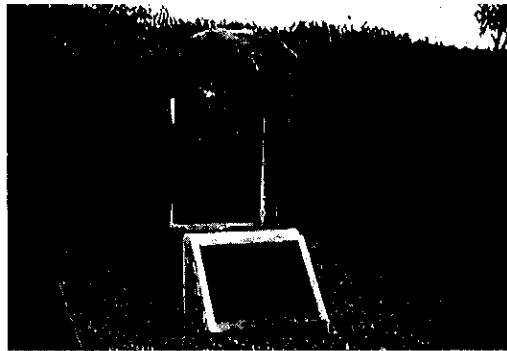


写真12 青年海外協力隊員の死亡あとに建つ石碑

きずられ、全員が亡くなったのである。地元では死のカーブと呼ばれている場所である。いま、やっこのカーブを広げて見通しの良いカーブにする工事が始まっている。理想を夢見て日本を遠く離れてアフリカの地で、目的を達せず亡くなった彼らはさぞ無念だったに違いない。

途上国での、ボランティアを取り巻く危険は交通事故だけではなく数え切れない。その危険をおかしてもなお余りある充実感が得られるからこそ、彼らは志願するのだろう。彼らの努力がきっと近い将来大きく実を結ぶことを祈りながら、タンザニアを後にしたのである。



# モンゴル国ウランバートルを旅して



愛媛県立松山西高校  
教諭（公民） 山崎誠一（モンゴル班）

## 1. はじめに

1996年7月25日から、8月3日まで、国際協力事業団（JICA）が主催する「平成8年度 高校教師海外研修 モンゴル班」の一員として、モンゴル国ウランバートル市における、日本の経済協力の現場を視察することができた。

## 2. モンゴルへ

7月26日午前11時40分、やっと北京空港を離陸した中国民航機は、午後2時50分頃ウランバートルの首都空港に着陸した。

右側窓際から2番目の席に座っていた私は、濃い緑の木々に覆われた山々が薄緑の草原や山々に変わり、やがて緑もまばらな赤茶けたゴビ砂漠を通過、再び緑が濃くなっていく様を観察することができた。砂漠にはいくつかのオアシスを見ることもできた。また真白く輝くばかりに白いオアシスくらいの大きさの場所がある。岩塩の採掘場という。まるで真白いモザイクがはめ込まれたような白さである。

そして日差しが強いからであろうか、浮かぶ雲の影が真黒く、まるで焼け跡のように大地に印されるのは印象的であった。ステップ地帯では、まるで草が焼け焦げた跡のように錯覚してしまうほどであった。

やがて着陸のため機が高度を下げ始め、ウランバートル市上空を旋回し始めた頃から間近な山々は美しい薄緑に覆われ、まれに緑の木々が塊となって生え、その柔らかな緑の稜線と相まって、そこに幻想的な世界があった。その緑の世界の中に、まるでマッシュルームのようにゲル（パオ）が点在し、散見する羊の群、それらはまるで、おとぎの世界のように思えた。

空港には青年海外協力隊調整員事務所の日本人職員と現地職員が出迎えてくれ、マイクロバスで市内へ向かう。ふと九州の阿蘇地方を思わせる山々が緑の褥に覆われている。

ナーダム祭りの行われる広場も過ぎて、高層の団地（アパート）群が随所に見られる。2本の大きな煙突は、旧ソ連の援助で建てられた火力発電所という。広い道に車も人も結構多い市内中心部に入り、やがて政府の建物の集まるスフバートル広場

を通過してウランバートルホテルに着いた。レーニン像の立つ広場に面した堂々たるホテルであった。

### 3. モンゴルでの見聞

#### (1) 青年海外協力隊モンゴル調整員事務所 (写真1)

7月26日、ウランバートルホテルで旅装を解いた後、モンゴル調整員事務所を訪ねた。旧ソ連の援助でできたという通産省ビルの11階に事務所はあったが、2年前からエレベーターが故障しているとのことで、当然のことながら歩いて登った。11階はさすが、眺望は素晴らしく、広場周辺の政府機関の建物や、彼方にまで広がる市内の様子が一望できた。

着任したばかりという四釜所長に話を聞いた。

「今は、モンゴルの短い夏の季節である。たまたま、本日は、新首相エンフサイハン氏が組閣を行っている。リストラで13省

が9省になる予定で、この通産省も対象になっている。ウランバートル市での労働者の平均月収は、1万2000円、郊外になると1万円、地方では6000円くらいである。ちょうどカンボディアくらいと考えてよい」とのことで、この通産省ビルのエレベーターは電気系統も含め、約1000万円あれば改修できるのにそれができない状態であるという。

モンゴルへ到着早々、この国の置かれている厳しい経済状況を見せつけられたのであった。

この若くエネルギーに見える所長は次のようなことを語った (写真2)。

「草原の国とか、風の国とかいうのは、郊外へ10kmも出て行けばの話で、首都ウランバートルは、いくなれば別の国である。異国には異国のあり方があるのであり、自分の身は、自分で守ることが大切である。青年海外協力隊員は、訓練を受けているのではあるが、それでもカルチャーショックを受ける。協力隊員が困難を乗り越えていくのを、事務所ではサポートしている。現在28名の隊員がいるがその3分の1が日本語教師で、大学や高校で教えている。それ

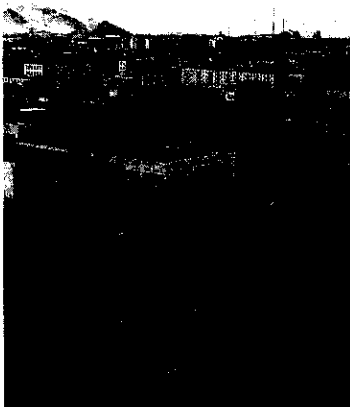


写真1 JOCVモンゴル調整員事務所から



写真2 JOCVモンゴル調整員事務所にて



---

以外は産業関係分野の隊員が多い。社会主義から脱却しようとする市民に、協力しようとする隊員の姿を見てほしい。

この国は、邦人も少なく、商社も少なく、もの皆すべてが珍しく面白い面もある。冬は歩き回るといことはできず、いかに寒さから身を守るかということが重要なのである。

モンゴルとソ連との70年が理解できて初めてこの国が理解できる。人々は商才にたけ、英語・ロシア語・中国語を巧みに操る者もいる。才覚のある者は、頭角を現している。社会主義の下ではソ連はいうなればビッグブラザーで、日本は公害で1カ月もたないような国と思われていた。市場経済に移行後、それとはどうも違うなということが分かり始めたようだ。

モンゴルの人々も、厚い雲の下から、いきなり光の下に引き出されても戸惑うばかりで仕方ないので、何事もまずは一步一步克服してゆかねばならないだろう。

JICAは、伸びようとするこの社会で障害になっているものを取り除こうとしている。万里の長城が何故造られたのか、中国側から見るのではなく、モンゴル側から見てほしい。異文化の中での開発とは何か、肌で感じとってほしい」

## (2)教育省

7月27日、教育省に初等中等教育を担当する局長を訪ねて話を聞いた。一番印象深かったのは、教員の給料は一般の公務員や医師より高いということである。

「モンゴルの教育システムは、8歳で就学し6年間の義務教育があり、試験があつ

て優秀者にはさらに2年間の教育が行われる。8歳就学は世界で2カ国しかなく、いずれ6～7歳に引き下げたいが、学校と教師の不足ですぐにはできない。新学期は、9月1日に始まる。1995年には、新立法があり、教育を最重要分野と位置付け、今年(1996年)は、モンゴルの教育年とされ、特別な年である。教育刷新に当たっては、先進国、特に日本の経験に倣って行いたい」などと語った。

## (3)市場(ザハ)・国立デパート・第3地区ショッピングモール

7月27日の午後、我々が訪ねた市場は、ホテルから車で10分ほど、サーカスの建物の横にあった。

市場の中は、肉類、野菜からお菓子に至るまで、多くの品物が並べられている。ここにいる限り、物資はあふれているという感じがする。お菓子類は、ほとんど輸入品である。ロシアからのものが一番多く、次いで東欧、中国、それに韓国、そういえばコカ・コーラもあった。

国立デパートという立派な建物に入ったとたん、TVなどで見慣れた東欧やソ連の店の姿が思い出された。3階と4階で、品物を買おうとすると、商品ケースの向こうのおばさんが、紙片にその品物と金額を書いてくれるので、それをもって会計で支払い、スタンプの押された紙片を、おばさんの所へ持ち帰ったら、初めてその品物を包んでもらえた。購買意欲は、相当にそがれてしまった。

このほかに、馬頭琴を40米ドルで買い、モンゴル民謡の入ったカセットテープなど

も買い求めた。

(4) ザイサントルゴイ・ボクトーハン博物館・テレルジ・その他 (写真3)

これらを訪ねたのは7月28日のことであるが、この日の朝は、初冬を思わせる寒さであった。ワイシャツ姿で集合した者は、懇願してホテルに取って返し、ジャンパーに着替えた。

ザイサントルゴイへ行く。高いモニュメントの立つ頂上に立つと、ウランバートル市内が一望できる。

モニュメントの360度にわたって描かれているモザイク絵は、ソ連とモンゴルの1920年以來の友好関係が描かれていた。その中で、モンゴルではハルハ河戦争と呼ぶ「ノモンハン事件」の個所では、日本の旭日旗を踏み破る兵士の姿に、モンゴル人の考える「ハルハ河戦争」と、日本人が考える「ノモンハン事件」の違いを思い知らされた。

ボクトーハン博物館へ行く。地下資源から動物までが、各部屋ごとに陳列してあった。ちなみに、モンゴルで今一番望まれているのは、地下資源の活用だという。JICA



写真3 ザイサントルゴイのモザイク絵

は、地下と地下資源調査に協力しているそうである。

テヘルジへマイクロバスで向かう。ひどく揺れるが、気がつくとも道路の舗装状況は決して悪くない。どうもバスのスプリングだかサスペンションだかが悪いのであろう。国立公園の亀岩とかも面白かったが、車を止めた小高い丘の周りで見た白い可憐な花、それがエーデルワイスと聞いて感激してしまった。また、民族衣装デールを着て馬を走らせていく2人の老人を呼び止め、車から降りて写真を撮らせてもらったが、その風格には圧倒された。そして馬を歩ませ去ってゆく後ろ姿には、堂々として威厳があった。これこそは遊牧民、人間としてかくありたいものと憧れすら感じた。(写真4)

(5) モンゴルテレコミュニケーションカンパニー・地上局

7月29日午前、モンゴルテレコミュニ

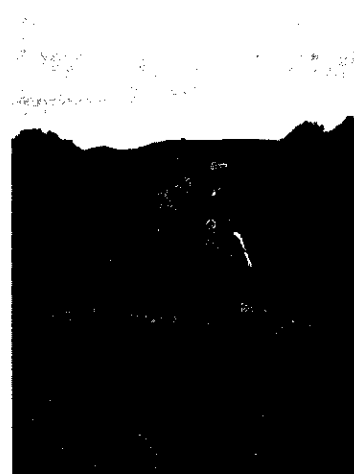


写真4 ステップをゆく老人を呼び止めて

ケーションカンパニーを訪ね、JICA 専門家藤川氏に種々の説明を聞く。

日本からの初の無償援助として、1993年8月に国際衛星通信局にインテルサット地上局の施設設備が供与されたという。

また、市内電話についてもアジア開発銀行（ADB）の協力で、市内ケーブルを新しいものに置換しようとしているとのこと。今まで市内電話は料金を徴収していなかったが、今年7月から有料化した。

古い建物と部屋の様子であったが、そこに最新の施設設備があって、モンゴルと世界とが結ばれていた。これは地上局へ行っても同様であって、3つのパラボラアンテナは、この国の、政治的な歩みを象徴しているかのように思えた。

#### (6)ノミン印刷公社（写真5）

7月30日午前に、ノミン印刷公社を訪ねた。本間隊員が派遣されている。本間隊員は、自宅が印刷業ということで協力隊員を志したという。モンゴル人の所長とともに公社内を案内してくれた。

ここでは、活字の作成、印刷、製本までするという。所長は、見学の終わりに、



写真5 ノミン印刷公社にて

我々を所長室に入れ、教科書と、人形をくれた。学校で教科書は無償とはいえ生徒一人一人には行き渡らず、3～4人に1冊という話であった。

#### (7)モンゴル技術大学

7月30日午後に、モンゴル技術大学を訪ねた。国内で、2番目の規模の大学という。現在は11人の協力隊員がいるとのことである。

この大学とJICAとの提携は、大きな成果を上げている。モンゴル人学生も教官も、専門知識にかかる教育援助を大変評価している。モンゴル人教官と、日本人教官がともに教育に当たるので、特に効果的である。教材や設備の充実のための基礎的援助の要請を、モンゴル政府は日本政府に出した。

#### (8)第一バス公社

7月30日午後、モンゴル技術大学に続いて、第一バス公社を訪ねた。協力隊員が2人配属されている。広い工場内を案内してくれるが、隊員と同じくらい若くて人の良さそうなカウンターパートとその友人たちも同行してくれる。日本政府がODAで、100台無償供与したバスの保守管理を行っているという。

#### (9)23中学校

8月1日午前中、23中学校を訪問した。建物は例によって古いが、立派な構えである。女性校長と、協力隊員の2人が出迎えて、案内してくれた。

校長から次のような話があった。この中学校に入るには試験がある。昨年は900人

応募があつて、100人合格した。1クラス40人で、朝8時から午後1時までと午後1時半から4時半までの2部授業をしている。最初の卒業生は大学の4回生になっている。

校長の案内で、教室などを見て回る。いわゆる黒板はなく、ベニヤ板のような感じの黒板があつた。机や椅子も傷みが激しい。日本から寄贈された図書もあつた。(写真6)

#### 4. モンゴル雑考

(1)知れば知るほど、立ちすくんでしまうほどの状況の中で、この国とこの国の人々のためと、おそらくは自己実現を目指してであろう、隊員や専門家が、困難な条件の中で援助に携わる姿に、心動かされるものがあった。

いくつかの研究所や大学などでは、ロシアの協力がなくなって精彩を欠いているが、かつてそれなりのシステムで機能していたことが窺える。カウンターパートといつてもかなりの人たちがソ連時代にモスクワやイルーツクの大学を出ており、この



写真6 23中学校にて。右は生徒で、左は協力隊員

国の文字どおり知識層に属するのである。世の流れとはいえ英語が幅を利かせ、日本などの援助が入ってくることをどう考えているのであろうか。彼らは、言葉の問題が克服され日本などの進んだ援助機材が入れば、それを使いこなして成果を上げていくのは容易であると感じた。

そして、これらのモンゴルの頭脳とでもいべき人たちが誇りを持ちうるだけの社会的尊敬と、それに見合う収入を確保していくことが急務だと思う。この国が置かれている立場を、おそらくは普通の人たち以上に理解しているはずである。だからこそ、自分の仕事への誇りと愛国心もあつて、今の仕事を続けていると思われる。しかし、いつまでも、特に経済的不遇に耐えることはできない。人材が、大学や研究所から、民間の営利企業に流れていってしまうことになれば、モンゴルは百年の計を誤ることになりはしないか。政治や経済の変化にかかわらず、一国にとって学問研究を重ねた研究者が必要なことは何ら変わらないのであるから。

(2)今、時間を置いて考えてみれば、何よりもモンゴルの表面、それもほんの一部モンゴルの最高のところしか見てないことに気がつく。その国の表面しか見ない……というのはどこの国へ行っても同じであろう。しかし、この国では特にその上層しか見なかった。新しいモンゴルが生まれて5年ほど、日本の援助も日が浅い。この国の発展も、それをサポートする援助もこれからであると感じた。

今は社会主義の手法が否定されて、それ

---

が各分野に及び、混乱を大きくしていると思う。改める部分は多いが、しかし、ソ連のこの国に残した遺産はそうした負の遺産ばかりではないはずである。我々は混合経済体制の中におり、純粋な資本主義も社会主義もありえないのである。とするならば、社会主義体制下の遺産から継承すべきものも、多いのではないかと思われる。

援助する側も援助される側も今は試行錯誤の段階であり、西側の商業ベースに乗りにくいこともあって、今一つはかばかしくない状況があるのであろう。

希望的観測を言うなら、ロシアも歩みつつある道、そして多分中国も……だからモンゴルも一定の発展へのプロセスを経なければならず、歴史的経験を積まなければならないのかもしれない。その速度を速めたり、そのプロセスの中で耐えなければならぬ痛みを軽減できるように努めることが援助だと思ふ。

(3)この国で最も心動かされたのは、ステップを行く遊牧民の姿、ステップに点在するゲルの白い姿を見た時である。無責任の譏りを恐れず言うならば、その時、こうした生活の中にいる人々を、あえて「文明の光」とかの中に引き出していく必要があるのか、それは大きな苦痛を代償としてなお手に入れるべき価値あるものであろうかという思いが湧いてきた。

真の援助は、それを与える者も、受ける者をも幸せにする。我々が援助を行う時、その結果その国の人々から感謝され、良かったと言われるものでなければならない。今、モンゴルで行われつつある援助も、こ

のようであってほしいと願う気持ちでいっぱいである。

## 5. おわりに

8月2日午後、ウランバートル空港から北京へ飛び立った。

我々はこの国で、協力隊員たち、専門家たちが活動している現場を見ることができた。70年の社会主義のくびきから解き放たれたばかりの国モンゴルとモンゴルの人々は、うねり来る政治の波と襲い来る経済の嵐に翻弄されつつも、新しい歩を始めようとしている。その歩調に合わせ、援助していこうとする日本人たちを目の当たりにすることになった。

空港でゲートを出るまで、通訳が見送ってくれて盛んに手を振ってくれる。何か初めて、モンゴルを離れるんだという気がし始めた。中国民航機はウランバートル市の上空からみるみる高度を上げつつ離れてゆき、下にはただ緑の絨毯のようなステップと小さく白いマッシュルームのようなゲルが散見されるようになった。飛行機の座席に深く腰掛けて、目を閉じれば、そこには緑の風が吹き、馬はたてがみをなびかせて、人は緑なすステップを行く姿が浮かぶ。かつて世界をも征服しようとした民族に、またいつの日か栄える日がやってくるのであろうかと思いをはせながら、モンゴルで出会った多くの人たちに、別れを告げた。



# 生徒たちへのメッセージ

## ——高校教師海外研修の体験を語る

今回のタンザニア、モンゴルとホンデュラス・グアテマラのそれぞれのグループを代表してこの教材集の編集委員をしていただいた、清水和夫さん（東京都立江北高校）、服部修さん（埼玉県立川越総合高校）、萩原茂さん（吉祥女子高校）の3名の先生方に、今回の体験を語っていただいた。

### 自分の目で見てみたい

司会 どの先生もこれまでにさまざまな国に行かれています。今回の研修に応募されたきっかけからお話いただけますか？

清水 私は国語の教員で、小論文の指導をしているのですが、毎年、その一環として生徒たちに国際協力事業団のエッセイコンテストへ応募させています。その論文指導をしている時に、生徒の論文にコメントしようとしても、国際協力について実際に知らないこともあり、なかなか思うような指導ができない面がありました。そこで海外での援助の実情を自分の目で見てみたいと思ったのが、今回の海外研修に応募したきっかけで、タンザニアに行きました。

服部 私は学生時代にバックパッカーをやったことがあり、何回か海外を旅行しま

した。当時、紛争中の国以外のアジア諸国はほとんど行きました。モンゴルはビザが取得できず行けなかった国なので、機会があればぜひ行ってみたいと思っていました。チベット仏教にも多少興味があって、とても関心のある国でした。

そういう個人的な背景もあったのですが、実は、埼玉県高等学校国際教育研究協議会の事務局を担当する機会がありまして、国際交流会を協力隊の埼玉県OB会とタイアップして主催したり、文化祭で埼玉県に来ていた技術研修生との研修会を企画したりしました。そんな経験からODAの現場をぜひこの目で見てみたいと思ったわけです。

萩原 中米に行ったのは、今回が初めてのことでした。これまで行ったことがある国を振り返ってみると、基本的には欧米志



清水和夫教諭

向でした。特にアメリカ文化は憧れの対象だったと言えます。しかし年を経るにつれて、欧米志向から、隣国である韓国や中国、そして開発途上国へと関心が移り始めていた時に、中米に行くチャンスがうまく重なったと思っています。

私も国語で小論文を指導していますので、自分の目で見てきたいということがありました。

## 貧しさと豊かさと

司会 実際に行かれてどんな感想を持たれましたか。

清水 先ほど小論文の指導で、生徒たちに十分に指導できなかつたと言いましたが、実は今年の小論文を書かせた時にこういうことを書いた生徒がいました。

「タンザニアではメイズというトウモロコシを挽いたものからウガリを作って、それが主食となっている。しかし日本の援助で自分たちの食べるトウモロコシ畑を潰して、水田を作っている」という批判的な意見でした。恐らく新聞などを読んで書いたのでしょうか、それに対して私の方に十分な知識がなかつたのでうまく指導できなかつたのです。



服部修教諭

ったのです。

しかし今回、タンザニアのキリマンジャロ州での稲作プロジェクトを見て、その生徒の書いていたこととずいぶん違うなと感じました。日本の援助によって、自分たちでトウモロコシを作っていた時よりも3倍以上の収益が上がるという経済効果があったんですね。今まではお米を食べる習慣がなかつたのですが、稲作が広がるにつれて、現在では60%の人々が食べるようになっています。大衆食堂に入ってみると、ご飯を食べている人はたくさんいましたし、食べてみたらおいしかったですね。実際に現場を見て、それが成功して現地の人の自立に役立っていることが分かって良かったと思います。

先日、さっそくその話を生徒にしましたら、かなり興味深く聞いていました。書いた本人は新聞の記事を元にしたそうですが、実際はそうだったのか、もう一度書き直してみると言っていました。

それからもう一つ、タンザニアは最貧国と言われ、見た目にも貧しいのですが、町の中でほとんどスラムを見かけませんでした。これまで訪れた東南アジアでは必ずスラム街があり、路上生活者がたくさんいま



萩原茂教諭



した。貧しいのですが、1人当たり GNPなどの数字から考えるような貧しさとは違う気がしました。マサイ族の村も訪ねたのですが、現金収入はなく、牛を飼い、自給自足の生活をしている。ある意味では豊かな生活をしているのではないかという印象を受けました。豊かであることは物があるかないかということではなく、考え方ではないかと思いました。

**服部** 今のお話に共通すると思うのですが、モンゴルは歴史的に見ても飢餓を経験したことがないといわれるくらい豊かな国です。世界を征し繁栄した歴史を支える土台があるのだと思います。しかし GNP など、数字で見ると限りではアジアではカンボジアに匹敵する貧しい国ということになります。そこで私も感じたのは、真の豊かさとは何なのだろうかということですね。これを今後の研修課題として持ち帰ってきました。

**萩原** 物の貧しさと心の豊かさの関連について、陶芸を指導している日本人専門家の方に質問した時に言われたことが印象的でしたね。「物がなくても心は豊かだ」とか、「物は豊かでも心は貧しい」と言うことがあります。この国は物はなくても心



清水教諭

は豊かだとは私には思えない」と言うんですね。村人は素朴で親切だけれども、素朴だとか親切だということを豊かさと言ってしまうのは違う。陶芸の技術もマヤ文明の頃と基本的には進歩していない、どうしてレベルが上がらず今に至ったかわからない。伝統を守っているといえ言えるし、欲がないといえ欲がないのだが。素朴で親切ということはあっても、トータルとしてそれが豊かさとは言えないと、その方は言うんですね。

## 見えてきた援助の姿

**司会** 専門家や協力隊員との会話を通じて、どんなことが見えてきましたか。

**服部** 今日、造園計画という科目の都市公園の単元の授業の中で、都市とは何か、社会基盤とは何かということにふれモンゴルを事例にあげ、研修で見聞したことを一部紹介しました。研修では実際に援助に携わっている人たちの生の声を聞く機会があって、いろいろ勉強になりました。日本の専門家も協力隊員も国造りの過程で、与え過ぎてしまってもダメ、かといって後に自分たちの仕事が残らないのでは意味がない、というジレンマがあるんですね。援助に対しての批判もあるし、世界中が日本の ODA に注目しているのです。そのような中で、日々悩みながら、前向きに自分の職務に取り組んでいる人たちの存在を頭に置きながら、途上国のようすを生徒たちに伝えられたらと思っています。

**萩原** まだ授業が始まっていないので、生徒には話をしていないのですが、今回の

ことはとてもいい経験になったと思います。協力隊をどう思うか、ODAをどう思うかという時、やはりマスコミの報道で伝えられる「送られた機材が放置されている」とか、「現状にそぐわない援助」という情報が頭にあり、実際の現場はどうなのだろうかと思っていました。また、援助というパンフレットなどで子どもの写真を目にする機会が多かったし、ユニセフによる黒柳徹子さんの派遣などから、貧困や子どもたちを救うという印象が非常に強かったんですね。

実際、ODAで派遣される専門家や協力隊員というのはそれとは少し違う。これは現地でもみんな議論したのですが、白人、混血、インディヘナというように歴然として輪切りにされている社会でトップでも貧困層でもない中間層をどうしようかというところでの技術伝達なのだと思います。

今回、協力隊とプロジェクトを見たのですが、協力隊はどちらかというと個人レベルの協力。プロジェクトは国家レベルの話で、構造的に働きかけるようなもので、この両方を見ることができてよかったですね。教育プロジェクトは、国家の教育の在り方やシステムにまで関わってくるので、一歩間違えば内政干渉にもなりかねない問題がODAにはあることを知りました。

先ほどの送った機材が放置されていたという話ですが、技術移転をした場合、いつまでも付きっきりでいることはできない事情があるんですね。ホンデラスでもグアテマラでも同様らしいのですが、技術を伝えても自分の技量としてとどめ、就職など地位安定のために得て、広がらないという



服部教諭

こともあるという。放置されているのは日本の伝え方というよりも、そこから先へ伝播しないという問題もあるのではないかと思います。実際に技術援助に携わっている人たちと話すなかで、皆さんが一方的な技術援助というスタンスではなく、現地のやり方、状況にあわせて展開している姿を見られてよかったですと思います。

私はいくら援助しても変わっていくには長い年月がかかると思います。個々の努力を超えた、地域と時代の持つ壁はちょっと簡単には超えられないと感じました。ホンデラスで専門家の方々が言っていましたね、「プロジェクトが終わって5年、10年してどうなっていくのだろうか」と。個人個人が精一杯頑張っているところと、なかなか構造的には変わらないというジレンマを生徒たちには伝えたいと思いました。

それは個人的な交流の場面でも考えられることかなと思います。つまり、いわゆる交流という時には、利害関係があるところでは交流しない、双方がお客さんですから、本当のところは分かっていないのかも知れません。生活や政治に踏み込んだところでの交流とか国際協力とは何なのだろうか。このことはこれまで見えてなかったところ

で、今後、問題提起していきたいと思っています。

清水 継続性ということで一言付け加えますと、だいたい諸外国が援助を打ち切ったあと、下降線をたどるのが一般的らしいですね。しかし先ほど申し上げた日本の稲作の援助はもうすでに打ち切っているのですが、農協組織のようなやり方を教えた結果、農民たちが自分たちでお金を出し合って協力し、自立していったということで成功という評価がされています。

### 関心を持つ生徒たち

司会 新学期の授業では、皆さんは生徒たちにいろいろな問題提起を考えられています。生徒側の途上国や開発問題に対する関心はどうですか。

清水 外国というと、一般的には先進国に興味を持っていると言えるでしょう。10

年、20年前は開発途上国に対して非常に無関心だったし、そういうところに行きたいという子はまずいなかった。しかし最近では協力隊員になって途上国へ行きたいという子が増えています。それは女の子の方が多いかも知れません。ただし、協力隊に入って具体的に何をしたいかというところがまだ分からないんですね。心情的にはやってみたいのだけれど、高校生の場合は何をしたいのかということまではいかないのではないですか。

服部 私の学校は昨年まで農業高校だったので、大学進学者の大半が農業分野に進み、卒業生の中には協力隊員に応募した者もいます。高校時代からの専門性を生かしているといえるのでしょうか。最近そういう志を持った生徒が少しずつ増えてきていると思います。

今年、総合学科を持つ高校に変わり、国際協力を携わる志を持った子どもたちのた



後列中央が萩原さん。途上国を訪ねたのは今回が初めて。援助関係者との会話を通して、援助や開発の在り方などを考える旅になった

めのカリキュラムを準備しています。農業高校時代に培ったノウハウや農業の専門性を生かす一つの分野として、さらに発展させたいと考えています。生徒は各自の希望で単位を履修するので、どの程度そのカリキュラムに添った科目選択をしてくれるのかまだ分かりませんが、1年生の段階で、国際協力の経験のある方に講演してもらったりして啓発しています。生徒の感想文などをみても、予想以上に前向きな考えを持つ者もいるようです。最終的にどのような科目を選択し将来に備えるのかは、今のところ未知数ですね。

**萩原** 私どもはアメリカ、オーストラリア、カナダ、中国、韓国に姉妹校があって、海外との交流がありますし、留学経験者も多いです。以前に担任したクラスでも46～47人中、15～16人は留学経験者でした。開発途上国に特別に関心がある子がどれくらいかとは言えませんが、一般的には海外

への関心は高いですね。姉妹校との交流などを見ていると、表面的かもしれませんがすぐに仲良くなれます。子どもたちはもともと広い視点を持っていて、最終的にはある価値観にとられるのかもしれませんが、中学、高校の時点ではニュートラルだと思います。だから触れあった時から偏見がない。そこから良い意味で関係を広げていければ、現代の中高生というのは非常にいい可能性を持っています。

**服部** 君たちにこれが役立つからぜひやりなさいという押し付けでもいけない。どうしたら生徒たちの目が開発途上国の方に向くきっかけになるのか、試行錯誤ですね。

**司会** 今回の経験を生かして、国際協力に関心のある生徒を育てていただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

(この座談会は1996年9月5日に収録したもので、「国際協力」11月号に掲載されました)



## 第4章

# 平成8年度高校教師海外研修資料

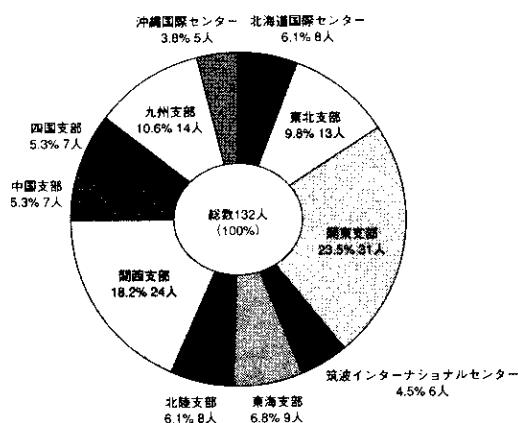
## 1. 募集概要

募集期間：平成8年1月15日～4月10日

応募総数：132人

協力機関：全国高等学校国際教育研究協議会

### 支部別応募状況



## 2. 事前研修とその内容

### (1) 支部研修

実施時期：平成8年6月～7月上旬

実施場所：国際協力事業団各国内支部・  
沖縄国際センター

研修内容：①開発途上国の現状と課題  
②ODAとJICAについて

### (2) 事前研修

実施時期：平成8年7月23日～24日

実施場所：東京国際研修センター

### 事前研修日程

1日目 [7月23日(火)]

14:30～14:35

開講挨拶 (広報課長代理 小野修司)



14:35～14:45

海外研修に参加するにあたって (全国  
国際教務局長 山口敏雄氏)



14:45～15:15

自己紹介/TIC研修日程説明

15:30～16:30

JICA事業について (概要説明/質疑応答)

16:45～18:00

グループ別ディスカッション

①開発教育について

参加者：萩原・松田・森本・藤本・赤穂・三吉・高野・近藤・氏家・中村

②国際協力について

参加者：桧山・川端・宮崎・桐野・屋田・山崎・栗原

③国際交流活動について

参加者：橋口・江崎・鎚谷・斉藤・後藤・服部・木内

④海外研修に際して

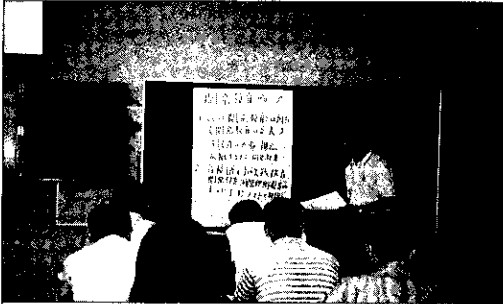
参加者：菊地・清水・砂原・石川・長浜

2日目 [7月24日(水)]

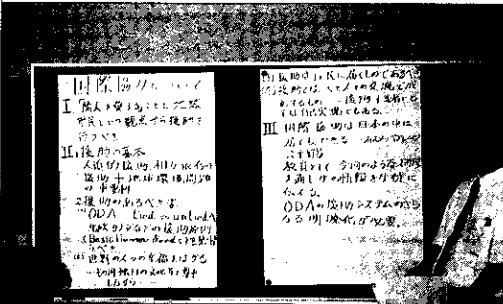
9:30~10:15

グループ別ディスカッションの発表

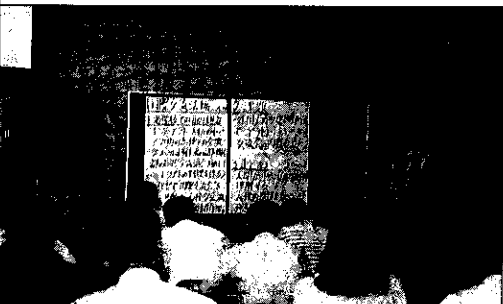
①開発教育について (発表者: 高野先生)



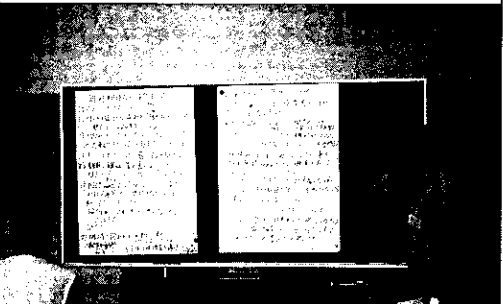
②国際協力について (発表者: 山崎先生)



③国際交流活動について (発表者: 鎌谷先生)



④海外研修に際して (発表者: 清水先生)



10:30~12:00

コース別研修/訪問国情報

13:30~16:00

開発教育ワークショップ

国際理解教育センター (ERIC)

講師: 福田紀子氏

(資料一部掲載P104~105参照)





16:00~17:15

平成7年度参加者による実践事例発表

マレーシア研修参加

埼玉県杉戸農業高等学校 青木孝夫氏



18:00~19:30

結団式



## 開発教育ワークショップ

講師：国際理解教育センター（ERIC）

福田紀子氏

与えられた予算の範囲でどのような援助をするか各グループで考える

## プロジェクト・リスト

あなたは、10のプロジェクトのリストを手にしています。それぞれのプロジェクトはあなたの国の出生率を下げることを目的としたものです。与えられている予算は1億5000万円です。あなたはどの援助を組み合わせる実施しますか？

1. ラジオ、テレビ、新聞、看板、チラシ、著名人などの協力を得た全国規模のメディア・キャンペーンを実施する。キャンペーンでは、保護者に対して、女の子を小学校に通わせることを奨励している。予想コスト：750万円
2. 小学校教師や小学校関係者（運営に携わる）を対象に一連のワークショップを行う。ワークショップでは「より多くの女の子を小学校に通わせることの重要性和その就学率を上げるための政策」についてが話し合われる。予想コスト：500万円
3. 財界のリーダーと、労働者のニーズについ

て話し合うための一連のミーティングを実施する。その後、国中にいくつかの養成センターを設立し、女性が必要な労働技術を学ぶことができるようにする。予想コスト：400万円

4. 法的システムの中での女性の権利についての調査・査定を行うための委員会を設立する。必要であれば、結婚・離婚・所有・相続に関する権利を女性に与えるための法律制定のための立法活動を行う。予想コスト：300万円
5. 村やその近郊の地に健康管理委員を送り、女性に家族計画やその結果得られる利点などについてを教える。予想コスト：健康管理委員1人につき250万円
6. 地元の女性に研修を行い、家族計画委員として、近隣の居住者に家族計画についての教育を行い、バース・コントロールを行う女性

に対してのフォローアップを行うことのできる人材を育成する。予想コスト：家族計画委員1人につき100万円

7. 国中に診療所を作り、国民が診療所へ1日以上かけて行かなければならないという状況をなくす。予想コスト：診療所1カ所につき950万円

8. バース・コントロールや授乳の仕方などについての全国規模のメディア・キャンペーンを実施する。予想コスト：750万円

9. ラジオと新聞を利用した一連の首相演説を

計画する。演説の内容は、人口増加比率を下げることの重要性を国民全体に訴え、全国民が自国の未来に責任を持つことを激励するものである。予想コスト：200万円

10. 国内の2つの大都市で、家族が頑丈な簡易住宅を建てるための資金を良心的な利率で借り入れることができ、なおかつ最終的にはその家を持ち家にすることができるというプログラムを実施する。予想コスト：一件につき900万円

(提供：ERIC)

## 「私と地球の今」学習教材

究極の選択～あなたに残されたエネルギーの使い道 ゲーム

1. 各自が自分の生活に必要なものを1日10個を上限に、別紙「エネルギー週間利用表」の項目より選ぶ（項目を付け足すこともできる）
2. なぜ必要なかをグループで話し合う。
3. それを30%削減する。
4. どのようにすれば消費エネルギーを減らせるか検討する。

エネルギー週間利用表

	月	火	水	木	金	土	日
車に乗る							
水洗トイレを使う							
風呂に入る							
照明器具を使う							
調理する							
電気掃除機を使う							
洗濯機を使う							
冷蔵庫を使う							
エアコンを使う							
暖房器具を使う							
テレビを見る							
ステレオを聞く							
パソコン・ワープロを使う							
エレベーター・エスカレーター							

(提供：ERIC)

### 3. コース別日程／参加者氏名

〈ホンデュラス・グアテマラ班〉

月日(曜)	午 前	午 後
7.25(木)	17:20 成田発	
7.26(金)	11:25 マイアミ発 11:50 テグシガルバ着	16:00 JICA事務所訪問、打ち合わせ 17:00 大使館表敬訪問 19:30 事務所との懇親会
7.27(土)	8:30 協力隊員活動現場 LUIS BOGRAN工業高校 10:00 協力隊員活動現場 VILLA OLINPICA	12:00 協力隊員との懇談会
7.28(日)	8:00 市内視察(歴史博物館等) 11:00 VALLE DE ANGELES着	15:30 テグシガルバ着
7.29(月)	9:00 SIGUATEPEQUE着 海外ボランティア活動視察(陶器生産) 10:30 農業開発研修センター(CEDA)視察 かんがい排水技術開発プロジェクト	15:00 テグシガルバ着 国立教育実践研究所(INICE)視察 19:00 専門家、シニア海外ボランティアとの懇談会
7.30(火)	7:20 テグシガルバ発 9:20 グアテマラ着 11:00 大使館表敬訪問(女子初等教育プロジェクトについて)	14:30 グアテマラ市内視察 グアテマラJOCV事務所訪問 19:00 事務所主催懇親会
7.31(水)	10:30 サンタ・ルシア・ウタトラン市着 11:00 協力隊員活動現場視察(体育・理科)	14:30 パナハッチェル市着
8.1(木)	11:00 チマルテナンゴ市着 協力隊員活動現場視察(野菜)	15:00 プロジェクト方式技術協力視察(熱帯病研究プロジェクト)
8.2(金)	10:15 グアテマラ発	
8.3(土)	11:15 ダラス発	
8.4(日)	14:05 成田着	

氏名	所属学校名 所在地	担当教科
河村喜美江	埼玉県立和光国際高校 〒351-01 埼玉県和光市広沢4-1	家庭
萩原 茂	吉祥女子高校（東京） 〒180 東京都武蔵野市吉祥寺東町4-12-20	国語
桧山 伸夫	茨城県立日立第二高校 〒317 茨城県日立市鹿島町3-2-1	理科
川端 正明	石川県立小松明峰高校 〒923 石川県小松市平面町へ72	地理歴史
松田 安弘	大阪府立長尾高校 〒573-01 大阪府枚方市長尾家具町5-1-1	地理歴史 公民
森本 恭弘	兵庫県立尼崎稲園高校 〒661 兵庫県尼崎市猪名寺3-1-1	英語
橋口三恵子	三田尻女子高校（山口） 〒747 山口県防府市東三田尻1-2-14	英語
藤本 文昭	今治明德高校矢田分校（愛媛） 〒794 愛媛県今治市阿方壱丁地甲287	英語
宮崎 秀樹	鎮西学院高校（長崎） 〒854 長崎県諫早市栄田町1057	英語
江崎 正俊	福岡県立八女農業高校 〒834 福岡県八女市大字本町1-160	農業



農業開発研修センター（CEDA）にて

<タンザニア班>

月日 (曜)	午 前	午 後
7.25 (木)	11:00 成田発	22:25 ロンドン発
7.26 (金)	9:00 ナイロビ着	ナイロビ→アルーシャ アルーシャ→レイクマニャラ N.P.
7.27 (土)	レイクマニャラ N.P.→ンゴロン ゴロ C.A. ナショナルパーク監視車両維持 管理現場視察	ンゴロンゴロ C.A.→レイクマニ ャラ N.P.
7.28 (日)	国立公園視察	レイクマニャラ N.P.→モシ
7.29 (月)	9:00 モシ Tech. Sch. 視察 (協力隊員活 動視察)	KATC (農業技術プロジェクト) 視察 モシ在留専門家・隊員との懇親 会
7.30 (火)	モシ→サメ サメ林業技術プロジェクト視察	サメ→タンガ
7.31 (水)	タンガ母子保健技術プロジェク ト視察	13:00 昼食会 ガラノス Sec. Sch 視察 協力隊員との交流会
8.1 (木)	タンガ→バンガニ 協力隊員活動視察 (漁具漁法)	バンガニ→タンガ→ダルエスサ ラーム
8.2 (金)	国立ムヒンビリ病院視察 (技協 プロジェクト) JICA 事務所訪問・報告 ダルエスサラーム市内視察	事務所主催昼食会 19:45 ダルエスサラーム発
8.3 (土)		13:25 ロンドン発
8.4 (日)	9:05 成田着	

氏名	所属学校名 所在地	担当教科
赤穂 悦生	北海道名寄農業高校 〒096 北海道名寄市緑丘3-3	農業
鎚谷 孝志	山形県立庄内農業高校 〒999-76 山形県東田川郡藤島町大字藤島字古楯跡221	工業
菊地 秀勝	福島県立二本松工業高校 〒964 福島県二本松市榎戸1-58-2	地理歴史 公民
桐野 輝久	神奈川県立横浜平沼高校 〒220 神奈川県横浜市西区岡野町1-5-8	国語
斉藤 宏	東京都立八潮高校（定時制） 〒140 東京都品川区東品川3-27-22	理科
清水 和夫	東京都立江北高校 〒120 東京都足立区西綾瀬4-14-30	国語
後藤 映子	岐阜県立大垣東高校 〒503 岐阜県大垣市美和町1784	家庭
三吉 章雄	大阪府立農芸高校 〒587 大阪府南河内郡美原町北余部595-1	農業
高野 剛彦	神戸市立赤塚山高校 〒658 兵庫県神戸市東灘区住吉山手7-2-1	公民
近藤 冴子	徳島県立阿波高校 〒771-14 徳島県板野郡吉野町大字柿原字ヒロナカ180	英語



ンゴロンゴロ自然保護区で。機械整備の技術指導をしている稲見専門家（前列中央）と

<モンゴル班>

月日(曜)	午 前	午 後
7.25(木)	10:40 成田発	
7.26(金)	10:35 北京発 13:45 ウランバートル着	16:30 JOCVモンゴル事務所訪問および 打ち合わせ 18:30 事務所主催懇親会
7.27(土)	10:00 科学教育省高等教育局長訪問	14:00 グラインエージ、国立デパート、 第3地区ショッピングモール視察 (食品市場等)
7.28(日)	10:00 市内視察(終日) サイサント ルゴイ、スフバートル広場、国 立自然史博物館	ラレルジ
7.29(月)	9:45 モンゴルテレコミュニケーション カンパニー視察 11:00 ナラン衛星地球局	14:20 モンゴル地質鉱物資源研究所
7.30(火)	10:00 ノミン印刷公社視察	14:00 視察モンゴル技術大学 ユニックスコンピューター視察 16:00 第一バス公社
7.31(水)	終日 ナイランダム国際子供キ ャンプ場訪問	ウランバートル市郊外の散策
8.1(木)	10:00 23中学校訪問(モンゴル人教師 との懇談)	13:00 国立美術館 14:30 国立民俗歴史博物館 16:00 第3火力発電所 17:00 ガンダン寺
8.2(金)	10:00 「モンテックス」カシミヤ工場	14:35 ウランバートル発
8.3(土)		15:00 北京発 19:15 成田着

氏名	所属学校名 所在地	担当教科
氏家 仁	宮城県古川高校 〒989-61 宮城県古川市南町2-3-17	公民
服部 修	埼玉県立川越総合高校 〒350 埼玉県川越市小仙波町5-14	農業
木内 清	長野県立小諸高校 〒384 長野県小諸市甲大畑4081-4	地理歴史
砂原美和子	富山県立上市高校 〒930 富山県中新川郡上市町齊神新444	地理歴史
屋田 洋子	プール学院高校(大阪) 〒544 大阪府大阪市生野区勝山北1-19	保健体育
中村 義一	広島県立西条農業高校 〒739 広島県東広島市鏡山3-16-1	農業
山崎 誠一	愛媛県立松山西高校 〒791 愛媛県松山市久万ノ台甲1485-4	公民
栗原希代子	九州女学院高校(熊本) 〒860 熊本県熊本市黒髪3-12-16	公民
石川 正行	大分県立国東農工高校 〒873-05 大分県東国東郡国東町大字鶴川1974	農業
長浜 雅仁	沖縄県立那覇西高校 〒901-01 沖縄県那覇市字金城180	保健体育



ゲルの前にて



## 4. 開発教育参考資料

開発教育や開発問題について、もっと詳しく知りたい方々のために、開発教育を実施している団体や、教材として役立つような教材／素材をリストアップしてみました。国際協力事業団（JICA）刊行のものは、各支部・センターにお問い合わせください。

### (1) 開発教育関係 NGO・団体

機関名	所在地	活動*
国際理解教育センター (ERIC)	〒114 東京都北区東田端1-14-1 岩瀬ビル TEL03(3800)9414 FAX03(3800)9416	①～⑤ ⑥施設利用、カリキュラム開発など
開発教育協議会	〒169 東京都新宿区西早稲田2-3-18-76 TEL03(3207)8085 FAX03(3207)8486	①～③、⑤、 ⑥開発教育情報センター会館
財団法人 国際協力推進協会 (APIC)	〒106 東京都港区南麻布5-2-32 第32興和ビル TEL03(5423)0571 FAX03(5423)0576	①～③、 ⑥国際協力プラザ会館
社団法人 協力隊を育てる会	〒160 東京都新宿区霞ヶ丘町15 日本青年館内 TEL03(3402)2153 FAX03(3402)3263	①～③、⑤、 ⑥小さなハートプロジェクト
社団法人 青年海外協力協会	〒106 東京都港区南麻布5-10-24 第二佐野ビル7階 TEL03(3446)3651 FAX03(3446)3652	①～③、⑤

### (2) 国際協力 NGO 団体の開発教育

機関名	所在地	活動*
NGO 活動推進センター (JANIC)	〒101 東京都千代田区神田錦町2-9-1 斎藤ビル5階 TEL03(3294)5370 FAX03(3294)5398	①～③、⑤、 ⑥NGO 活動推進センター資料室会館
シャプラニール＝市民による海外協力の会	〒169 東京都新宿区西早稲田2-3-1 早稲田奉仕園スコットホール内 TEL03(3202)7863 FAX03(3202)4593	①～⑤、⑥作文・小論文コンクール、バングラデシュ製品輸入販売
曹洞宗国際ボランティア会 (SVA)	〒170 東京都豊島区巣鴨1-28-5 ヒカリビル202号 TEL03(3945)0981 FAX03(3942)7900	①～⑤、 ⑥図書館会館
財団法人 日本ユニセフ協会 (ユニセフ日本委員会)	〒160 東京都新宿区大京町31-10 第一大京ビル TEL03(3355)3221 FAX03(3355)3810	①～③、 ⑥図書館会館
社団法人 日本ユネスコ協会連盟 (日ユ協連)	〒150 東京都渋谷区恵比寿1-3-1 朝日生命恵比寿ビル12階 TEL03(5424)1121 FAX03(5424)1126	①～⑤、 ⑥ユネスコ広報センター会館

\*①セミナー開催②講師の派遣③資料の収集・開発・提供④スタディツアー⑤機関誌の刊行⑥その他

## (3) 開発教育教材／素材

分類	タイトル	内容	問い合わせ先	備考
本・冊子・パンフレット	開発教育ダイレクトリ- '94	日本の開発教育を進める団体の活動を紹介した冊子	開発教育協議会 TEL03(3207)8085	有料
	開発教育ハンドブック	各種開発教育実践例を紹介した冊子		
	開発教育教材カタログ '95	開発教育に役立つ本や映像、ゲームなどを紹介した教材カタログ		
	ワールドスタディーズ ～学び方・教え方ハンドブック	国際理解教育のさまざまな事例を説明した本	ERIC TEL03(3800)9414	有料
	フードファーストカリキュラム ～食べ物を通して世界を見つめよう	身の回りの「食」を通して世界とのつながりを説明した本		
	新しい開発教育のすすめ方	テーマごとに模擬授業を行い、各分科会で授業案を作成し成果をまとめた、教師や社会教育現場で新しい開発教育に取り組む指導者のための参考資料	古今書院 発行 TEL03(3291)2757	有料
	開発教育実践の手引き	開発教育の実践例を掲載した冊子	APIC TEL03(5423)0571	有料
	国際理解教育展開事例集	国際交流・帰国子女教育・科目別国際理解教育の事例を紹介した本	一橋出版 発行 TEL03(3392)6021	有料
	南北問題と開発教育	南北問題とは何か、開発教育とは何かを解説した本	田中治彦 著 亜紀書房 発行 TEL03(5280)0261	有料
	地球と語りたい	高校教師海外研修参加者教師による、開発教育実践のための事例集 平成6年度版	JICA広報課 TEL03(5352)5029	無料
地球と共に生きる	高校教師海外研修参加者教師による、開発教育実践のための事例集 平成7年度版			
いま私たちにできること	中学生・高校生を対象に国際協力、開発教育について考えてもらうことを中心にまとめた副読本			



「地球と語りたい」



「地球と共に生きる」



「いま私たちにできること」

分類	タイトル	内容	問い合わせ先	備考
ビデオ・スライド	地球の仲間たち (Part I, II)	途上国の人々と日本人の人々の暮らしを「服装」「食べる」「子供たちの生活」などの面から紹介したスライド	開発教育を考える会 TEL0462(55)1867	貸出無料
	開発教育キット (Part 1～4)	途上国の児童画スライド (Part 1) 「動くアジア」スライド (Part 2) 「アジアのうねり」ビデオ (Part 3) 「アフリカ大好き」ビデオ (Part 4) スライド・ビデオと教師用シナリオがセットになった開発教育用の教材	APIC TEL03(5423)0571	貸出無料
	開発途上国ってどんな国？ ～小さな友情から大きな夢へ～	日本人の少年が途上国を訪れ、現地の生活の困難さを目の当たりにし、途上国を認識していくアニメーションビデオ	外務省 TEL03(3580)3311	貸出無料
	約束 ～アフリカの水と緑～	日本人の少年とアフリカの遊牧民の子供との友情を描くアニメーションビデオ	JICA 各国内支部 (p.115参照)	貸出無料
	それぞれの地平線	ケニア、ブラジル、カンボディアの援助を通じて、技術協力の意義、役割を紹介	JICA 各国内支部 (p.115参照)	貸出無料
定期刊行物	国際協力	途上国の現状やJICA事業に関するさまざまな情報を取り扱ったJICAの広報誌 (月刊)	JICA 広報課 (p.115参照)	有料 ¥500
	クロスロード	「顔の見える援助」の最前線で活躍している青年海外協力隊員の生の声を伝える雑誌 (月刊)	JICA 青年海外協力隊事務局 TEL03(3400)7261	有料 ¥310
	国際開発ジャーナル	ODAと国際協力の系統的情報を網羅するわが国唯一の専門月刊誌 (月刊)	国際開発ジャーナル社 TEL03(3584)2191	有料 ¥850
	国際協力プラザ	国内外の国際協力に関わる情報を、一般市民向けにわかりやすく掲載している情報誌 (月刊)	APIC TEL03(5423)0571	有料 ¥500

## (4) JICA各支部問い合わせ先

## 本部

〒151 東京都渋谷区代々木2-1-1 新宿マインズタワー12階

総務部広報課

TEL 03(5352)5029 FAX 03(5352)5032

## 北海道国際センター（札幌）

〒003 北海道札幌市白石区本通16丁目南  
4-25

TEL 011(866)8333(代)

FAX 011(866)8382

## 北海道国際センター（帯広）

〒080-24 北海道帯広市西20条南6-1-2

TEL 0155(35)1210(代)

FAX 0155(36)2582

## 東北支部

〒980 宮城県仙台市青葉区一番町4-6-1

仙台第一生命タワービル15階

TEL 022(223)5151(代)

FAX 022(227)3090

## 二本松青年海外協力隊訓練所

〒964 福島県二本松市永田字長坂4-2

TEL 0243(24)3200(代)

FAX 0243(24)3214

## 筑波国際センター

〒305 茨城県つくば市高野台3-6

TEL 0298(38)1111(代)

FAX 0298(38)1119

## 関東支部

〒336 埼玉県浦和市北浦和4-5-5

北浦和大栄ビル7階

TEL 048(834)7770(代)

FAX 048(834)7775

## 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所

〒399-41 長野県駒ヶ根市赤穂15

TEL 0265(82)6151(代)

FAX 0265(82)5336

## 東海支部

〒460 愛知県名古屋市中区丸の内2-4-7

愛知県産業貿易館西館8階

TEL 052(221)7103(代)

FAX 052(201)9516

## 北陸支部

〒920 石川県金沢市本町1-5-3

リファールビル3階

TEL 0762(33)5931(代)

FAX 0762(33)5959

## 大阪国際センター

〒567 大阪府茨木市西豊川町25-1

TEL 0726(41)6900(代)

FAX 0726(41)6910

## 中国国際センター

〒739 広島県東広島市鏡山3-3-1

TEL 0824(21)6300

FAX 0824(20)8082

## 四国支部

〒760 香川県高松市亀井町5-1

百十四ビル13階

TEL 0878(33)0901(代)

FAX 0878(37)0747

## 九州国際センター

〒805 福岡県北九州市八幡東区平野2-2-1

TEL 093(671)6311(代)

FAX 093(663)1350

## 沖縄国際センター

〒901-21 沖縄県浦添市字前田1143-1

TEL 098(876)6000(代)

FAX 098(876)6014

## 編集後記

俳優のS氏はいつも忙しい公演の合間をぬってボランティア活動をしている。先日、彼がテレビでこんなことを言っていた。「物やお金を送るだけでは良い社会にならない。自立して生活できるようにバックアップすべきではないでしょうか」。この言葉に私は深く共感した。

開発途上国に対する援助もこれと同じようなことがいえるのではないだろうか。今回、高校教師海外研修では、多くの専門家や青年海外協力隊の方とお会いしたが、なかでも、KATC（キリマンジャロ州農業技術者訓練センター）で稲作の指導をしている方の話には説得力があった。「他国のプロジェクトでは援助が打ち切られた後、下降線をたどる傾向があるが、私たちは援助が打ち切られた後も、農協のような組織を作ることを教えた。その結果、今では自立への道を歩み始めた」という。これこそ援助の成功例といえよう。

この冊子は、私たちの海外研修の報告書でもあるが、私たちが実際に研修して学んだことを、一人でも多くの人々に知ってもらいたい、できれば授業で役立ててほしい、そんな願いを込めて、副題を「授業に役立つ開発教育教材集」とした。今後の開発教育の一助になれば幸いである。

最後に、今回の研修でお世話になった皆様に心からお礼を申し上げます。  
(K.S.)

### 「教室から地球へのメッセージ」

平成8年度 高校教師海外研修 ～授業に役立つ開発教育教材集～

---

平成9年2月発行

発行者 国際協力事業団

〒151

東京都渋谷区代々木2丁目1番1号

新宿マインズタワー 12階

電話 03-5352-5029

---

©1997 国際協力事業団 Printed in Japan  
この冊子は再生紙を使用しています。



平成8年度 高校教師海外研修  
～授業に役立つ開発教育教材集～  
教室から地球へのメッセージ

